

埋蔵文化財調査報告書 103

貞養院遺跡（第2次）

清水寺遺跡（第6次）

2025

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は令和5(2023)・令和6(2024)年度に名古屋市教育委員会が実施した、市内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した発掘調査は、貞養院遺跡(第2次)・清水寺遺跡(第6次)であり、その概要は以下のとおりである。

貞養院遺跡(第2次)

調査期間	令和6年7月5日～7月19日
調査位置	名古屋市西区幅下一丁目1021番5
調査面積	51.04m ²
担当者	花木ゆき乃・樋田泰之

清水寺遺跡(第6次)

調査期間	令和5年4月27日～6月2日
調査位置	名古屋市緑区鳴海町字清水寺35, 36
調査面積	140m ²
担当者	杉浦裕幸・樋田泰之・林田愛美

- 3 調査に関する事務及び現地調査は、名古屋市教育委員会文化財保護室(令和6年4月～文化財保護課)が担当した。
- 4 本書の執筆は各調査担当が行った。その分担については各調査報告の目次に示した。なお、全体の編集は樋田が行った。
- 5 調査の記録や遺物の整理は、調査担当の他、安藤明子、上田玲子、小川敦子、小浦美生、酒井史子、仲間理恵、樋上佐知子、六十蒔緑、山本雅代、水野裕之、村木望子が行った。

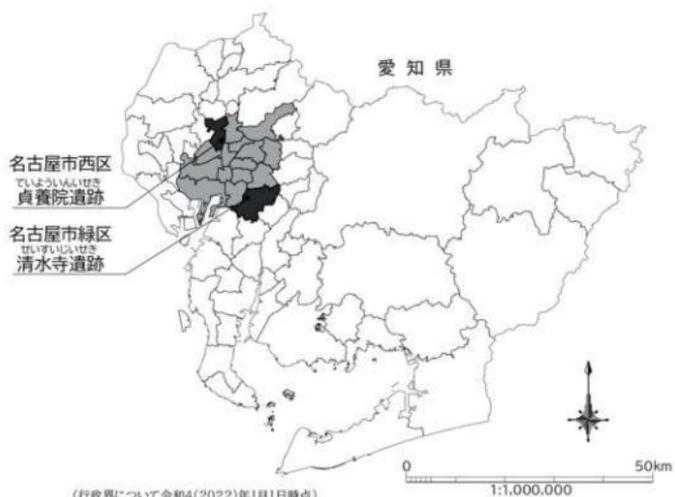
凡 例

- 1 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第七系に準拠し、世界測地系(測地成果2011)にて表記している。メートル(m)単位での表記を基本とする。
- 2 標高は全てT.P.(東京湾平均海面高度)による。(T.P.+1.412=N.P.(名古屋港基準面))
- 3 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2021年版 日本色研事業株式会社)を用いた。
- 4 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
- 5 調査および報告書の印刷は令和5・6年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金の交付を受けて実施した。
- 6 調査記録・出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。
- 7 遺構の表記に関するものについては、下記文献を参考にした。

文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき』2016 同成社

目次

例言・凡例	ii
目次	iii
貞養院遺跡(第2次)	(花木)
第1章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第2章 調査の経緯	5
第1節 過去の調査	5
第2節 調査に至る経緯	5
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	7
第4章 まとめ	18
清水寺遺跡(第6次)	
第1章 序説	33
第1節 遺跡の立地・地理的環境	(榎田) 33
第2節 周辺の遺跡・歴史的環境	(榎田) 33
第3節 過去の調査	(榎田) 36
第4節 確認調査・工事立会	(杉浦) 43
第2章 調査の方法と成果	46
第1節 調査に至る経緯	(杉浦) 46
第2節 調査経過(抄)	(榎田) 47
第3章 遺構と遺物	(杉浦・榎田) 48
第4章 まとめ	74
第1節 弥生時代から古墳時代の清水寺遺跡	(杉浦) 74
第2節 清水寺遺跡6次調査出土の壁土について	(榎田) 77
第3節 絵図・地籍図との比較	(榎田) 79
報告書抄録	



(行政界について令和4(2022)年1月1日時点)

上記図面は国土地理院作成の「数値地図(国土基本情報)」の行政区画データから整備した。

貞養院遺跡 (第2次)

例言

- 1 本書は名古屋市西区幅下一丁目に所在する貞養院遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は個人住宅建設に伴う記録保存調査として名古屋市教育委員会が令和6年7月に実施した。
- 3 調査、整理作業及び報告書の作成は花木ゆき乃・樋田泰之が担当した。遺物写真は杉浦裕幸が撮影した。
- 4 鉄洋・羽口については深谷淳氏(名古屋市博物館)からご教示いただいた。
- 5 遺物の編年については、主に下記文献を参考にした。

◆灰釉陶器、瀬戸・美濃製品

藤澤良祐 2007「第1章 総論 第2節灰釉陶器から山茶碗生産へ」・「編年表」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

中野晴久 2012「編年表」『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県

◆肥前陶磁器

大橋康二 2000「1九州陶磁概論」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会

盛峰雄 2000「陶器の編年 1. 甕・皿」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会

野上建紀 2000「磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小杯・皿・紅皿・紅蓋口」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会

目次

図1 遺跡の位置と周辺の地形	3
図2 遺構平面図/西壁・北壁土層断面図	9
図3 東壁土層断面図/SK05・SK06 遺物出土 状況図・土層断面図	10
図4 南壁(東区)土層断面図/ SK07 検出状況図	11
図5 遺物実測図(SK01・SK02)	12
図6 遺物実測図(SK03・SK04)	13
図7 遺物実測図(SK05・SK06)	14
図8 遺物実測図(SK06・表土等)	15
図9 愛知県名古屋区市街地籍全区 天 二十ノ十三(幅下部分拡大)	19
図10 尾府全区 上宿及巾下ノ二(幅下部分拡大)	19
図11 天明年間名古屋市中支配分図 (幅下部分拡大)	19
図12 万治年間名古屋図	20
図13 万治年間名古屋図(幅下部分拡大)	20

表目次

表1 遺物観察表	16
表2 遺物観察表(写真のみ掲載遺物)	18

図版目次

図版1	21
図版2	22
図版3	23
図版4	24
図版5	25
図版6	26
図版7	27
図版8	28
図版9	29
図版10	30

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

名古屋市は本州中央部の濃尾平野に位置し、緩やかな東高西低の地勢である。その地形は、東部の丘陵地、中央部の台地、北部・西部・南部の低地（沖積地）の大きく3つに分けることができる。台地は熱田台地と呼ばれ、台地の北西端に名古屋城が位置する。台地と低地の境には名古屋城築城に際して開削された堀川が南北に流れている。

貞養院遺跡は西区幅下一丁目に所在する。低地部にあたり、名古屋城とは直線距離で約850m¹である。

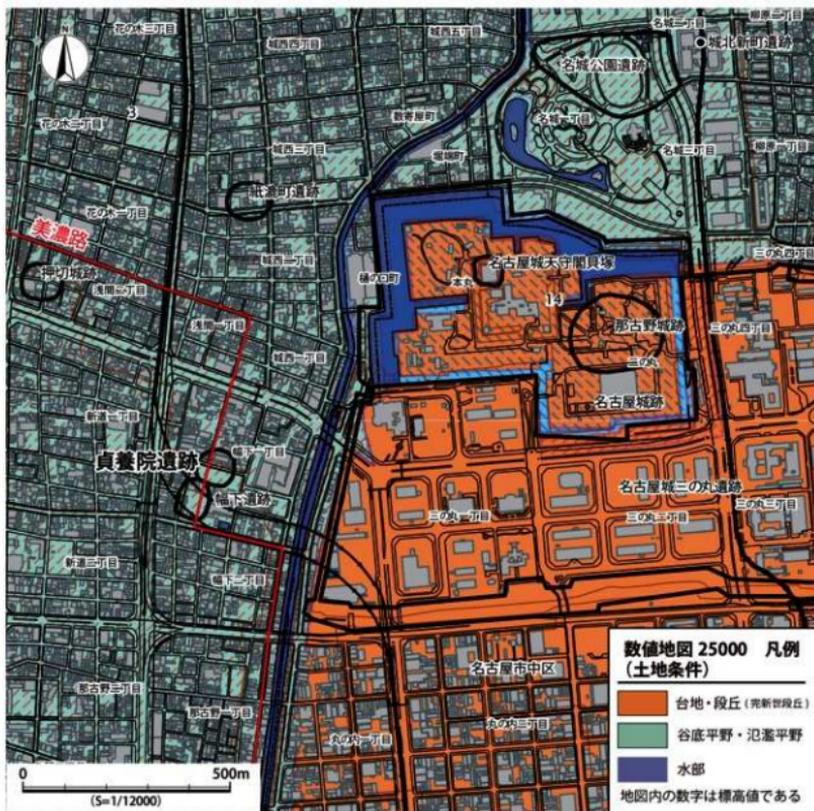


図1 遺跡の位置と周辺の地形

1：国土地理院地図にて名古屋城本丸中心から調査区までを計測した。

第2節 歴史的環境

貞養院遺跡は東海道宮宿（現在の名古屋市熱田区）と中山道垂井宿（現在の岐阜県不破郡垂井町）を結ぶ美濃路に隣接している。美濃路は名古屋城築城と城下町の造成に伴い、人や物資輸送の主要ルートとして整備され、重要な街道として利用された。美濃路と並行して流れる堀川も名古屋城築城に際して開削された。遺跡周辺は堀川と江川（現在は近代に暗渠化されて市道江川線となっている）に挟まれた地域で、城下町期は堀川寄りには武家地が、江川寄りには町人地が広がっていた。堀川沿いの舟運を利用する上でも便利で商家も多く集まった地域である。

「貞養院」の遺跡名はもともと当地に所在した寺名による。『複製版名古屋史 社寺編』（1980）によると、貞養院は西区南藤匠町二丁目の西側にあり、東区東門前町の西蓮寺の塔頭として建立され、明治16年（1883）に西区に移ったという。それは現在の幅下公園付近にあたる。今回の調査地は幅下公園から北へ15mほどの場所に位置する。周辺には以下の遺跡がある（図1）。

幅下遺跡 貞養院遺跡に隣接し、現在の名古屋市立なごや小学校の敷地内を中心に遺跡が広がっている。名古屋城下町北西部の武家地や町人地に広く敷設された上水道である、巾下水道¹の一部と思われる木樋や竹管・井戸のほか、石垣や地割の溝が検出された。陶磁器類に加え、漆器碗や下駄などの木製品も出土している。

那古野城跡 現在の名古屋城二之丸付近にあったと考えられている。室町時代前期には那古野の地に本拠があったとされる今川氏の一族（今川名児耶氏）が築いた。後に織田信長の父・織田信秀が那古野城を奪取した。信秀が古渡城（現在の名古屋市中区）を築いて居を移すと信長に那古野城を譲ったが、清洲城に信長が移った後、しばらくして廃城になったとされている。

名古屋城跡 慶長15年（1610）から徳川家康の命で築城された。本丸・二之丸・西之丸・御深井丸及び三の丸の土塁・空堀が国の特別史跡に、二之丸庭園は名勝に指定されている。天守は昭和20年（1945）の名古屋大空襲で焼失したが、戦後に外観復元されている。本丸御殿も天守と共に空襲で焼失したが、襖絵や天井板絵などは疎開のため取り外されて焼失を免れ、重要文化財となっている。本丸御殿は江戸時代の文献や戦前の写真、実測図などをもとに復元された。

名古屋城三の丸遺跡 名古屋城跡の南側及び東側で内堀と外堀に挟まれた範囲に位置し、上級武家屋敷等が配置された場所にあたる。これまでに20を超える地点で発掘調査が行われ、旧石器時代以来の人々の生活の痕跡が見ついている。令和5年（2023）の名古屋第4地方合同庁舎整備等事業に伴う（公財）愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査では、近世武家屋敷が造られる以前の那古野城に関連すると見られる大溝や近世武家屋敷の庭園遺構が見ついている。

名城公園遺跡 江戸時代には尾張藩の下御深井御庭、明治時代以降は陸軍の名古屋城北練兵場があった場所である。令和3年（2021）に行われた試掘調査によって古墳時代を中心とする遺跡の残存が確認されたため、令和4年（2022）に愛知県新体育館建設に伴う（公財）愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた。古墳時代の集落や旧河道、名古屋城北側の広大な庭園である下御深井御庭の一部とみられる池や井戸の遺構が見つかった。池からは石灯籠や瓦、陶器類に加えて窯道具が多数出土した。窯道具は御庭焼きに関連するものと考えられる。

〔参考文献〕

- 伊藤厚史ほか2017『埋蔵文化財調査報告書 78 幅下遺跡(第5次調査)』名古屋市文化財調査報告 95 名古屋市教育委員会
- 小和田哲男2019『名古屋城前史』三浦正幸監修『近世城郭の最高峰 名古屋城』名古屋城検定実行委員会
- 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 令和5年(2023)7月22日(上)『名古屋城三の丸遺跡地元説明会資料』
- 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 令和6年(2024)3月9日(上)『名古屋城三の丸遺跡 地元説明会(R5 その2)』
- 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 令和4年(2022)2月28日発行『名城公園遺跡発掘調査通信』第1号
- 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 令和4年(2022)5月28日(上)『愛知県名古屋市区名城公園遺跡地元説明会資料』
- 名古屋市 1980『複製版名古屋史 社寺編』愛知県郷土資料刊行会
- 名古屋市 1980『複製版名古屋史 地理編』愛知県郷土資料刊行会
- 名古屋市 1980『複製版名古屋史 第9巻 地図』愛知県郷土資料刊行会
- 名古屋市土木局 1986『愛知県名古屋市区市街地籍全国(複製版)』
- 名古屋市見晴台考古資料館 1984『幅下小学校遺跡 第2次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
- 名古屋市見晴台考古資料館 1985『第3次幅下小学校遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
- 名古屋城調査研究センター監修2022『図説 日本の城と城下町④ 名古屋城』創元社
- 松村冬樹・岡村弘子ほか2008『特別展 尾張名古屋は地下で待つ 城下町大発掘』名古屋市博物館
- 水野裕之 1996『幅下小学校遺跡—第4次発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会
- 水野裕之 2013『幅下遺跡・貞養院遺跡』『新修名古屋史 資料編 考古2』新修名古屋史資料編集委員会
- 安田幸市・宇田純子 2001『貞養院遺跡』名古屋市教育委員会

1: 堀川より西側は低湿地で井戸を掘っても良質な水を確保できなかったため、尾張藩は庄内川から名古屋城の堀まで水路(御用水)を造り、その水を堀川の西側一帯に水道管を使って配水していた。名古屋城の堀から堀川西側の城下に敷設された水道が中下水道である。

第2章 調査の経緯

第1節 過去の調査

平成13年(2001)に名古屋市による緊急雇用対策事業として貞養院遺跡第1次発掘調査が行われた。基本層序は、表土・かく乱層、オリーブ・黒色粘土層(遺物包含層)、灰白色粘質土層(地山)となっており、オリーブ・黒色粘土層で遺構検出が行われた。石垣、石列、溝、通路、上水設備、土坑を確認した。

石垣は東西方向に延びており、長さ20.8m、高さ1.1mが検出された。石垣の基礎として胴木を配置し、その上部から石を積んでいる。石垣の北側は通路になっていたとされ、石垣と通路の境には石垣面とでL状になる木製側溝が確認されている。石垣は江戸時代の区割りに沿って造られた町屋の地境と考えられている。上水設備としては汲み上げ用の井戸や溝が検出されている。溝内部に竹管が敷設され、屈曲部には蓋付きの木桶が、連結部には木製の継手が設置されていたことが確認された。溝内からは鉢杵や天目茶碗、土鍋等が出土した。これらは幅下遺跡の調査でも検出された「中下水道」の遺構の一部とみられる。61基の土坑からは多量の陶磁器や木製品、砥石や火打石といった石製品、銭貨・煙管などの金属製品が出土している。

第2節 調査に至る経緯

調査地点は西区幅下一丁目1021番5である。

令和5年(2023)6月8日付けで文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出(既設建物の解体)が提出され、令和5年6月20日付け5教文第4-81号で工事立会の通知を行った。その後、令和5年7

月12日付で文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出(既設建物の解体)が提出され、令和5年7月21日付け5教文第4-127号で工事立会の通知を行い、令和5年9月29日に工事立会を実施した。建物解体に伴い、重機提供により東西1.8m、南北0.9mのトレンチを西側に1箇所設定して、G.L.から-1.6mの深度まで掘削した。トレンチ北側壁面の観察では、G.L.-0.3mまで1:表土(かく乱土)で、以下は2:濃いオリープ灰色砂質シルト(厚さ0.1m)、3:黒灰色シルト(厚さ0.5m)と続き、G.L.-0.9mで4:地山(灰白色シルト)に至った。このうち2層からは近代の棧瓦のほか、幕末のものと思われる染付が出土した。3層は第1次発掘調査で確認されたオリープ・黒色粘土層(遺物包含層)に当たると判断された。立会の結果、第1次発掘調査地点と今回の発掘調査地点は地形的にもほぼ変わらず、今回の発掘調査地点においても良好に遺物包含層が残存しているものと想定された。

同敷地における事業として令和6年5月24日付けで文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出(個人住宅の新築)が提出され、令和6年6月24日付け6教文第199号で発掘調査の通知を行った。協議・事務手続き等を経て、個人住宅の新築工事に伴い埋蔵文化財を記録保存するため、今回の第2次発掘調査を実施した。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査概要

調査は、建物建築予定範囲のうち工事フェンス設置範囲と隣家への安全対策を考慮して約51.04㎡を対象とした。排土置き場確保のため、調査区を西側と東側の2回に分けて折り返すこととし、遺物の取り上げに際して前半区を西区、後半区を東区として調査を行った。

調査の準備として7月3日に基準点設定と調査区設定を行い、4日にフェンスを設置した。8日に西区から重機による表土掘削を開始した。9日に包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。10日に断面図作成・完掘写真撮影を行った。その後、雨が続いたが17日に北壁沿いで黒色粘質土層(立会調査による黒灰色シルト層に該当する)を一部掘削し地山面での遺構の有無を確認した。同日に西区の埋戻しを行い、東区の表土掘削と包含層掘削を開始した。掘削にあたっては西区と東区を1mほど重複させた。18日に遺構検出、遺構掘削と断面図作成を行い、19日に清掃及び完掘写真撮影と平面図作成を行った。その後同日に埋戻しとフェンス撤去を行って原状に回復し、現地調査を終了した。

第2節 基本層序

本調査区の基本層序は北壁での断面観察の結果、大きく4層に分けられる。上からコンクリートを含む整地土—明黄褐色粘質土—黒色粘質土—灰白色シルト質土である。表土は調査区の西から2m程度までコンクリートを含む整地土が厚さ0.7～0.8m堆積し、T.P.1.6mほどまで及んでいた。黒色粘質土は調査区全体にほぼ均質な面を形成する。第1次発掘調査でもオリープ・黒色粘土層が均質な面を形成し、この上面での遺構検出を行っていることから、今回の調査でも黒色粘質土層上面にて遺構検出を行った。黒色粘質土(図2・3の17・18層)はT.P.2.0m～1.8mの高さで検出され、厚さは約0.4mである。灰白色シルト質土は地山である。北壁沿いで検出面の黒色粘質土層を一部掘削し、地山面での遺構の有無を

確認したが、遺構は検出されなかった。

第3節 遺構と遺物

検出した遺構は土坑6基と石列1基である(図2)。出土遺物は総数270点のうち、清掃中に須恵器が1点出土したほかは全て中近世以降の遺物である。陶器が主体で磁器は全体のうち5点ほどにとどまる。

SK01 調査区西端で検出した。東西2m×南北1m以上の楕円形の土坑である。西側は調査区外へ続き、南北の一部は工事立会時の試掘トレンチとかく乱に切られる。埋土は灰黄褐色シルト質土で、しまりは弱い。炭化物や3～5cmの角礫・亜円礫が少量混じるほか、橙色焼土粒を含む。遺物から17世紀末から18世紀の遺構と考えられる。

埋土からは磁器の小坏(1)や碗(2)、陶器の鉢(3)や大皿(4)、搦鉢(5・6)、汁次(7)、蓋(8)、土師器の皿(9)や焙烙(10)、蓋と思われる木製品(12)や火打石の素材(13)が出土した(図5)。1は染付の小坏で二次的に被熱している。17世紀末の肥前系磁器である。4は肥前産の三島手の大皿で17世紀末から18世紀のものと思われる。8は二次的に被熱して鉄軸が変質している。つまみ部分はわずかに残る。9は内外面ともに二次的に被熱し、特に底部外面に煤が濃く付着している。口縁部は磨耗している。10も二次的に被熱し、外面に煤が濃く付着している。11は天目茶碗を加工円盤に転用したものと思われる。13はチャートで17世紀後半頃の火打石の素材と思われる。使用痕はみられない¹。

SK02 調査区の西寄り中央で検出した。東西0.8m×南北1.8mの楕円形の土坑である。埋土にはぶい黄褐色粘質土で、しまりは弱い。SK01と同様の橙色焼土粒を含む。遺物から17世紀の遺構と考えられる。

陶器の鉢(14)、皿(15)、汁次(16)が出土した(図5)。14は内面底部と外面が二次的に被熱している。15は17世紀と思われる御深井釉の皿で、内面に鉄摺絵で菊が描かれている。軸の変質や高台に煤がみられるため、二次的に被熱していると思われる。16は内面に鎔軸、外面と口縁部に胎釉が施されている。口縁から体部の一部が残存する。体部の下部に注口の痕跡があり、水注とみられる。二次的に被熱している。

SK03 北壁沿いで検出した。北側は調査区外へ続き、東側はかく乱に切られる。東西0.8m×南北1.3m以上の楕円形の土坑である。埋土はSK02と同様である。遺物から17世紀後半頃の遺構と考えられる。

陶器の鉢(17・18)、搦鉢(19)、土師器の焙烙(20)のほか砥石(21)や土壁(22・23)が出土した(図6)。17・18は黄瀬戸鉢の口縁部で17世紀中頃から後半のものと思われる。内面上部に波状文と胆礬(黄瀬戸に銅緑釉を点々とかけること)がみられる。19は口縁部内部が二次的に被熱している。21は凝灰岩製で幅5mmほどの溝のような痕があり、金属を研いだ痕跡である可能性がある。一部に鉄分が付着し、二次的に被熱している。22は平坦面が残る。径0.5～1cm程度の礫やササが混ぜ込まれている。

SK04 調査区中央付近で検出した。北側はSK03を切るかく乱と同じかく乱に切られている。東西1.3m×南北0.9m以上の楕円形の土坑である。埋土は上層がSK02、SK03と同様の焼土で、下層はしまりの弱い黄褐色粘質土層である。遺物から17世紀後半頃の遺構と考えられる。

山茶碗(24)、土師器の皿(25)、陶器の碗(26・27)、皿(28・29・33)、鉢(30・31)、搦鉢(32)が出土した(図6)。26は京焼写しの瀬戸美濃の碗である。呉須で文様が描かれている。二次的に被熱している。28は17世紀と思われる御深井釉の皿である。口縁部が黒くなっており、二次的に被熱しているとみら

1：水野裕之氏の作図・ご教示による。

れる。29は肥前の蛇の目軸剥ぎ皿で軸剥ぎ部分に煤が濃く付着している。内面と口縁部は緑釉、外面は灰釉で白化粧土が施されている。17世紀後半頃のものかと思われる。30は黄瀬戸鉢の底部である。底部内面の素地部分に煤が付着している。33は志野織部の皿の底部である。加工円盤未成品とみられる。31は黄瀬戸鉢で17世紀前半から中頃のものと思われる。底部に胆礬がみられる。内外に煤が付着している。

SK05 調査区の東側で検出した。東西0.8m×南北1mのほぼ円形の土坑である。SK06を切る。埋土は褐灰色砂質シルトで下部に明赤褐色の焼土ブロックが混じる。年代ははっきりしないが、SK06より新しいことから、17世紀中頃以降の遺構である。

襷羽口(34～37)や鉄滓(38～43)が出土した(図7)。被熱した陶器も出土したが、小片のため図化していない。34・35はガラス質化がみられるため火口に近い排気部である。36・37もガラス質化はみられるが、34・35と比べるとわずかであるため、排気部後端と考えられる。38は形状からつぼの底である。底部外面はガラス質化している。39・40はつぼの器壁とみられ、38と同様に外面はガラス質化している。40は鉄滓が付着している。41・42は椀形滓である。41は内面のみやや磁性がある。42は銀色を呈する比重の重い塊が内面に付着する。内面はやや磁性がある。43は全体的に0.5～1cm程度の礫が付着し、スサのような植物質の物質が抜け落ちたような痕跡がみられる。

SK06 SK05の北側で検出した。北側は調査区外へ一部続き、南側はSK05に切られる。東西0.9m×南北0.7m以上の土坑である。埋土は黒褐色シルトである。遺物から17世紀中頃の遺構と考えられる。

鉄滓(44)や陶器の甕(45)、黄瀬戸鉢(46)が出土した(図7・8)。44は椀形滓である。内面はわずかに磁性があるが、気泡の部分は磁性が弱い。外面は礫や粘土を含む炉床土が付着している。45は甕の底部で内外ともに強く被熱している。中央の半円部を中心に内外面ともに鉄分が付着していることから、製鉄に関する道具として転用されたと考えられる。46は完形の黄瀬戸鉢である。SK06内で正位置で出土した(図3)。内面に胆礬と4箇所の目あとがみられる。底部外面と口縁部の内外面に二次的被熱痕がある。破断面にも二次的被熱痕がみられるため、割れた後に被熱したようである。底部内面には菊文がある。17世紀中頃のものと思われる。

SX07 調査区南東部で検出した。石列の裏込め部分である。東西4m×南北0.8mを検出した。石列は南に面を向けており、調査区外のため詳細は不明である。石列及び裏込めの石材は砂岩である。

遺構に伴わない遺物(図8)

《表土層》48・49は御深井軸の碗の口縁である。いずれも二次的に被熱している。54は鉄軸の双耳鍋で内面の軸が点状に黒く変質している。外面は二次的に被熱しており、内面も被熱して軸が変質した可能性がある。55は寛永通宝である。

《包含層》56は18世紀末～19世紀の灰釉の小環である。57は黄瀬戸の徳利で、底部は露胎である。

《遺構検出》59の鉢は煤が内外面ともに多量に付着し、断面も被熱している。同一個体ではないがP6と同製品とみられる。磁器の紅皿(61)も出土した。

《黒色粘質土層》重圓皿(62)のほか土師器片、天目碗片、搦鉢片が出土した。

写真撮影前の清掃では須恵器の甕(63)の体部が出土した。

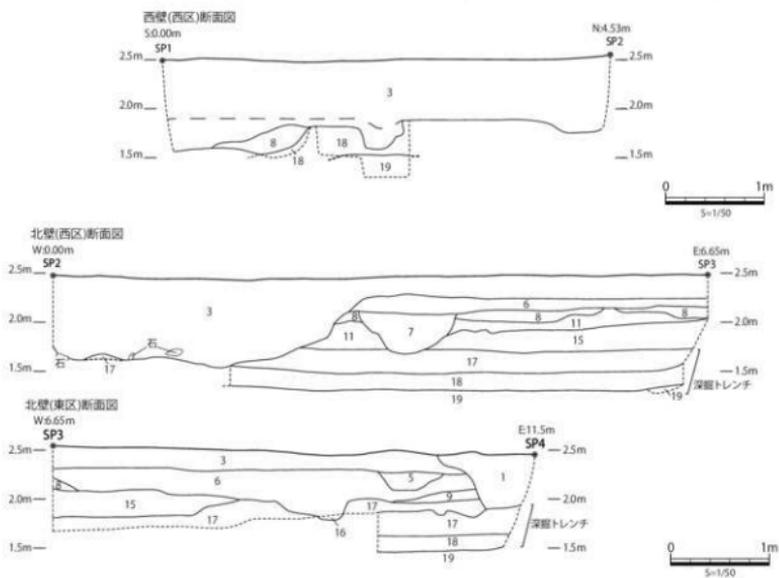
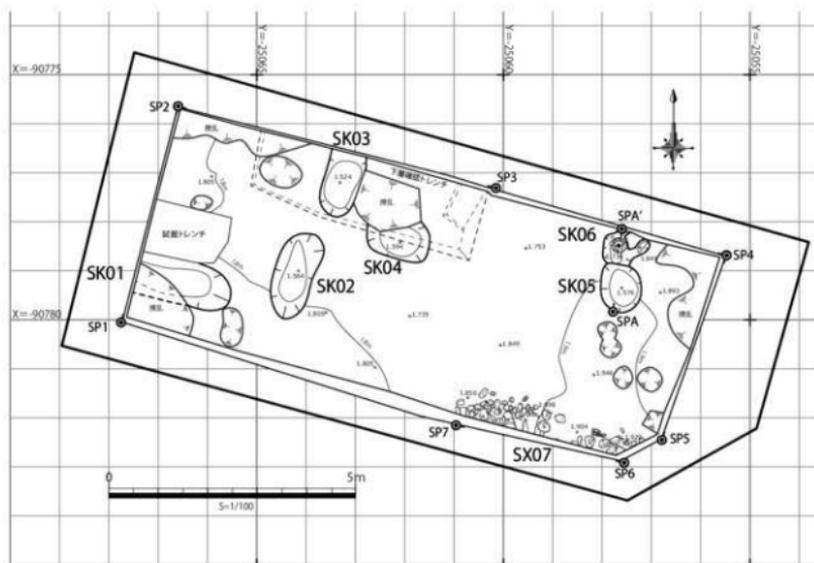
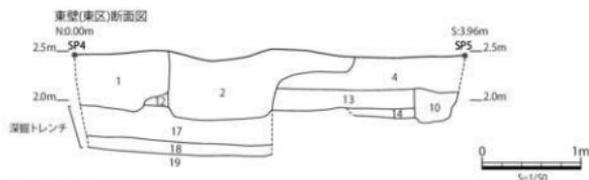


図2 遺構平面図/西壁・北壁土層断面図

第3章 調査の方法と成果



西壁・北壁・東壁土層注記

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 細粒砂主体 しまりやや弱い、5YR6/6 橙色粘質土粒、10YR8/2 灰白色 タタキ片混じる
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土 10YR8/1 灰白色粘土ブロック、10YR6/6 明黄褐色粘質土粒混じる しまりやや弱い
ガラス・タイル・タタキ片混じる 1層と同時期か
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土 4~10cmのコンクリート含む しまり弱い レンガ・鉄片あり 破線よりはコンクリート少量 整地土
- 4 10YR5/1 褐灰色粘質土 10YR8/1 灰白色粘土粒、炭混じる しまりやや弱い
- 5 10YR5/6 明褐色粘質土 細粒砂主体 しまり弱い 10YR 灰白色粘質土粒 タタキ片か 炭少量混じる
- 6 10YR2/3 黒褐色粘質土 細粒砂 しまりやや弱い 橙色砂粒混じる 黄色砂質土が帯状に混じる
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 細粒砂 2.5YR6/6 褐色焼土粒混じる しまり弱い SK03埋土
- 8 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(細粒砂)主体で2.5YR6/6 褐色焼土粒含む 炭化物・3~5cmの角礫・垂円礫少量あり
しまり弱い SK01埋土
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 細粒砂主体 しまりやや弱い 炭少量混じる
- 10 5YR4/8 赤褐色粘質土 10YR4/1 褐灰色粘質土混じる しまり弱い 鉄分多い
- 11 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質土 粘性強い しまりあり 黒灰色粘質土粒が帯状に混じる
- 12 10YR4/1 褐灰色粘質土 10YR6/1 褐灰色粘質土粒混じる しまりあり
- 13 10YR4/1 褐灰色粘質土 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が帯状に入る 10YR6/3にぶい黄褐色粘質土ブロック混じる
しまりあり 粘性強い
- 14 10YR4/1 褐灰色粘質土 5YR4/8 赤褐色粘質土混じる しまりあり 鉄分多い
- 15 10YR7/6 明黄褐色粘質土 しまり強い 東区では黒灰色粘質土粒の割合が多く、見た目は5層に似る
- 16 10YR1.7/1 黒色粘質土 細粒砂 しまり弱い SK06埋土
- 17 10YR3/2 黒褐色粘質土 しまり強い、茶褐色粘質土粒混じる
- 18 10YR2/1 黒色シルト質土 しまり強い、黄褐色砂粒少量混じる
- 19 2.5YR7/1 灰白色シルト質土 しまり強い 地山

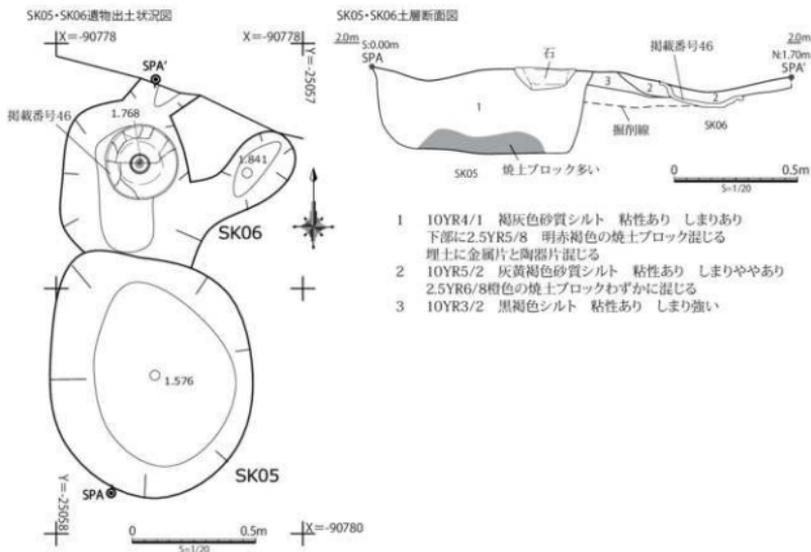


図3 東壁土層断面図/SK05・SK06 遺物出土状況図・土層断面図

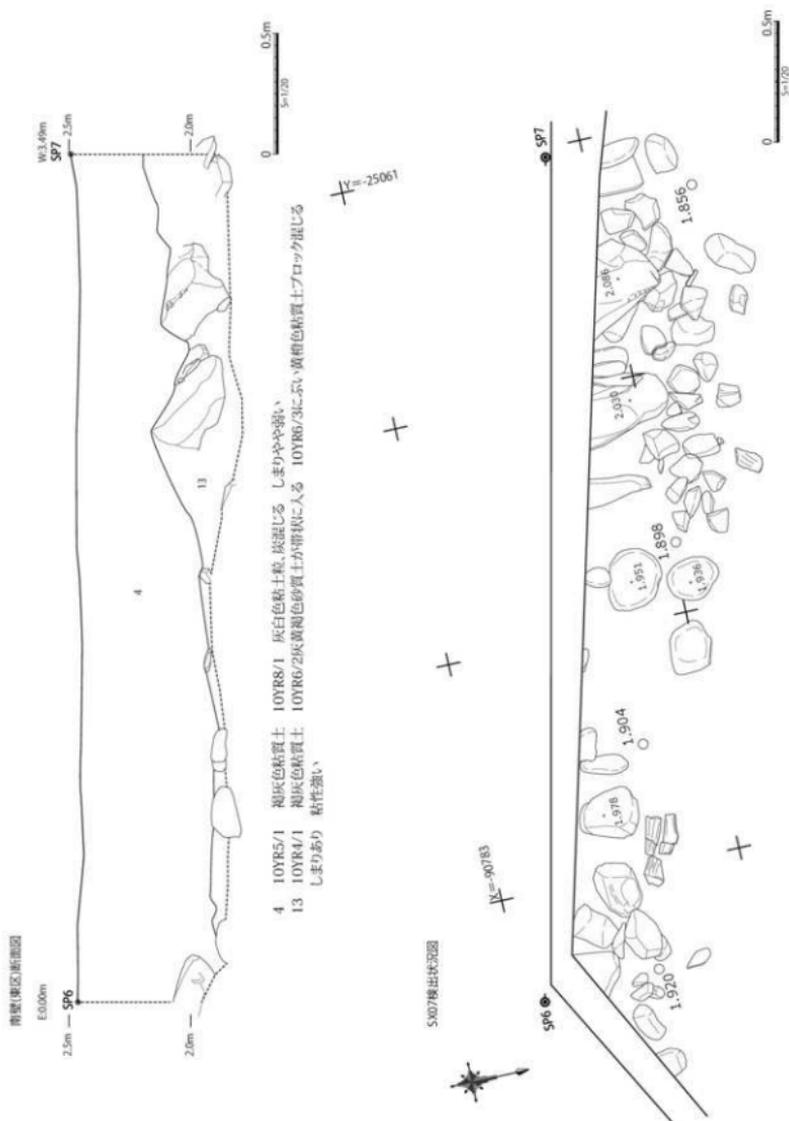


図4 南壁(東区)土層断面図/ SK07 検出状況図

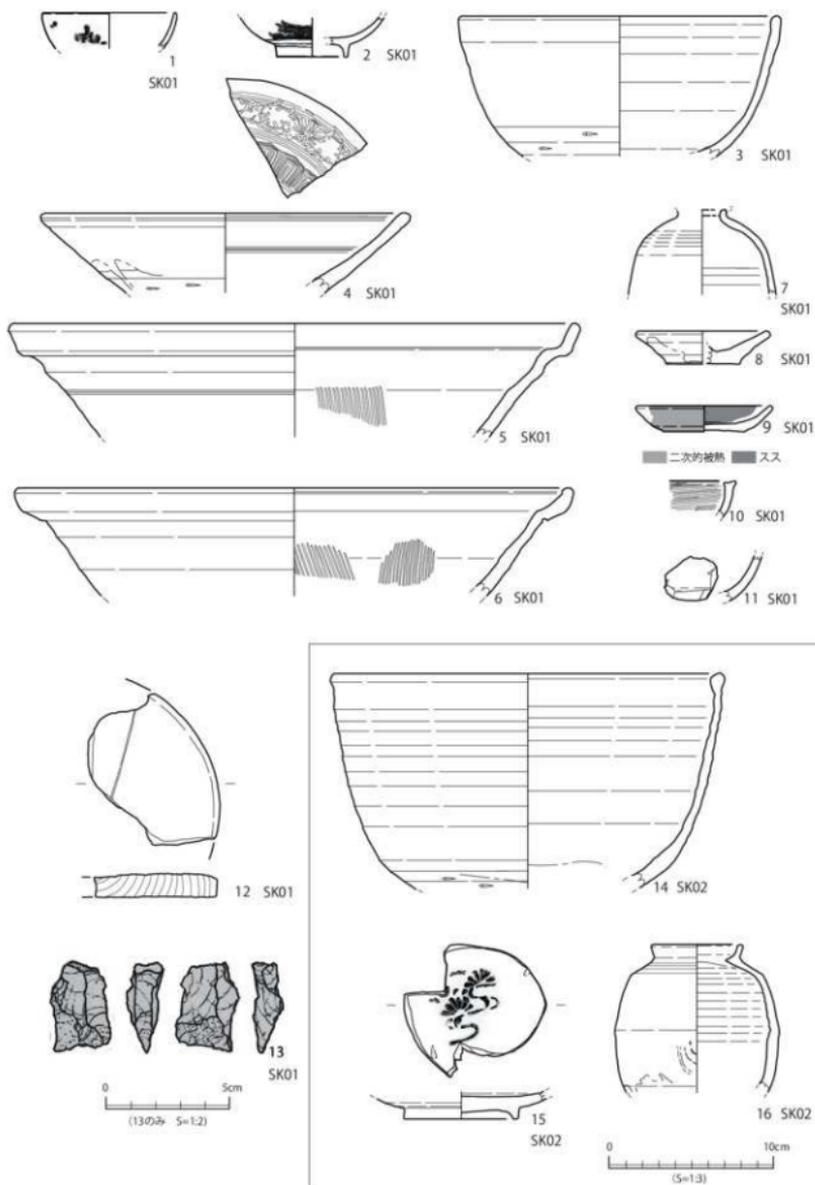


図5 遺物実測図 (SK01・SK02)

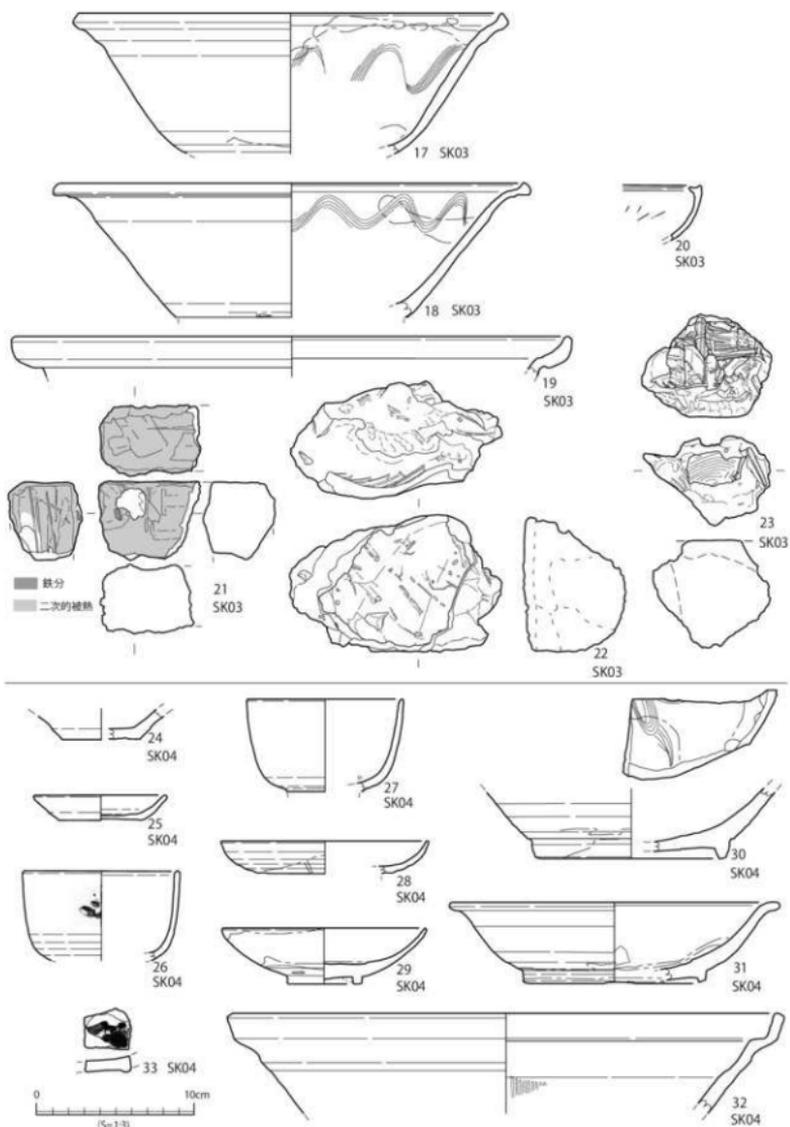


図6 遺物実測図 (SK03・SK04)

第3章 調査の方法と成果

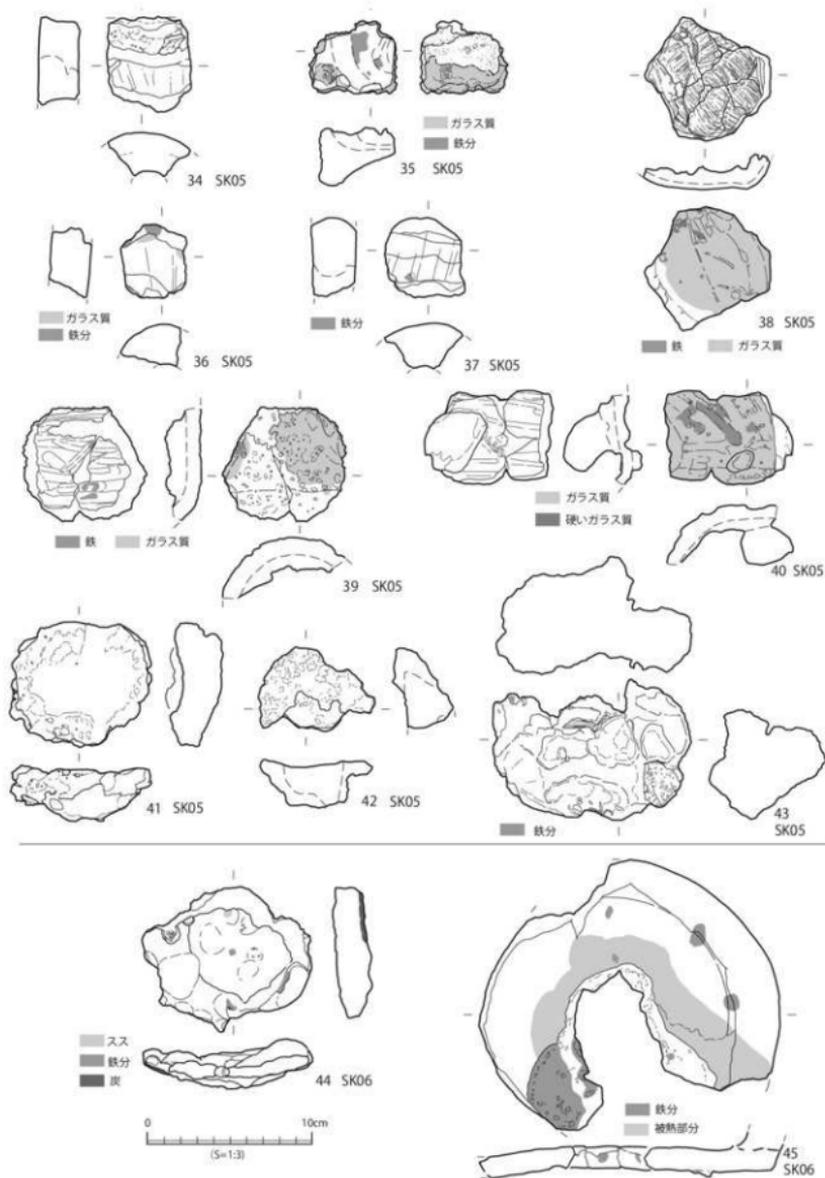


図7 遺物実測図 (SK05・SK06)

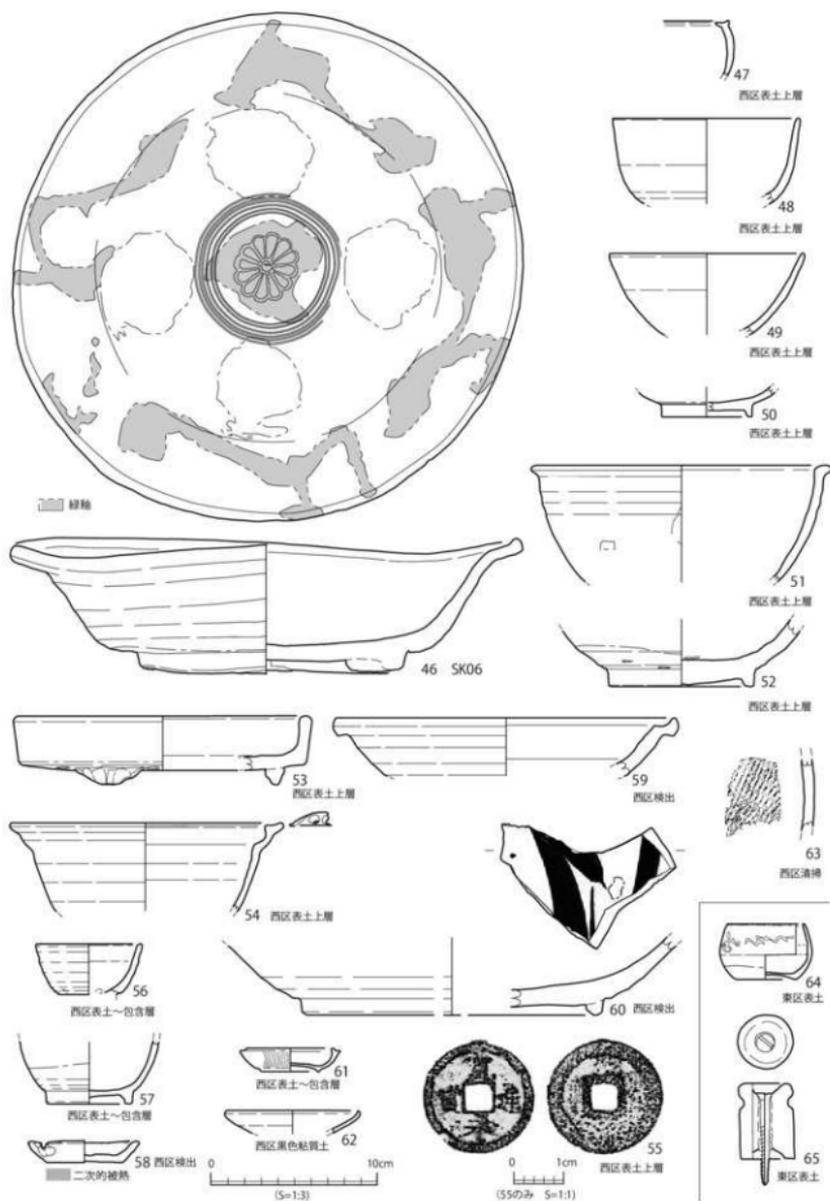


図8 遺物実測図 (SK06・表土等)

表1 遺物観察表

標本 番号	実測 番号	区分	素材	部位	遺構		寸法 (cm)		断面等	備考	焼成	胎土	色調	残存率 (%)		
					調査 位置・ 方位	層位	口径	底径							高さ	
1	42	磁器	小杯	口縁・ 底部	西	SK01	(8.0)	(2.2)		透明釉。肥前系、二次的 被熱かなり強い。1650年 -1680年か	良好	密		口30		
2	60	磁器	碗	底部	西	SK01	-	(4.4)	(2.4)	透明釉。底にこまかく 印刷+手書き。肥前系か	良好	密		底30		
3	1	陶器	鉢	口~体	西	SK01	(19.2)	(8.6)	内外:回転ケズリ・ 灰釉		良好	やや 密	胎土:5Y7/1 灰白 釉:5Y7/3 黄赤	口縁20		
4	6	陶器	大皿	口縁	西	SK01	(21.4)	(6.9)	内:回転ケズリ 外:回転ケズリ	鉄釉。灰釉。肥前系陶器。 三島系、印刷+白化粘土	良好	やや 密	胎土:2.5Y5/1 黄灰 釉:2.5Y4/3 オリーブ緑	口10		
5	3	陶器	蓋鉢	口縁	西	SK01	(35.0)	(7.0)	内:環状17条	鉄釉	良好	密	胎土:5Y7/1 灰白 釉:5Y3/ 黄赤	口縁20		
6	5	陶器	蓋鉢	口縁	西	SK01	(33.4)	(6.6)	内:回転ナデ・ 環状17条 外:回転ナデ	鉄釉	良好	粗	胎土:2.5Y7/1 灰白 釉:5YR2/2 黒緑	口縁10		
7	40	陶器	汁次	腹部	西	SK01				鉄釉。煤。二次的被熱(内 外面とも強く被熱し、ガ ラス質化)	やや 粗	やや 密	胎土:2.5Y8/1 灰白 釉:10YR4/2 灰黄褐			
8	4	陶器	蓋	口~底	西	SK01	(7.6)	(5.0)	2.0	内:回転ナデ・ 環状8切歯	良好	やや 密	胎土:2.5Y8/1 灰白 釉:10YR3/2 黄赤	口縁30		
9	2	土師器	皿	口~底	西	SK01	(8.0)	5.0	1.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ・ 回転切歯	良好	密	胎土:2.5YR4/4 に近い 黄	底部60		
10	7	土師器	碗(地味)	口縁	西	SK01		(2.2)		内外に煤。二次的被熱	良好	やや 粗	7.5YR4/2 黄赤			
11	43	陶器	天目碗	腹部	西	SK01	縦2.7	横3.2	厚み0.6	重さ8.9g	鉄釉。加工戸掘に用か た	やや 粗				
12	27	木製品	蓋か		西	SK01	(9.3)	(8.0)	1.5		重取り。全面炭化 木目11条/cm	良好				
13	18	石製品	火打石素材		西	SK01	縦3.7	横2.5	厚さ1.5							
14	8	陶器	鉢	口~体	西	SK02	(23.6)	(12.4)		内:回転ナデ・ 外:回転ナデ・ 回転ケズリ	鉄釉。二次的被熱(内面 底部、外面)	良好	やや 粗	胎土:10YR7/1 灰白 釉:5YR6/2 灰オリーブ		
15	45	陶器	皿	腹部	西	SK02		7.0	(1.7)	外:回転ナデ・ 回転ケズリ	鉄釉。煤。二次的被熱。 肥前系。17世紀か	良好	やや 密	胎土:2.5Y7/1 灰白 釉:2.5Y7/3 黄赤	底70	
16	41	陶器	汁次	口~体	西	SK02	(5.4)	(8.1)	(9.1)	内:口コナデ 外:回転ケズリ・ 模文8条	鉄釉(縁緑。胎土)。注口 あり水注か	良好	やや 密	胎土:10YR8/1 灰白 胎釉:10YR5/8 黄褐 縁緑:2.5YR4/2 黄	口30	
17	10	陶器	鉢	口~体	西	SK03	(16.8)	(9.0)		内:回転ナデ・ 回転ケズリ 外:回転ナデ 回転ケズリ・ 波状文8条	内外に少量煤。黄瀬戸鉢。 肥前。目土 1650-1680年か	良好	やや 粗	胎土:2.5Y6/1 灰白 釉:2.5Y7/4 黄赤	口20	
18	9	陶器	鉢	口~体	西	SK03	(28.8)	(8.6)		内:回転ナデ・ 波状文5条 外:回転ナデ	黄瀬戸鉢。胎釉 1650-1680年か	良好	やや 密	胎土:2.5Y7/2 灰黄 釉:2.5Y5/2 黄赤黄	口10	
19	11	陶器	蓋鉢	口縁	西	SK03	(35.0)	(2.6)		内外:回転ナデ	鉄釉	良好	やや 密	胎土:5Y7/1 灰白 釉:2.5Y7/1 黄赤	口10	
20	13	土師器	碗(地味)	口縁	西	SK03		(3.5)		内:ナデ・ツメ底 外:ユビオサエ・ ツメ底	鉄釉	良好	やや 粗	7.5Y7/4 に近い 黄		
21	12	石製品	碇石	一部	西	SK03	縦(5.0)	横(6.4)	厚み(4.7)	重さ(93.2g)	碇石。二次的被熱。鉄 分					
22	110	土壁	土壁	西	SK03	縦(8.8)	横(13.5)	厚み(7.4)		重さ450.0g	植物灰産			5YR7/6 黄。5YR7/4 に 近い。5YR8/1 灰白		
23	111	土壁	土壁	西	SK03	縦(6.7)	横(8.0)	厚み(6.6)		重さ135.1g	植物灰産			2.5YR7/6 黄。10YR5/1 黄灰。7.5YR7/4 に近い 黄。2.5YR7/4 黄赤。7.5YR5/1 黄灰		
24	20	陶器	山茶碗	底部	西	SK04	(5.0)	(2.0)		内:回転ナデ 外:回転ナデ	内面底部。外面二次的被 熱	良好	粗	10YR7/1 灰白	底10	
25	14	土師器	皿	丸形	西	SK04	4.2	5.3	1.6			良好	やや 密	7.5YR6/4 に近い 黄	丸形	
26	50	陶器	碗	口縁	西	SK04	(9.6)	(5.7)			灰釉。真鍮釉。二次的被 熱	良好	やや 密	胎土:5Y8/2 灰白 釉:5YR3/3 黄赤	口20	
27	17	陶器	碗	口~体	西	SK04	(9.8)	(5.9)		内外:回転ナデ	鉄釉。煤。二次的被熱。 目土	良好	やや 密	胎土:5Y7/1 灰白 釉:5YR2/2 黒緑	口20	
28	44	陶器	皿	口縁	西	SK04	(13.0)	(2.1)		外:回転ヘラケズ リ	二次的被熱。底部外面 鉄釉。肥前系。17世紀か	良好	やや 粗	胎土:2.5Y7/1 灰白 釉:2.5Y7/1 灰白		
29	15	陶器	皿		西	SK04	12.8	4.7	3.6		内:回転ケズリ 外:回転ケズリ・ 回転ヘラケズリ	内面・口縁縁緑。外面灰 釉。内面に煤。白化粘土。 肥前系前の縁緑剥ぎ。 胎土目3ヶ所	良好	やや 密	胎土:10YR8/1 灰白 釉:黄赤	底100
30	19	陶器	鉢	腹部	西	SK04		(12.0)	(4.5)		外:回転ケズリ・ 模文5条	煤。鉄分。裏面内部二次 的被熱。黄瀬戸鉢	良好	やや 密	胎土:2.5Y8/2 灰白 釉:2.5Y7/4 黄赤	底20
31	16	陶器	鉢	口~底	西	SK04	(20.6)	10.6	5.2		内:回転ナデ 外:回転ナデ・ 回転ケズリ	内外に煤。胎釉。二次的 被熱。黄瀬戸鉢 内面・外面4ヶ所に胎土 目約5条 1620年-1650年か	良好	やや 密	胎土:5Y7/1 灰白 釉:5Y7/2 灰白	底50
32	18	陶器	蓋鉢	口縁	西	SK04	(34.4)	(6.4)			内:環状 外:回転ナデ・ 回転ケズリ	鉄釉。二次的被熱	良好	粗	胎土:2.5Y8/1 灰白 釉:5YR3/2 暗赤褐	口20
33	21	陶器	皿	腹部	西	SK04	縦(2.5)	横(3.0)	高さ(1.0)		外:回転ケズリ	長石釉。鉄分。胎釉。 加工戸掘未成品	やや 良		胎土:7.5YR7/4 に近い 黄 釉:2.5Y2/2 明黄灰	
34	51	土製品	輪郭口	先端	東	SK05	縦(5.8)	横(5.1)	厚み2.3	推定径(8.6)	内:ナデ	良好	粗	胎土(外):10YR8/2 灰 白(内):5YR8/6 黄赤 ガラス質:10YR1.7/1 重 胎子:10YR6/2 灰黄褐		

探検番号	東海番号	区分	器種	部位	通径		法量 (cm)			調整等	備考	構成	胎土	色調	残存率 (%)
					調査区	通径・単位	口径	底径	器高						
35	52	土製品	輪郭口	先端	東	SK05	縦(4.3)	横(5.1)	高さ(3.5)		ガラス片、鉄分、集げ	良好	粗	ガラス質 N2/O 黒集げ(7.5Y5/1～4/1) 輪郭口先端(10R7/3 黄緑) 掛け丸縁帯(7.5Y5/1～4/1)	
36	53	土製品	輪郭口	先端	東	SK05	縦(4.5)	横(4.0)	厚み(2.3)	推定径(5.8)	灰輪、鉄分、集げ	良好	粗	胎土(外:10YR8/3 黄緑) 集げ(7.5Y5/2 灰輪) 集げ(ガラス質) 10YR3/1 黒焼	
37	54	土製品	輪郭口	先端	東	SK05	縦(4.8)	横(4.7)	厚み(2.6)	推定径(8.2)	集げ、鉄分	良好	粗	胎土(外:12.5Y8/3 黄緑) 胎土(内:7.5YR8/3 黄緑) 集げ(上部:10YR7/1 灰白) 集げ(中部:10YR7/1 灰白)	
38	61	金属	鉄滓	東	SK05	縦(7.5)	横(7.6)	高さ(2.1)	重さ(55.0g)	ろつば底				ろつば外面(5Y8/1 灰白) (径2.3mm 白) 角縁を含む 何らかの物体・N4/O 灰	
39	62	金属	鉄滓	東	SK05	推定径(8.0)		(6.8)	重さ(74.8g)	ろつば器壁 鉄分、浮付着、ガラス質化				内面:N4/O 灰 外面:ガラス質化(7.5R6/3 に近い赤黒) ガラス質化(7.5R1.7/O 赤黒) 断面:2.5Y6/1 黄灰 鉄滓:5YR5/6 黄赤焼	
40	63	金属	鉄滓	東	SK05	推定径(11.6)		(5.5)	重さ(78.9g)	ろつば器壁 ガラス質化				内面:10YR4/1 緑灰、外面:ガラス質化(7.5R1.7/O 赤黒)、ガラス質化(7.5R6/2 赤黒) 断面:2.5Y6/1 黄灰 鉄滓:5YR5/6 黄赤焼	
41	56	金属	鉄滓	東	SK05	縦(7.6)	横(8.6)	厚み(3.5)	重さ(278.5g)	輪郭形、内面磁石にくっつく					
42	58	金属	鉄滓	東	SK05	縦(5.2)	横(7.0)	高さ(2.9)	重さ(129.3g)	輪郭形、伊床か				伊床か(径部)7.5YR3/1 黒焼 集げた比量多い(径部:N4/O 磁灰)	
43	59	金属	鉄滓	東	SK05	縦(8.5)	横(12.0)	高さ(7.1)	重さ(470.0g)	塊状部分あり、ろつば片、スチヤ木片残けた埋蔵あり				ろつば(10R2/2 輪郭赤黒)	
44	55	金属	鉄滓	東	SK06	縦(8.8)	横(10.2)	厚み(3.3)	重さ(293.5g)	輪郭形、鉄分、炭、煤か					
45	22	陶器	鉢	底部	東	SK06		(2.0)	内:凹陥ナデ	鉄粒、磁鉄、製鉄に使用されたものか	良好	粗	7.5YR/4 に近い黄	底 20	
46	26	陶器	大鉢	底部	東	SK06	30.3	15.9	8.2	黄緑戸土、高外被焼、底面外側に二次的被焼、鉄分、塵粒、目あと(スケツル 1620-1650 年か)	良好	粗	胎土:10YR8/2 灰白 輪:5Y7/3 黄黒		
47	29	土師器	鍋(焼物)	口縁	西	表土上層	-	-	-	内:凹陥ナデ 外:ナデ	良好	やや密	5YR6/4 に近い黄		
48	46	陶器	碗・丸碗	口縁	西	表土上層	(11.2)		(3.2)	二次的被焼、器深并輪					
49	47	陶器	碗・丸碗	口縁	西	表土上層	(11.6)		(4.9)	器深并輪	良好	やや粗	胎土:5Y8/1 灰輪 輪:5Y7/2 灰輪	口 20	
50	48	陶器	碗	底部	西	表土上層	(5.4)		1.8	内:ナデ 外:ナデ+ヘラケズリ	灰輪、煤、二次的被焼、割りたじ、塵粒、京焼風、炭灰系、17世紀末-18世紀前期	良好	やや密	胎土:2.5Y8/1 灰白 輪:2.5Y8/2 灰白	底 40
51	49	陶器	鉢	口縁	西	表土上層	(17.5)		(7.1)	黄緑戸土、二次的被焼	良好	やや粗	胎土:5Y8/1 灰白 輪:5Y8/2 灰白		
52	30	陶器	鉢	底部	西	表土上層	(8.8)		(4.1)	外:凹陥ナデ+ヘラケズリ、凹陥糸切痕、ユビオサエ	灰輪、目あと(3ヶ所)	良好	やや粗	胎土:5Y8/1 灰白 輪:5Y7/2 灰白	底 50
53	31	陶器	鉢	口→底	西	表土上層	(17.4)		(17.4)	外:凹陥ナデ+ヘラケズリ(粘土塊残付)	灰石輪、3足付、目あと(2ヶ所)以上、外周一部に輪の痕跡あり(二次的被焼の可能性)	良好	やや粗	胎土:5Y8/1 灰白 輪:5Y8/2 灰白	口/底 20
54	32	陶器	鍋	口縁	西	表土上層	(13.6)		(5.4)	外:ロクロナデ	鉄粒、双耳、輪が点状に黄黒、外周二次的被焼(内面も被焼か)	良好	やや密	胎土:10YR6/2 灰黄 輪:7.5YR3/3 輪帯	口 10
55	28	金属製品	鉄片	片形	西	表土上層	径(2.4)	厚(0.1)	重さ(3.1)	貫入溝あり					
56	39	陶器	小坪	口→体	西	表土上層	(6.2)		(3.1)	外:ヘラケズリ	灰輪、目あと	良好	やや粗	胎土:10YR7/1 灰白 輪:5Y7/3 黄黒	口 20
57	36	陶器	德利	底部	西	表土上層				内:ユビオサエ 外:凹陥糸切痕後ユビオサエ	黄緑戸土	良好	やや粗	胎土:2.5Y8/1 灰白 輪:5Y7/3 黄黒	
58	34	土師器	皿	片形	西	焼出	6.5	4.6	1.3	外:凹陥糸切痕	二次的被焼(底面も被焼か)、灯明皿に転用か	良好	密	7.5YR/6 焼	片形
59	33	陶器	鉢	口縁	西	焼出	(20.2)		(3.5)		灰輪、煤、断面も被焼	良好	粗	胎土:(10YR8/3 黄緑) 輪:5Y6/4 オリーブ黄	口 20
60	57	陶器	大鉢	底部	西	焼出					灰輪+鉄粒、煤(高外内部に多く付着)、断面大鉢、二次的被焼、胎土目あと、灰輪が点状とし	良好	やや粗	胎土:5Y8/2 灰白 輪:2.5Y7/4 黄黒	底 10 未済
61	35	磁器	紅皿	口→底	西	焼出	(5.2)		3.5	1.4	型成形	良好	密	N8/O 灰白	
62	25	陶器	壺形器	口縁	西	黒褐色土	(8.0)		(1.3)	内外:凹陥ナデ	口縁部灰色表面かきとり	良好	密	10YR8/4 黄緑	口 10
63	37	遺棄物	遺物	底部	西	写真前清掃				内:底ナデ 外:平行タタキ		良好	やや密	外:2.5Y5/1 黄灰 胎土:5YR6/4 に近い黄	未済

第3章 調査の方法と成果

探検番号	実測番号	区分	器種	部位	通溝		通溝 (cm)			調整等	備考	焼成	胎土	色調	残存率 (%)
					調査点	通溝・層位	口径	直径	器高						
64	23	陶器	小壺 (おしろい壺)	体～底	東	表土	(4.6)	(3.6)	3.4	外: 回転ケズリ・指紋	灰釉、イッチン	良好	密	胎土 2.5Y5/2 黄灰 釉 2.5Y5/2 黄灰	直 50
65	24	磁器	罌子(ノップ サイン)	壳形	東	表土	2.4	3.2	4.6	型成形	透明釉、鉄ホジ(マイナス) 濃緑 1.0 全長 5.5	良好	密	N90 白	壳形

表2 遺物観察表(写真のみ掲載遺物)

探検番号	実測番号	区分	器種	部位	通溝		調整等	備考	焼成	胎土	色調
					調査点	通溝・層位					
P1	107	陶器	皿	口～底	西	SK01	内: 回転ナデ 外: 回転ケズリ	部深开輪 二次的被熱	良好	密	胎土 2.5Y5/2 黄灰 釉 5Y7/3 濃黄
P2	105	陶器	碗	口縁	西	SK01	内: 回転ナデ 外: 回転ケズリ	鉄輪 赤色顔料もしくは被熱による釉の着色あり	良好	密	胎土 2.5Y7/1 灰白 釉 2.5Y4/4 オリーブ褐
P3	106	陶器	碗	底面	西	SK01	内外: 回転ナデ	鉄輪 17世紀	良好	密	胎土 2.5Y6/1 黄灰 釉 5YR4/4 に近い赤褐
P4	109	陶器	鉢	口～体	西	SK02	内: 回転ケズリ・ナデ 外: 回転ケズリ	灰釉、内外に煤付着	良好	密	胎土 2.5Y8/2 灰白 釉 5Y7/2 灰白
P5	108	瓦	丸	2/3	西	SK02	内: コビトキキ・舟目型 外: ヘラケズリ・ミガキ	二次的被熱	良好	やや密	胎土 2.5Y8/4 に近い橙
P6	112	陶器	鉢	口縁	西	SK04	内: 回転ケズリ・ナデ 外: 回転ケズリ	灰釉、内外に煤付着、断面も被熱	良好	密	胎土 2.5Y8/1 灰白 釉 10Y5/2 オリーブ灰
P7	114	陶器	碗	口～体	東	SK07 層位	内外: 回転ナデ	鉄輪 17世紀	良好	密	胎土 2.5Y8/1 灰白 釉 2.5Y8/3 暗赤褐
P8	103	陶器	碗	口縁	西	表土 上層	内外: 回転ナデ	灰釉・鉄輪、擦け分け、 18世紀	良好	密	胎土 2.5Y7/3 灰白 釉 5Y6/3 オリーブ黄、10YR4/4 褐
P9	101	瓦	軒丸	瓦当	西	表土 上層		濃珠三巴文、右巻き、雲母粉あり	良好	やや密	胎土 N6/ 灰
P10	102	陶器	碗	口縁	西	漆喰 層位		鉄輪	良好	密	胎土 2.5Y6/1 黄灰 釉 2.5Y8/3 濃黄
P11	104	瓦	軒丸	軒丸部～軒 平部端	西	漆喰 層位		濃珠三巴文、右巻き、雲母粉あり	良好	やや密	胎土 N6/ 灰
P12	113	陶器	磁鉢	体部	東	写真前 層位	内: 覆目 6条残存	鉄輪、断面磨減	良好	密	胎土 2.5Y7/3 濃黄 釉 2.5YR4/3 褐

第4章 まとめ

貞養院は明治16年(1883)に名古屋市東区から西区へ移ったとされ、明治17年(1884)現在の土地区画の形状や地番、道路、河川等が描かれた『愛知県名古屋市市街地籍全圖 天 二十ノ十三』には「八番貞養院敷地」と記載されている(図9)。今回の調査地点は名古屋城下の北西部で、江戸時代に人や物資輸送の主要ルートとして重要な役割を果たした美濃路や堀川沿いに位置する。『復刻版名古屋史 第9巻 地図』(1980)に所収の『尾府全圖 上宿及巾下ノ二』¹⁾(図10)、『天明年間名古屋市中支配分図』(図11)や名古屋城振興協会所蔵の『万治年間名古屋図』²⁾(図12・13)など名古屋城下を描いた様々な絵図によると、調査地点は町人地の戸田町³⁾と堀詰町の境付近に該当する。

貞養院遺跡第1次発掘調査や隣接する幅下遺跡の発掘調査では江戸時代の上水道施設「巾下水道」や町屋の区画割に関連する遺構を検出したほか、下駄や漆器碗などの木製品が良好な状態で出土し、名古屋城下町における上水道の実態や町人の営みを知ることができる資料として評価されている。そのため、今回の調査でも「巾下水道」や町屋に関する遺構、木製品の出土が想定された。

結果として、今回の調査では当初想定していたような江戸時代の良好な遺構は確認されなかったが、焼土を含む土坑6基と石列の裏込め部分を検出した。遺物は江戸時代前期の碗皿類や鉢類などを中心に江戸時代の町人生活に関するものが多く出土した。磁器は非抽出の遺物を含めても5点程度に止まり、木製品もわずかである。

今回の調査で特徴的なのは、二次的に被熱した遺物が多く出土していることである。焼土面は確認されず、屋敷火災の痕跡はみられなかったため、火災に関連する遺物とは考えにくい。SK05・SK06から輪

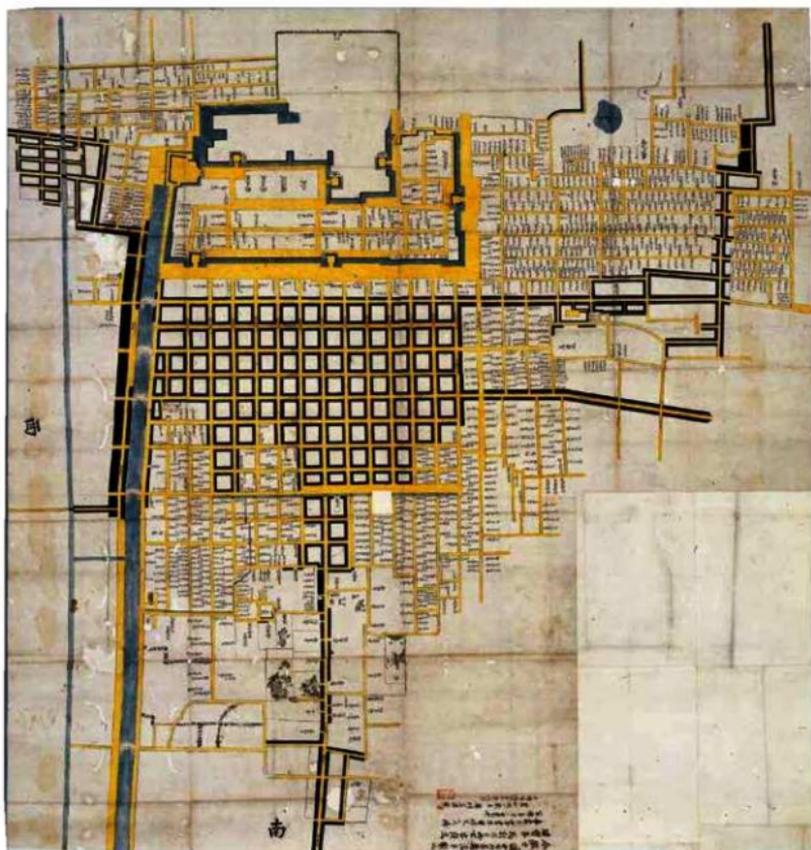


図12 万治年間名古屋図

一般財団法人名古屋城振興協会所蔵



図13 万治年間名古屋図(幅下部分拡大)



写真1 西区完掘(東より)



写真2 東区完掘(西より)



写真3 SK01 完掘(東より)



写真4 SK02 完掘(南東より)



写真5 SK03 完掘(南より)



写真6 SK04 完掘(南東より)



写真7 SK05・SK06 断面状況(東より)



写真8 SK05・SK06 完掘(北より)



写真9 SK06 黄瀬戸鉢出土状況(東より)



写真10 SX07 検出状況(北より)



写真 11 SK06 出土の黄瀬戸大鉢 (46)

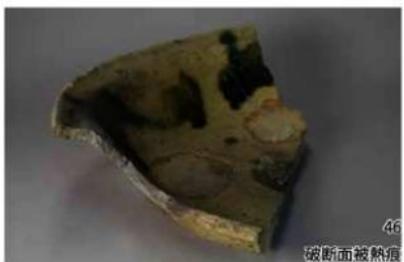


写真 12 SK05・SK06 出土の輪羽口と鉄滓















清水寺遺跡(第6次)

例言

- 1 調査は杉浦裕幸・樋田泰之・林田愛美が担当した。整理作業及び報告書の作成は樋田泰之・杉浦裕幸が担当した。写真撮影については、現場写真は杉浦・樋田が撮影し、遺物写真は杉浦が撮影した。出土遺物の注記は「N087.6(清水寺6次)」とし、遺物台帳の番号を付している。
- 2 報告書の作成にあたっては文化財保護課学芸員諸氏の助言・協力を得た。なお、弥生土器の時期比定等については村木誠氏(名古屋市博物館)から、常滑焼については中野晴久氏・小栗康寛氏・山本智子氏に教示頂いた。蓬左文庫所蔵文書については星子桃子氏(名古屋市蓬左文庫)、読下しについては岡村弘子氏(名古屋市博物館)に御教示頂いた。
- 3 遺物の編年については、主に下記文献を参考にした。

◆弥生土器

永井宏幸・村木誠 2002「第1部 各地域の様式と編年 3 尾張地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社

宮腰健司 2003「第1章 総論 第3節 時期区分」『愛知県史 資料編 2 弥生』愛知県

◆須恵器・灰輪陶器

城ヶ谷和弘 2011「第1章 総論 第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施輪陶器(緑輪・灰輪)」『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県

愛知県

城ヶ谷和弘・井上喜久男 2015「第4章 第5節 編年論 須恵器・瓷器」『愛知県史 別編 窯業 1 古代 掘発掘』愛知県

◆山茶碗・古瀬戸・瀬戸・美濃大窯製品、常滑焼

藤澤良祐 2007「第1章 総論 第2節 灰輪陶器から山茶碗生産へ」『編年表』『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

中野晴久 2012「編年表」『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県

中野晴久 2022「第5章 中世陶器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真岡社

山本智子 2022「第3章 山茶碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真岡社

◆土師器煮沸具

鈴木正貞 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

愛知県史編さん委員会 2017「第1章 総論 第3節 時期区分と編年」『愛知県史 資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』愛知県

挿図目次

図1 清水寺遺跡周辺の地形図	34	図17 SD601 出土遺物 1	60
図2 清水寺遺跡調査区位置図	36	図18 SD601 出土遺物 2	61
図3 清水寺遺跡遺構位置図(西側)	38	図19 SD601 出土遺物 3	62
図4 清水寺遺跡遺構位置図(東側)	39	図20 SD601 出土遺物 4	63
図5 確認調査・工事立会箇所等位置図	44	図21 SD601 出土遺物 5	64
図6 第6次調査平面図	49	図22 SD601 遺物出土状況	65
図7 西壁・北壁断面図	51	図23 SD603 出土遺物	67
図8 平面図(SB601～SB604)	52	図24 SK603 遺物出土状況	68
図9 SB601・P05・P28 出土遺物	53	図25 SK603 出土遺物	68
図10 SB602・P40 出土遺物	54	図26 その他の出土遺物	69
図11 SB603 出土遺物	54	図27 桶狭間周辺の城館と地名	82
図12 SB604 出土遺物	55	図28 本地鳴海古城跡之図	83
図13 SK601 出土遺物 1	56	図29 地籍字分全圖(尾張國愛知郡鳴海村)部分	84
図14 SK601 出土遺物 2	57	図30 愛知県教委(1991)による丹下砦の推定位置	84
図15 SK602 出土遺物	57	図31 高田(2000)による丹下砦の推定位置	84
図16 北・中央・南ベルト断面図	59	図32 地籍図と清水寺遺跡調査区重ね合わせ図	85

第1章 序説

第1節 遺跡の立地・地理的環境

清水寺遺跡^{しみずてら}の位置する名古屋市東部は、更新世前期～中期に形成された唐山層^{からやま}・八事層^{やごころ}で構成された東部丘陵が広がっている。唐山層は下位の3～6mの礫層と上位の3～4mの砂・シルト層から構成され、その上位の八事層は層厚20～30mのチャートの円礫・垂円礫の礫層を主体とする層である。この丘陵は河川の開析により枝状の谷が細かく入っている。なかでも鳴海周辺は、鳴海丘陵（鳴子丘陵）と呼ばれる。

本遺跡は鳴海丘陵の中でも西端に位置し、周辺の標高は6～15mである。標高は南東に向かって低くなっており、なかでも6次調査地点は埋蔵文化財包蔵地の中でも標高15m前後のピークからやや東向きに緩やかに下る丘陵上にあたる。丘陵の西側には天白川が流れ、川に臨んで一帯は沖積平野となっており、少なくとも弥生時代～古代にかけて、年魚市潟（あゆち潟）という浅遠の湿地帯が広がり、この周辺は伊勢湾最奥部の結節点となっていた。また、清水寺遺跡の東側に位置する成海神社との間にも細かい谷が入っていることが現況でも確認できる。中世には各地と鎌倉を結ぶ鎌倉街道が遺跡の東側で南北に往来していた。その後、湿地帯の干拓や埋め立てなどにより内陸化が進んだことで交通路は南側へと移っていった。近世に入ると遺跡の西側には東海道が本格的に整備され、この地域は交通の要衝となっていた。

清水寺遺跡は昭和54(1979)年に作成された市の遺跡分布図には「清水寺貝塚、清水寺・森下遺跡、丹下砦跡、鳴海代官所跡」と記載されている。これらを総称して現在の市の遺跡台帳では「清水寺遺跡」としている。

第2節 周辺の遺跡・歴史的環境

気候の温暖化が進み、海水準の上昇がピークを迎えた縄文海進の時期に当たる縄文時代早期～前期には、鳴海丘陵の縁辺部には貝塚遺跡が形成され、銚ノ木貝塚（早期～前期）、上ノ山貝塚（早期）、大根貝塚（前期）が知られる。海水準がピーク時より下がった後期～晩期には、鳴海丘陵上には本遺跡や三王山遺跡・光正寺貝塚・雷貝塚などが知られ、中でも雷貝塚は、昭和初期の発見当時、小栗鐵次郎が「現存の部分は約一〇〇亞（三〇〇坪）の地域に亘り、地表下三〇釐内外の所に、ハマグリ・チンミ・ゴーナ・ニシアサリ等、鹹水産貝類を主とした厚二〇釐より六〇釐に及ぶ貝層を有し」、「貝層下には往々人骨の埋没して居る」と報告している¹。天白川を挟んで西の対岸に位置する笠寺台地では粕高遺跡で早期後半の土器、見晴台遺跡で晩期の土器や貯蔵穴・石器等も断片的に出土している。

これらの遺跡の多くは戦前から知られ、調査研究も進み、上ノ山貝塚の「上ノ山式」・粕畑遺跡の「粕畑式」は早期後半、銚ノ木貝塚の「銚ノ木式」は前期、雷貝塚の「雷式」は晩期前半の標識遺跡となっている。

弥生時代に入ると伊勢湾周辺ではさらに海面が下がり、沖積地上の微高地や台地端に集落が形成されるようになる。尾張地域は北部九州から伝播した遠賀川系土器が主体となり、三河地域より東は縄文土器の系譜が残る茶痕文式土器が主体であり、この両者が混交する地域に位置する。中期後集の高畝式の時期になると瀬戸内・畿内の影響を受けた凹線文土器が広がり、台地や丘陵上で遺跡が複数形成される。本遺跡でも丘陵端で竪穴建物が作られるなど集落の形成が始まる。この頃、天白川の対岸である桜本町遺跡や桜田貝塚・貝塚町遺跡、見晴台遺跡で遺構・遺物がみられる。

1：小栗鐵次郎 1933「鳴海町雷貝塚附近の貝塚」『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第十一』愛知縣

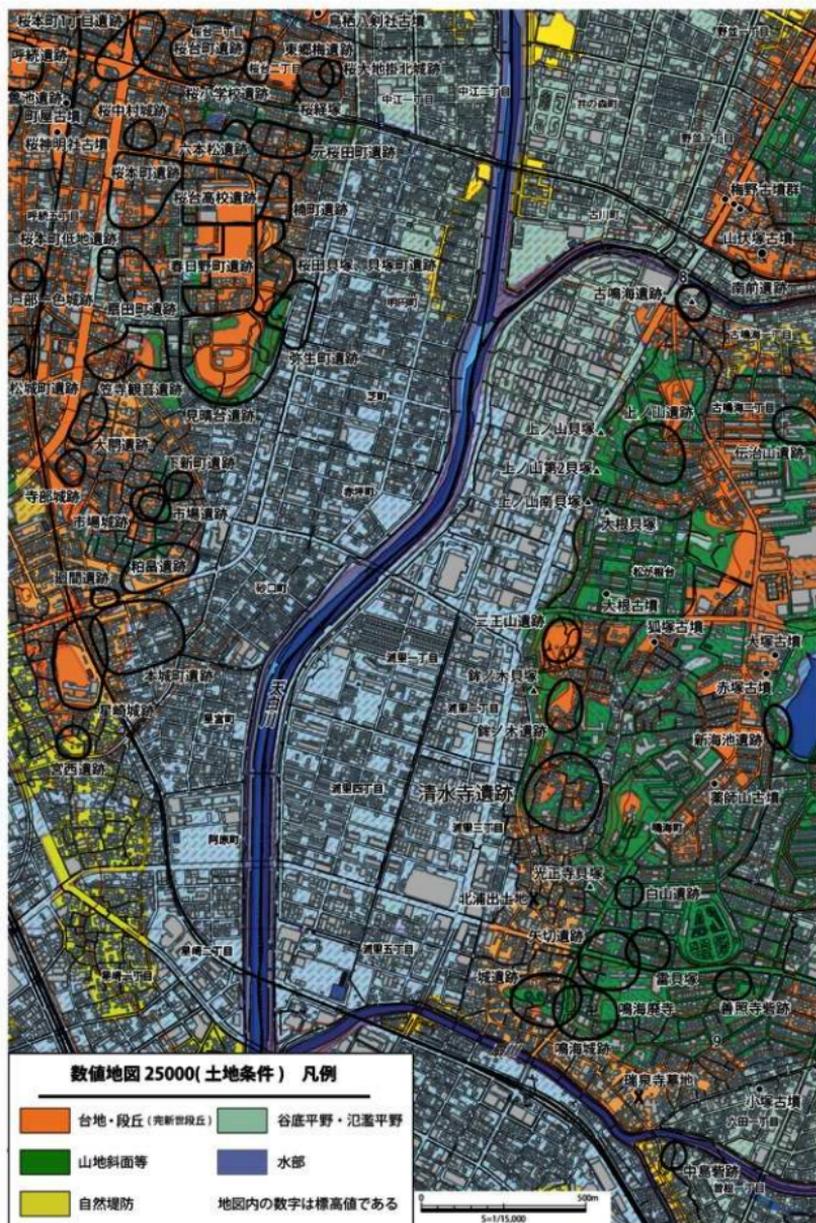


図1 清水寺遺跡周辺の地形図

ベースマップは国土地理院「基礎地図情報 基本項目」(2024年8月1日時点)、国土地理院「地理院タイル 数値地図 25000(土地条件)」(2024年8月1日時点)を使用し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15) で編集・出力した。

後期の山中式の時期に入ると、遺跡数も増加し、尾張地方を中心に華やかな文様の土器が多く作られ、パレススタイル土器と呼ばれる赤く彩られた土器もみられる。鳴海丘陵上では三王山遺跡で方形周溝墓が築造され、その後、方形周溝墓を壊す形で集落の環濠が掘削された。同時期に上ノ山遺跡では竪穴建物が2棟確認されている。やや遅れて城遺跡で環濠が作られた。天白川の対岸では、桜小学校遺跡・六本松遺跡・見晴台遺跡で竪穴建物、桜台町遺跡・扇田町遺跡で方形周溝墓と考えられる溝、桜田貝塚・貝塚町遺跡、春日野町遺跡、見晴台遺跡、元桜田町遺跡で環濠、桜本町遺跡では竪穴建物が確認されている。

終末期～古墳時代初頭の廻間式の時期になると、S字状口縁付甕などの尾張地方独自の土器も見られるようになる。本遺跡では丘陵上に方形周溝墓や竪穴建物が作られた。また、この時期には三王山遺跡や城遺跡の環濠が半ばまで埋没が進む。同様に桜田貝塚・貝塚町遺跡、見晴台遺跡でも環濠が埋没していく。

古墳時代に入ると、本遺跡では前期～後期の竪穴建物が少数ながら見ついている。三王山遺跡で中期～後期の竪穴建物が作られ環濠が埋没する。城遺跡では前期及び後期の竪穴建物が確認されている。一方、丘陵上には大塚古墳・赤塚古墳・薬師山古墳・大根古墳・狐塚古墳等の古墳が築かれている。

古代になると本遺跡においても第3次・第5次調査で竪穴建物がみられる。8世紀中頃に鳴海廃寺が創建され、伽藍配置などは不明であるが瓦溜まりが確認されたほか、平安～鎌倉時代と考えられる掘立柱建物も確認されている。古代の集落としては、桜本町遺跡で竪穴建物・掘立柱建物跡、鍛冶関連遺構が確認されているほか、見晴台遺跡で竪穴建物、鉄滓・輪羽口などが確認されている。

中世は鳴海廃寺で鎌倉時代の鍛冶関連遺構や室町期の井戸状遺構などが、桜台高校遺跡で土坑・溝が、見晴台遺跡で土墳墓が確認されている。戦国期後半に入るとこの地は尾張の織田信長方と三河の今川義元方の攻防の最前線となり、多くの城館が造られるようになる。永禄3(1560)年の桶狭間の戦いや永禄6(1563)年の清須同盟を経てそれは終息していく形となる。天白川流域でも城館跡が点在しており、大高城跡・丸根岩跡・鷲津岩跡が知られるほか、鳴海(根古屋)城とその周囲の付城である丹下砦跡(本遺跡)・善照寺砦跡・中島砦跡が知られる。三王山遺跡では15世紀後半の遺物を含む大溝や柱穴列、桜本町遺跡や春日野町遺跡では城館の堀と考えられる大規模な溝が確認されている。

江戸時代になると江戸幕府が支配体制の確立のため、全国規模の主要幹線として五街道と付属街道の整備を慶長6(1601)年から開始した。その中で幕藩の公用通行の宿泊や運輸の機能を持つ宿駅として、尾張東部を通過する東海道には市域では鳴海宿・熱田宿の2つの宿駅が設けられた。鳴海宿の宿駅施設のうち「本陣」は根古屋町に、「脇本陣」はその西側の本町に設けられたほか、旅人が休息する茶屋のある立場は平部町と丹下町に置かれた。そのほか、鳴海宿の人馬のかかる費用の捻出のため、天白川下流域に鳴海伝馬新田(現在の南区上浜町・要町・天白町)を開いた。また、鳴海宿は幕府の道中奉行の支配下にあったが、宿のある鳴海村は尾張藩の国奉行の支配であった。その国奉行を構成する代官が執務する鳴海代官所(陣屋)が天明2(1782)年に「森下」に設けられたのち、江戸時代末の万永元(1860)年「清水寺」に移った。

《参考文献》

- 本村有作 1996 『雷貝塚第2次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
 竹村恵二・岡田篤正ほか 1997 『第2章 名古屋の地盤ができるまで 第3節 名古屋の地下の様子と地層のひろがり 2 丘陵地に分布する地層』『新修名古屋史 第八巻自然編』名古屋
 海洋正論・森勇一 1997 『第3章 縄文・歴史時代の名古屋の自然 第1節 縄文時代・縄文海進と内湾の拡大 3 縄文時代後半の環境変化』『新修名古屋史 第八巻自然編』名古屋
 下村信博 1998 『第7章 第1節 織田信長の登場』『新修名古屋史 第2巻』名古屋
 藤瀬子 1999 『第5章 城下の人々 第4節 名古屋の街街道』『新修名古屋史 第3巻』名古屋
 横田祐司 1999 『第7章 市域の村々 第1節 尾張藩の地方支配』『新修名古屋史 第3巻』名古屋
 新修名古屋史資料編編集委員会編 2008 『新修名古屋史資料編 考古1』名古屋
 新修名古屋史資料編編集委員会編 2013 『新修名古屋史資料編 考古2』名古屋
 ※この他各遺跡の発掘調査報告書を参考にした。

第3節 過去の調査

清水寺遺跡のこれまでの調査は、昭和49(1974)年4月に光明寺の新墓地の一部を名古屋考古学会有志・大江中学校生徒が調査を実施したほか、市教委による調査は5回実施している(図2)。しかしながら、第1次～第4次については概要報告に留まり、近年の市史作成の際に一部の遺物が報告されているものの全体については未整理になっている。今回の本報告書にて併せて整理・検討を行うべきであるが、平面図の第2原図のトレースのみに留まった。また第1次～第3次の遺構名も当時の調査日誌・図面類にあたったものの正式な遺構名が振られていないものもあるため、第3次調査以前の調査は任意の遺構名で述べるが、今

後の検討材料とするために当時の日誌などで確認できた名称は備考欄に記した。日誌及び概要報告を読み進めていく中で、中世の大型の溝の一部と第2次調査森下地区が未掘削のまま、埋設していることが分かった。また、第1次調査第3地点の平面図が第5次調査報告書および名古屋市史において反時計回り90度で振った状態で報告されていることを今回の作業の中で確認した。本来図面類は正確に公表すべきところであり、該当部分については、今回報告で修正した。

なお、第1次～第3次調査は、周辺の開発に伴い、遺跡の範囲確認調査を主目的として国庫補助金を得て行なったもので、第4次調査は、愛知県の急傾斜地擁壁工事に伴うもの、第5次調査は森下地区の区画整理に伴う造成工事によるものである。

名古屋考古学会

調査期間：昭和49(1974)年4月

表1 名古屋考古学会調査遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SD001	検出長 8m・幅 2m・深さ 1m	土器類	中世末期	東の溝(5次報告書)。南北方向。溝の東端は崖面で終了
SD002	不明	不明		西の溝(5次報告書)。東の溝のすぐそば。一部分の調査

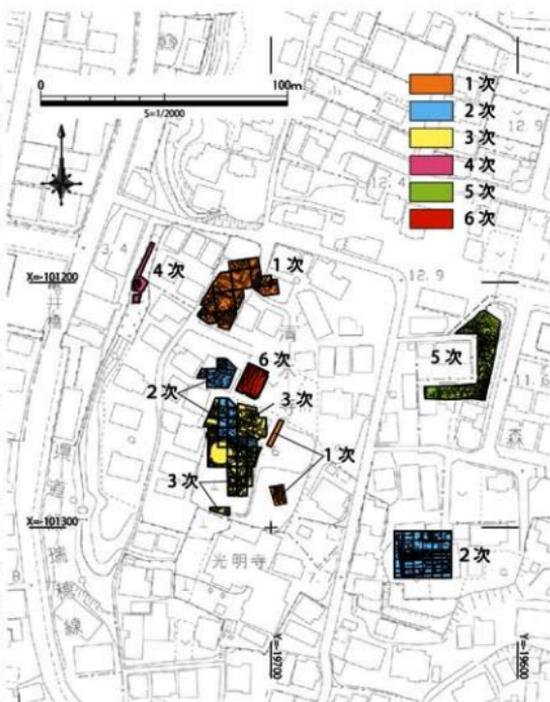


図2 清水寺遺跡調査区位置図

第1次調査

調査期間：昭和50(1975)年10月25日～11月28日

調査概要

第1地点 南が高く北へ傾斜が下る地形で、地山は北側は軟らかいシルトまたは砂質の黄～黄褐色土、南側は拳大～指頭大の礫を大量に含む鉄分の多い褐色土。

表2 第1次調査第1地点遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SD101	8.3m・幅7.6m(図面より推定)	赤彩鉢など	山中式	溝1(1次目誌)。南北方向の幅広の浅い溝。方形埴溝群の周溝か。
SM102・103	不明	貝・土器	弥生時代後期	Cb82p.1・Cb80貝層(1次目誌)。調査区西端で貝層を2か所確認し、うち1か所は弥生時代後期。
SD104	上端1.4m・底幅0.6m、深さ1.5m	多量の羽釜・甕・常滑焼甕・かわらけ、炭化物・焼土、幅口片か	16世紀初頭埋没	溝5・溝7(1次目誌)。東西・南北方向にL字型に伸びる大溝。台形状の断面。東西方向の溝がやや浅く、遺物量が多い。
SB105	4.3×4.5m		不明	住居址(1次目誌)。柱穴や床土は確認できず。
SB106	4.3m×4.5m(図面より推定)	柱跡	不明	比較的大型の正円形ピット8基。略正方形の掘立柱建造物か(1次目誌)。

第2地点 遺跡の最高所にあたり、南へ下り始める地点に位置し、貝層の広がりを確認する目的で2×10mのトレンチを設定した。地山は熱田層と考えられる赤色の強いシルト質である。縄文後晩期の板状土偶が出土した。

表3 第1次調査第2地点遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SX107	不明、深さ2m	貝、須恵器(奈良時代)	不明	貝層(1次目誌)。西から東方への溝または落ち込み。破砕されていないオリジナルな貝層を2層確認。自然現象による再堆積か。

第3地点 地山はやや粗い黄褐色のシルト層で第2地点に似る。調査区南端付近で黒灰色砂質土内で羽釜と土師質灯明皿が出土したものの時期や出土状況を確認できなかった。調査区の西側・南側は光明寺本堂建設工事の際に削平されたと考えられ、当初調査予定だったが調査対象から除外している。

表4 第1次調査第3地点遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SD108	4.3m・幅0.8m(図面より推定)		不明	溝A(1次目誌)。南北方向の溝。埋土は黒灰色砂質。SD109とT字状に交わる。
SD109	4.1m・幅1.2m(図面より推定)		不明	溝B(1次目誌)。東西方向の溝。埋土は黒灰色砂質。

第2次調査

調査期間：昭和51(1976)年10月25日～12月7日

調査概要

清水寺北区：1次調査の南側、本調査(6次)の西側に位置する。表土の下は黒茶褐色の砂質層で、地山は粘性の高い赤褐色土である。

表5 第2次調査清水寺北区遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SB201	直径4m、幅0.2mの周溝		不明	円形住居(2次目誌)。SB202に先行する。埋土は褐色砂質土主体の黄色シルトブロック。
SB202	9.0m以上×4.3m以上(図面より推定)	貝・土器	高蔵式	方形住居(2次目誌)。埋土は薄く黒褐色砂・シルト質。床面で3か所の焼土。
SP203	1×0.9m		不明	N16W16大型Pr(2次目誌)。SB201中央部の焼土を多く含んだ深いピットで地山由来の赤色～黄色シルトを主体とする埋土で叩き締められる。
SD204	4.3m×幅1.1m(図面より推定)		弥生時代後期か	浅い溝(2次目誌)。東西方向の溝でSD205と直交する。比較的浅く、埋土はSB202と同様。
SD205	3.5m×幅0.5m(図面より推定)		弥生時代後期か	浅い溝(2次目誌)。南北方向の溝でSD204と直交する。埋土はSB202と同様。
SP206	1.3m×1.3m		弥生時代後期か	N16W20方形ピット(2次目誌)。埋土はSB202と同様。
SD207	3.2m×幅1.1m(図面より推定)		弥生時代後期か	N16W28浅い溝(2次目誌)。埋土は黒褐色砂質土。SD101と断面形状が似ており逆台形。
SD208	8.6m×幅2.3m(図面より推定)		16世紀初頭埋没	大溝(2次目誌)・溝3(3次目誌)。SD104と似る溝。肩は2段で埋土は成褐色礫混じりのシルト質土。

Y=-19750

Y=-19700

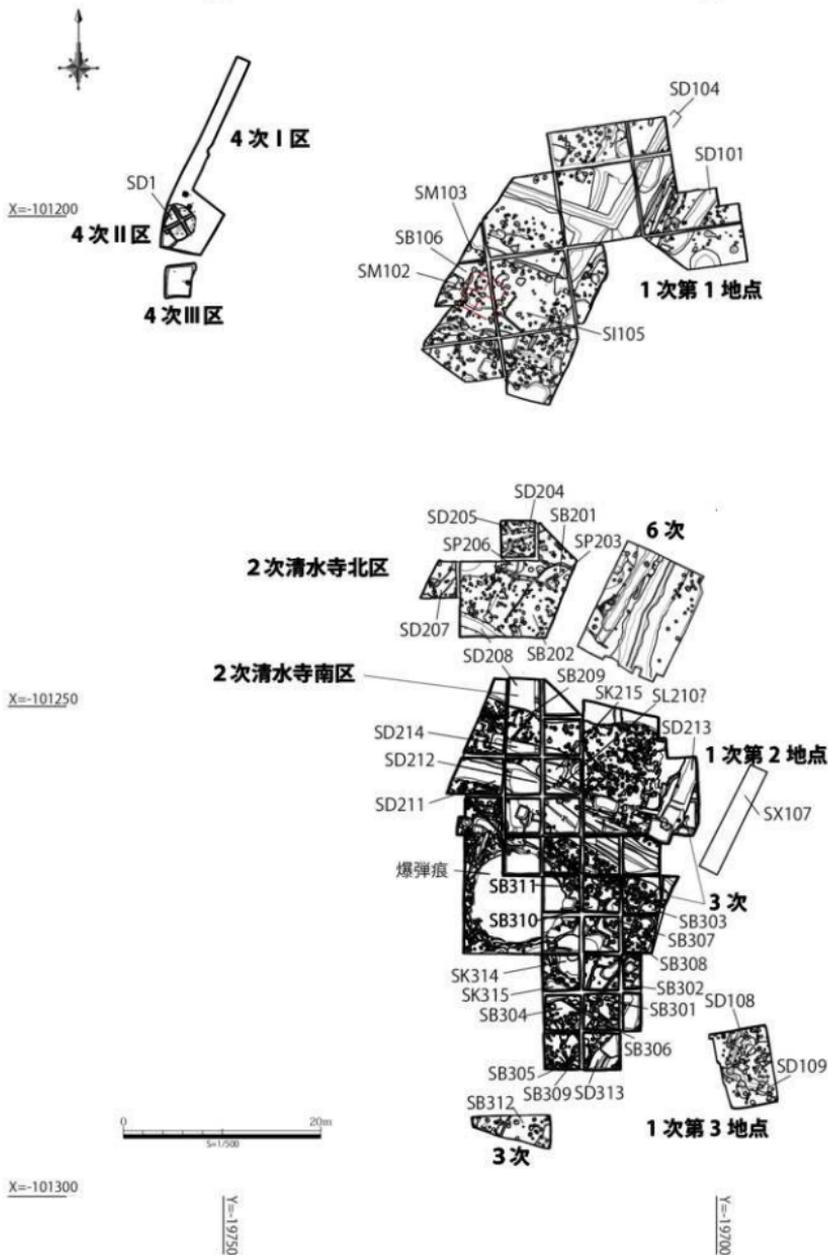


図3 清水寺遺跡遺構位置圖(西側)

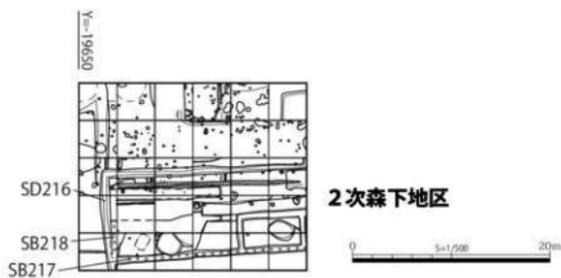
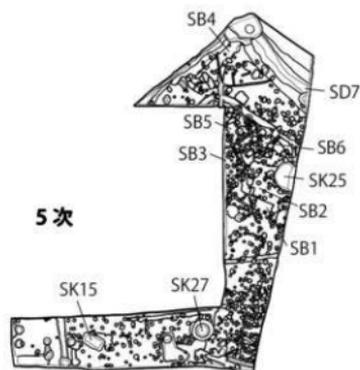


図4 清水寺遺跡遺構位置図(東側)

清水寺南区：北区から1グリッド(4m)南に間を開けて設定された。北半は黒褐色砂質土で地山は赤褐色土である。中央部より南半は表土直下が攪乱された灰褐色砂質土で地山は赤色シルトである。

表6 第2次調査清水寺南区遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SB209	不明		不明	12号住居(3次日誌)。壁穴建物で周溝とか跡を持つ。埋土は黒褐色シルト。南北を大溝に切られる。
SL210	不明	弥生土器(甕)	弥生時代後期	北平分の南外れに位置する竈跡。大溝に大平を切られる。
SD211	幅3m×深さ1.2m	古瀬戸・山茶碗・土師器・古銭等	1400年頃	溝(2次日誌)・溝2(3次日誌)。複数の大溝で構成されるうちの一つ。埋土は2層に大割され、下層は砂質で遺物は殆ど含まず、上層は黒褐色礫混じりシルト質で多量の壁土とまとまった遺物を含み、掘方レベルは地山の赤色シルトブロックを多量に含む土で突き固めている。
SD212	不明			溝(2次日誌)。複数の大溝で構成されるうちの一つ。SD211上面で確認。やや東西方向に振り、幅はSD211と同じで浅い逆梯形の溝。
SD213	幅2.3m×深さ1.2m	古常滑甕・古瀬戸	1400年～1500年代	溝5(3次日誌)。SD212と東側調査区端で直交する南北方向の溝。北側で2段、南側で1段の段差が斜につく。
SD214	8.0m×幅1.6m(図面より推定)			溝1(3次日誌)。小規模な溝で埋土は灰色砂質で比較的新しい時期のもの。
SK215	辺2.5m、深さ0.6m	多量の炭化物和焼土塊、樋口か		方形ピットで、浅い短い溝が付属。鉄滓は出土していないが野鍛冶か小鍛冶の可能性あり。

森下地区：表土の下は灰褐色の砂・シルト層で地山は赤色シルト層である。灰褐色砂・シルト層から掘り込んでいる遺構もある。この調査区は北半分は一部包含層を残した状態で、南半分は地山をベースとする遺構については未調査の状態現場を埋戻しを行なっている。包含層から平安時代の須恵器が出土。

表7 第2次調査森下地区遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SD216	南北9m・東西25m以上		江戸時代中期	断面形状は逆台形。
SB217	21間17.8m(図面より推定)		江戸時代中期	SD216の東西方向の溝と並行する溝内の自然石による柱礎石列。溝を埋めた後に据えられたとみられる。
SB218	3間2.4m(図面より推定)		江戸時代中期以降	SD216の南北方向の溝の内側掘方に位置

第3次調査

調査期間：昭和53(1978)年11月9日～昭和54(1979)年2月9日

調査概要光明寺墓地の北の境内より一段と高い荒地で南東に緩やかに傾斜する。西側は宅地、東側は削平された畑地で、第2次調査清水寺南区を取り囲むような調査区配置である。南西部に直径約10mの落ち込みがあり、近隣住民の証言では太平洋戦争の際の爆弾痕と言われている。

表土直下に炭化物・焼土・礫を含む褐色砂層があり、その下に暗灰褐色砂・シルトに炭化物・焼土をより多く含む遺物包含層がある。この包含層には弥生時代から中世の遺物を含み、この層を切るような遺構もある。地山は赤褐色シルト。調査区北東に設けたトレンチで貝層が地山直上で一部見つかり、SD213に切られる。縄文時代中期の土器が1点出土し、小型のハイガイ・ハマグリを主体とし、獣骨・獣歯が含まれる。

表8 第3次調査清水寺北区遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SB301～SB312			古墳時代など	1-11・13号住居(3次日誌)壁穴建物が12棟確認。時期を特定できるものは少ないが、古墳時代後期のものもある(SB302[2号住居])。
SD313	幅2m×深さ1.5m			溝4(3次日誌)。SD213より新しいか。均一な埋土で人工的に埋立てられたか。
SK314	不明			土坑B(3次日誌)。赤褐色シルトブロックを含む黒褐色砂・シルトと赤褐色シルトブロック・黄色砂を主体とする。上面には土坑・ピットが掘り込まれる。4グリッドにまたがる。
SK315	不明	土師皿	近世	土坑D(3次日誌)。埋土は遺物包含層よりややシルト質が強く色が薄い暗灰褐色砂・シルトで、底面から土師皿が数点出土。土壇籠か。SB304(4号住居)を切る。

第4次調査

調査期間：昭和58(1983)年9月10日～10月7日

調査概要：遺跡北西端の崖線上に位置する。南北に長い調査区であり、北側の幅1.5m・長さ15m部分をⅠ区、中央の6m四方の部分をⅡ区、南側の飛地部分3m四方の部分をⅢ区としている。

Ⅰ区 表土・盛土の下に大小の礫を含む粘性でしまりのやや強い暗褐色土があり、遺物包含層である。弥生土器から近世の遺物が含まれる。ベースは礫層で直上に黄褐色土が薄くのっているものの傾斜面での流れ込みと想定される。

Ⅱ区 表土に弥生時代から近世の遺物がまぎって含まれる。下層に桃褐色土ブロックが含まれ攪乱されており、その下層の暗褐色土・黄褐色土にも縄文時代から近世の遺物が含まれる。SD1のほかにも0.3～0.4m程度の方形ピットを2基確認、上面の遺物包含層(暗褐色土)の遺物より、12～16世紀と推定。

表9 第4次調査Ⅱ区遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SD1	幅3.5m×深さ2.0m以上	羽釜・常滑甕	1500年前後	土層約0.5mに礫土・炭化物を多く含む。下層は桃褐色土・褐色土で一部に人為的に埋め戻されている。下層は12～13世紀の遺物が多く含まれる。

Ⅲ区 表土面からベースまで約0.7～0.8mで暗褐色土に含まれる遺物は土師器が少量含まれたのみである。0.3～0.4m程度の方形ピット1基を確認。Ⅱ区のピットと同様の時期であると考えられる。

遺物については、縄文時代早期後半～中期前半～中葉の小片、弥生土器・土師器は高畝式～廻間式のものが出土し、廻間式のもの相対的に多い。須恵器は7～12世紀のもの、灰軸陶器は9～12世紀、常滑甕はN字状口縁とそれより新しい時期の折り返し口縁が見られ、山茶碗類は12～15世紀、土師器煮沸具は羽釜・土鍋・皿・焙烙が含まれ、焙烙は江戸時代と考えられる。瀬戸美濃製品は15～16世紀のものが多く、主としてSD401で出土している。特異な遺物としては、平瓦1点・青磁1点が出土している。

第5次調査

調査期間：平成8(1996)年9月24日～11月15日

調査概要：丘陵を一段下がった標高12m前後の森下地区に位置する。調査区はコの字状になっており、東・北に緩やかになっている地形である。表土・盛土の下は灰褐色～褐色砂質土、灰褐色土、黒褐色土で、それぞれ近世～近代、弥生～中世、弥生～古代の遺物を含む遺物包含層で、その下に黄褐色シルト質土の地山である。

表10 第5次調査遺構一覧

遺構名	規模	出土遺物	時期	備考
SB1～SB6		弥生土器、鏡形器台、S字繫、高杯、須恵器など	弥生～古代	壁/建物6棟、SB3から高畝式の遺物かまぎって出土。SB1は廻間皿、SB4は廻間皿～松河戸1、SB2は8世紀。
SD7	幅2.5～3m×深さ0.8m	山茶碗、播鉢、常滑甕、香炉、重層皿、鍋・羽釜	15世紀後半	南西～北東方向に向き、鋭角に曲がったのち、南東方向へ走る。角にあるSK65により壊され、出土遺物が混じっている可能性があるが時期差はない。
SK15	2.3m×1.3m×深さ0.6m	土師皿、常滑甕、播鉢、仏蘭貝、山茶碗	古瀬戸IV期	遺物の中でも一番多く出土している土師皿はロクロ成形されているものとされたらないものに分離する。
SK25	径2.6m×深さ1.5m以上	緑釉皿、播鉢、土師皿、白磁、須恵器	古瀬戸IV期	井戸。
SK27	径2.2m×深さ1.4m以上	山茶碗、播鉢、常滑甕、茶臼	15世紀後半	井戸。

これらの調査成果から清水寺遺跡を大きく下記の時期に大別した。

I期 縄文時代中期・後晩期

増子康真氏による中期・咲畑式の土器の提示のほか、3次調査で中期の土器を含む貝層が出土。1次調査第2地点で再堆積した貝層中より後晩期の板状土偶が出土。

II期 弥生時代中期後葉(高蔵式)

5次調査で竪穴建物1棟(SB3)

III期 弥生時代後期(山中式)～古墳時代初頭(廻間式)

1次～3次・5次でIV期と併せ、竪穴建物10数棟。1次で方形周溝墓の周溝(SD101)。

IV期 古墳時代～古代

1次～3次・5次でIV期と併せ、竪穴建物10数棟が確認されているが不明な部分も多い。

V期 1400年～1500年頃 こやしき(古屋敷)

2・3・5次で屋敷の堀と考えられる溝

VI期 1500年～1560年頃 丹下砦

1・2・3次で屋敷の堀と考えられる溝

VII期 江戸時代中期 鳴海代官所(陣屋)

2次森下地区で溝や礎石列

先ほど述べた通り未整理の部分が多いが、II～III期とV～VI期に大きな画期があると考えられる。(樋田)

《参考文献》

- 三浦俊一郎・松岡浩ほか 1976『文化財産第69号 緑区の考古遺跡』名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会 1976『緑区鳴海町 清水寺遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会 1977『緑区鳴海町 清水寺遺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会 1979『緑区鳴海町 清水寺遺跡第Ⅲ次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会 1984『緑区鳴海町 清水寺遺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
野口泰子 1997『清水寺遺跡第5次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
※この他各遺跡の発掘調査報告書を参考にした

第4節 確認調査・工事立会

第5次調査以降は今回の第6次調査までの間、宅地造成・管路掘削などの事業により50件を超える93条・94条の届出・通知が出され、2006～2018年度に7地点において確認調査を実施している。しかし、近年においては工事立会が多く、慎重工事の取り扱いがそれに次いでいる。これらの確認調査・工事立会の概要については図・表に示した(図5・表11)。確認調査・工事立会記録の成果は少ないが、以下にまとめておきたい。確認調査は今回の調査につながった[9]の事例を除くと遺構を確認したのは[3]の地点に限られた。また、遺物包含層については[3]のほか、[4]の地点で確認しているにすぎない。また、[2][5][6]の地点は本遺跡の北東部に位置し、現状では平坦地であるが、基盤層がやや深い深度で確認され、旧地形が浅い谷状であったことが推定され、遺構の希薄な区域と考えられる。

一方、工事立会は30地点に及んでいるが、遺構・遺物包含層を確認しているのは①・②・④・⑤の地点で、それ以外で遺物の出土や遺物の採集ができたのは⑤・⑥とわずかであった。これらの多くは第1～6次調査区に隣接もしくは近接した位置にあり、本調査以外の成果としては薄い。一方、④の立会地点は既調査区から離れた地点にあり、弥生時代の溝遺構の所在は注目されるものである。

表11 清水寺遺跡確認調査一覧

文書番号	所在地 (特区域画町)	事業	調査期間	遺構・遺物	
1	—	字清水寺	1989.07.28	—	
2	—	字森下	不動産 売買	2006.10.24	遺物：中・近世陶器片
3	—	字清水寺	不動産 売買	2009.10.20	遺構：ピット・土坑 遺物：土器片・山茶碗片・中近世陶器片
4	—	字森下	不動産 売買	2011.03.08	遺物：灰軸陶器片・山茶碗片など
5	—	字清水寺	不動産 売買	2011.07.13	—
6	—	字清水寺	不動産 売買	2013.02.19	—
7	—	字森下	住宅 建設	2017.10.04.06	—
8	30 教文 第1-111号	字森下	宅地 分譲	2018.07.11	—
9	4 教文 第2-395号	字清水寺	個人 住宅	2022.12.27	遺構：ピット・土坑 遺物：土器片・山茶碗片・中近世陶器片

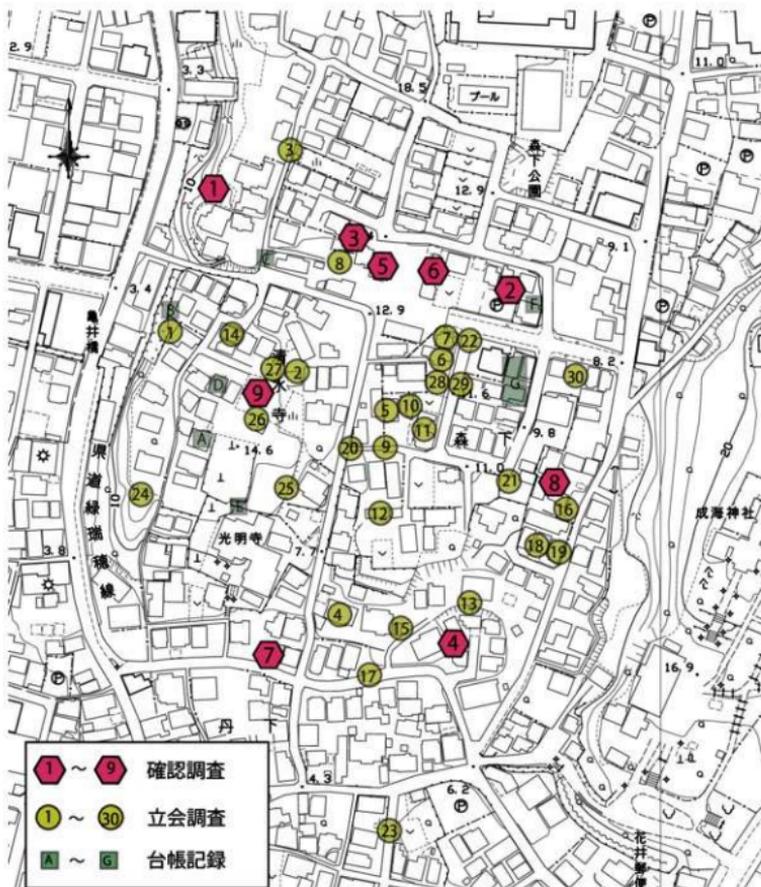


図5 確認調査・工事立会箇所等位置図

表12 1979年名古屋市遺跡分布調査により作成された遺跡台帳の記録

内容	
A	貝層東西2間半くらい、南北3間くらい、厚さ1尺くらい。
B	1977年10月28日の聞き取り：宅地造成により滅失。
C	1977年8月13日の聞き取り：宅地造成により滅失。
D	1978年5月8日の聞き取り：下水道工事の際、茶色の砂・シルト層から鎌倉時代の山茶碗・常滑甕片出土。
E	鎌倉の常滑の甕口層出土。
F	名古屋考古学会の発掘部分。幅1mくらいの溝2条
G	遺物散布、弥生土器片？・石鏃など石器片
H	平田地の東側斜面と元畑部分一帯、古墳時代須恵器・平安灰輪陶器・鎌倉山茶碗・常滑片散布
I	1978年下水道埋設工事に伴い名古屋市教育委員会緊急発掘。記録類不明。

表 13 清水寺遺跡立会調査一覧

通知文書番号	所在地 (緑区鳴海町)	事業	調査期間	遺構・遺物
1	—	宅地 造成	1984.09.27・28	—
2	字森下	ガス	1985.11.20	遺物：弥生土器高坏・杵
3	字清水寺	ガス	1988.11.30・ 12.01	—
4	18 教文第 2-21号	宅地 造成	2006.06.07・ 08	—
5	20 教文第 7-36号	個人 住宅	2008.09	—
6	23 教文第 2-124号	個人 住宅	2012.01	—
7	23 教文第 2-133号	個人 住宅	2012.01	—
8	23 教文第 2-134号	分譲 住宅	—	—
9	23 教文第 2-140号	ガス	2012.02	—
10	23 教文第 2-150号	個人 住宅	2012.04	—
11	23 教文第 2-158号	個人 住宅	2012.03	—
12	24 教文第 2-130号	ガス	2013.02.07	—
13	29 教文第 3-226号	擁壁 工事	—	—
14	29 教文第 4-362号	建物 解体	2017.03	—
15	29 教文第 4-369号	宅地 造成	2017.03	—
16	30 教文第 1-112号	建物 解体	2018.07	—
17	30 教文第 1-211号	ガス	2018.09	—
18	30 教文第 1-298号	個人 住宅	2019.01.09	—
19	30 教文第 1-346号	ガス	2019.04	—
20	31 教文第 2-41	ガス	2019.05	—
21	31 教文第 2-91号	個人 住宅	2019.08	—
22	2 教文第 5-149号	ガス	2020.09.03	—
23	2 文芸第 3509号	字光正寺 ガス	2022.07.20	—
24	3 教文第 4-257号	宅地 造成	2022.02.08 ・17・18	遺構：溝状遺構・土坑 遺物：弥生土器（甕・杵）
25	4 教文第 2-42号	宅地 造成	2022.07.14	遺物：陶器片・土器片（採集）
26	5 教文第 4-42号	字清水寺 伐根・ 整地	2023.06.01	遺物：中世土師瓦甗
27	5 教文第 4-55号	字森下 既設建 物解体	2023.06.01	—
28	5 教文第 4-353号	字森下 宅地 造成	2024.03.25	—
29	5 教文第 4-378号	字森下 ガス	2024.04.25	—
30	6 教文 第46号	字森下 個人 住宅	2024.04.26	—

また、確認調査・工事立会以外にも記録がある。1978・1979年に緑区では遺跡の分布調査を実施し、遺跡の踏査のほか、記録類の収集や現地でのヒアリングなどを行っている。それらについて台帳に記載されたものについて図5・表12に掲載した。（杉浦）

第2章 調査の方法と成果

第1節 調査に至る経緯

当該地において個人住宅建設の予定があり、埋蔵文化財包蔵地の有無の確認が2021(令和3)年12月と2022(令和4)年6月にあり、埋蔵文化財包蔵地にあたることを回答。その後、事業計画が進む中で調整・協議により事業予定地において範囲確認調査を実施することとした。

2022年10月4日付で「試掘調査依頼」が提出され、範囲確認調査の調整をした。確認調査は12月27日に実施し、事業予定地内で東西方向に2カ所のトレンチを設定して掘削を行った。いずれのトレンチにおいても遺構が確認され、土器・陶器などが出土した。遺構が所在する基盤面までは表土から0.1～0.2mと浅く、事業予定の建物の建設にあたっては発掘調査が必要と判断し、2023年1月11日付で発掘調査が必要な旨と文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出を依頼した。

文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出(個人住宅の建設)が提出され、同年2月13日受理。2023年3月1日付4教文第2-395号で「発掘調査」の回答を出した。これを受けて3月13日に事業者及び土地所有者から「発掘調査承諾書」が提出され、受理した。また、住宅本体以外にも既設建物の取り壊し、樹木の伐根や上下水道の敷設などでも文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘の届出があり、掘削範囲が狭小などの事由により6～9月に工事立会に対応した。(杉浦)

第2節 調査経過(抄)

令和5(2023)年			
4月24日(月)	基準点測量(GNSS)・水準点測量		
4月27日(木)	バックホウによる表土掘削開始(～5月2日)・機材搬入	5月18日(木)	より下層は、北・中央・南ベルト部分のみの掘削に留めることとした。SD601は人力掘削を継続。
5月1日(月)	調査区南半の遺構確認		SD601の埋土中位の人力掘削を継続。中位レベルの出土遺物の出土地点の計測・取上げ。溝北側は粘土塊を中位以下で多く含む。溝南側は割れた埴大の円礫・角礫が多く混じる。
5月2日(火)	調査区北半の遺構確認	5月19日(金)	排水作業。
5月8日(月)	排水作業。機材を追加搬入。北西部より南方向へ包舎層掘削及び遺構確認を開始。竪穴建物2棟以上及びそれを切る幅2m強の南北の溝(SD601)を確認。確認と並行して5mグリッドの打設。	5月22日(月)	SD601～604床面精査、ビット掘削。
		5月23日(火)	SD601の埋土中位の人力掘削。SB601の中央部西壁沿いは弥生時代の土器が集中。遺構の平面形ははっきりしないが、竪穴建物廃絶後の廃棄土坑(SK601)とした。
5月9日(火)	南西部・東部を中心に遺構確認をおこなう。SD601は調査区の南側2mほどを残して取束。南北方向の溝(SD603)が東側で平行するが、SD601より新しい時期の遺物が多い。調査区北東部は径0.2m前後のビットが多い。	5月24日(水)	SD601の人力掘削と並行して、各ベルトの写真・図面の記録。SK601は遺物出土状況を写真記録。SB602の周溝部分の掘削。
5月10日(水)	遺構確認の続きをおこなった後、写真記録。掘削深度や作業量の確認の目的で4ヶ所にサブトレンチを設定して掘削。それぞれ東西方向に設定し、北側より北ベルト(SP-A・A)、中央ベルト(SP-B・B)、南ベルト(SP-C・C)、南壁ベルトとした。	5月25日(木)	SK601は時間の制約のため、a～iの9ブロックに分割して取上げ。SD601は開発予定の深度まで掘削は終了し、溝底まで残り約0.2m程度は未掘となる。SD603は西肩部分の掘削。SB605電精査。調査区北東部のビット群掘削。
5月11日(木)	東側の溝は新旧2条の溝が同じ方向で重複しており、新しい溝(SD602)は幅0.5m程度で遺物を含まない。その下層のSD603は幅4m程で中世遺物を含む。また、調査区中央北寄りで山茶碗を多く含む径0.5m程度の土坑(SK603)を確認。また、建物跡部分(SB601)で有茎石礫が1点出土。	5月26日(金)	SB603周辺掘削。全体清掃後、掘削写真記録。
		5月29日(月)	ビット群掘削。SK604掘削。南ベルト掘削。各遺構補足調査をおこなう。
5月12日(金)	SD601は埋土上位の人力掘削を継続。SB601南側を再度確認。別の竪穴建物(SB602)の周溝を確認。SD603の南側の機械掘削を再度行い、残っていた表土及び溝埋土の上層を除去。	5月30日(火)	排水作業。SB601床面精査。SK602掘削。南ベルト掘削。調査区北壁・西壁分層。各遺構補足調査をおこなう。SK601北部、地山ブロックを多く含む、一段下位まで下がることから別の土坑(SK602)と判断。
5月15日(月)	SD601は埋土中位の人力掘削。	5月31日(水)	排水作業。補足調査を継続。平面図・断面図の記録。粘土塊をサンプルとして採取し調査終了。埋戻し作業を開始。
5月16日(火)	SD601の出土遺物の出土地点の計測・取上げ。その後、ベルト部分の埋土下位の人力掘削。	6月1日(木)	埋戻し作業を継続。遺構補足測量。調査区内等高線測量。
5月17日(水)	SD601・603の掘削方針について、土量がかかり多くなると予想されること開発予定深度であるGL-0.6m(T.P.14.0m)	6月2日(金)	機材の一部を撤収。雨脚激しく完全撤収は順延
		6月5日(月)	機材撤収終了。(補田)



重機掘削状況(南西から)



SD601 粘土塊採取状況(北西から)

第3章 遺構と遺物

1 調査概要

第6次調査の調査面積は140m²である。遺構の確認面は西側でT.P.14.6～14.7m、東側でT.P.14.4mと緩やかに西から南東に向かって傾斜している地形である。

遺構は、竪穴建物5棟、土坑4基、ピット9基、溝4条が確認され、総遺構数は52である。主たる遺構としては弥生時代の竪穴建物5棟・廃棄土坑2基、中世の廃棄土坑1基、中近世の溝3条である。なお、前節でも触れたが、SD601・SD603については、開発により破壊される計画であるG.L.-0.6m(T.P.14.0m)より下層は、北・中央・南ベルト部分のみの完掘に留めたため、遺構・遺物は残存している。

出土した主な遺物は弥生土器・土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、古瀬戸・常滑製品、土師器煮沸具、であり、27リットルのコンテナケース15箱程度である。これとは別に中世の溝のSD601から出土した壁土と焼けた石が2箱分ずつある。

調査の際、X=-101200・Y=-19800を起点として、X軸は北から順に「1、2、3…」、Y軸は西から順に「a、b、c…」と5m毎の任意グリッドを組み、遺物を取上げる際に用いた。例えば、X=-101230・Y=-19710は7sグリッドとなる。(樋田)

2 SB601～604、SK601・602〔図8～15、図版2・3・7～11〕

今回の調査区では主な遺構が西部に竪穴建物・土坑、中央に溝、東部にピットが分布している。

調査区西部では、遺構を確認した面までが現況地表からわずか0.25～0.35mと浅く、後世の整地等の影響を受け、いずれも残存状態が良くない。また、いずれも中世の溝SD601に切られていることから残存している範囲が限られた。このような状況ではあるが、調査区西壁の断面記録と平面で確認した周溝から4棟の竪穴建物SB601～604と2基の土坑SK601・602を確認した。これらの遺構が分布している範囲は遺構の床面で標高がおよそ14.60mとなっており、調査区内では概ね平坦である。

各遺構の新旧関係は

SB604→SB603→SB602→SB601→SK601

SB602→P05(SB601)

SK602→SB601 となっている。

SB601とSB603の関係については土質・色調が類似しており、境界を判別することができなかった。

SD601～604の中世以降の溝は西部については竪穴建物の埋没した後に形成されたことが土層断面の記録と平面の輪郭の確認から判明している。

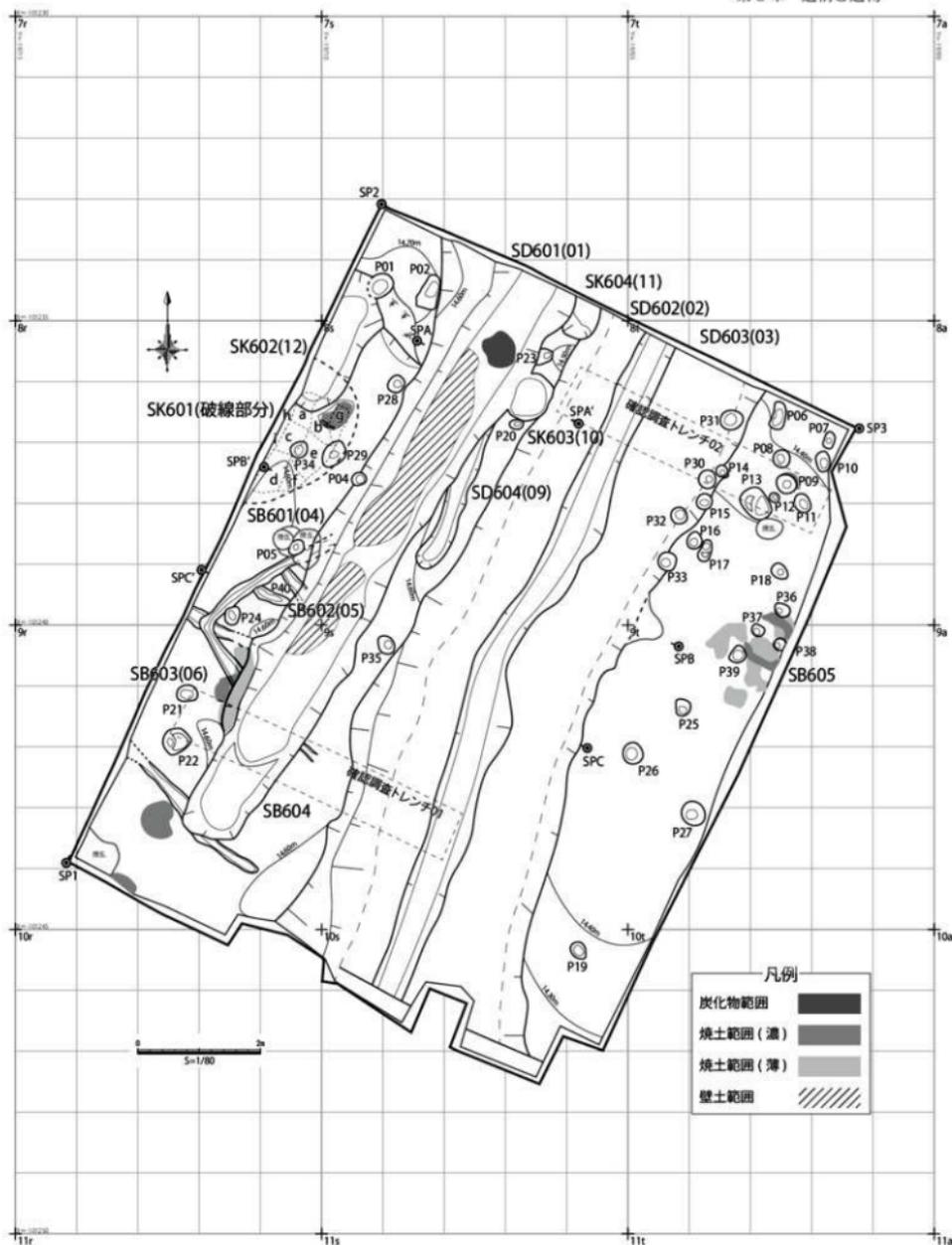


図6 第6次調査平面図

表14 第6次調査遺構一覧表

遺構名	仮遺構番号	グリッド	法量 (m)		平面形	断面形	埋土	主要遺物	備考	
			長さ	幅						
SB601	04	7r・7s・8r・8s	-	-	0.15	-	-	褐色色	赤生土・甕・高坏	N-50 E
SB602	05	8r・8s・9r・9s	(2.28)	3.30	0.14	-	-	明褐色	赤生土・甕	N-54 E
SB603	06	8r・9r	-	-	0.16	-	-	褐色色	赤生土・甕	N-35 E
SB604	06	9r	-	-	0.05	-	-	-	竈底部	N-50 E 杉の焼土面あり、黒漆のみ
SB605	08	8r・9r	(1.76)	(1.08)	-	-	-	-	-	N-64 W 電部分のみ
SK601	04 土器盛り	8r・8s	(2.70)	(1.10)	0.20	-	-	褐色色	赤生土・甕・高坏	
SK602	12	7r・7s・8r・8s	2.20	(0.80)	0.40	横長門	皿状	褐色色	赤生土・甕	
SK603	10	8s	0.85	(0.60)	0.20	圓丸方	逆台	黒褐色	山茶碗・小甕	
SK604	11	7s・8s	(0.65)	(0.15)	0.25	-	U字	褐色色/暗褐色	土師器片	
SD601	01	7s・8r・8s・9r・9s	(10.50)	1.2～1.5	0.7～0.9	-	逆台	灰褐色・黒褐色	常滑壺、古瀬戸磁鉢・碗、土師製内耳鍋・羽釜	N-32.3 E
SD602	02	8s・8t・9s・10s	11.63	0.5～1.0	0.25	-	U字	灰褐色	中近世陶片	N-22.5 E
SD603	03	7s・8s・8t・9r・9s・9t・10r・10s	11.65	3.1～4.5	1.10	-	逆台	褐色・灰褐色	土師器皿・磁器小碗	N-22.3 E
SD604	09	8s	(4.5)	0.4～0.5	0.15	-	U字	にぶい・褐色	-	N-16.6 E
P01		7s	(0.45)	0.36	0.22	楕円	U字	褐色	-	
P02		7s	0.57	0.35	0.14	不定	U字	褐色色	須恵器坏片、土師器片、天目陶片	
P03(欠番)		-	-	-	-	-	-	-	-	
P04		8s	0.24	0.21	0.06	円	U字	褐色色	赤生土口縁	
P05		8r	0.29	(0.22)	0.14	楕円	U字	黒褐色	赤生土口縁・竈底部	
P06		8t	0.45	0.23	0.25	長門	U字	褐色色	赤生土付甕台部	
P07		8t	0.27	0.17	0.12	長門	U字	褐色色	赤生土器片	
P08		8t	0.29	0.29	0.13	円	U字	灰褐色	赤生土器片	
P09		8t	0.34	0.31	0.29	円	U字	褐色色	赤生土器片	焼土
P10		8t	0.34	0.22	0.15	長門	U字	褐色色	赤生土器片	
P11		8t	0.32	0.25	0.15	長門	U字	褐色色	-	
P12		8t	0.17	0.16	0.08	円	U字	灰褐色	赤生土器片	
P13		8t	0.56	0.40	0.39	長門	U字	褐色色	赤生土片	
P14		8t	0.19	0.19	0.20	円	U字	灰褐色	赤生土器片	
P15		8t	0.26	0.25	0.14	円	U字	褐色色	赤生土甕底部	
P16		8t	0.28	0.24	0.13	円	U字	灰褐色	山茶碗口縁	
P17		8t	0.36	0.20	0.22	長門	U字	灰褐色	赤生土器片	
P18		8t	0.30	0.23	0.17	長門	U字	灰褐色	-	
P19		10s	0.31	0.24	0.08	長門	U字	灰褐色	-	
P20		8s	0.23	0.16	0.09	長門	U字	灰褐色	-	
P21		9r	0.34	0.27	0.16	楕円	U字	灰褐色	磁鉢片	
P22		9r	0.44	0.40	0.11	圓丸方	U字	灰褐色	-	
P23		8s	(0.24)	0.24	0.09	長門	U字	褐色色	赤生土器片	
P24		8r	0.30	0.24	0.11	長門	U字	灰褐色	赤生土器片	
P25		9r	0.28	0.28	0.29	楕円	U字	灰褐色	赤生土器片	
P26		9s・9t	0.35	0.33	0.12	円	U字	褐色色	赤生土器片	
P27		9t	0.41	0.38	0.20	円	U字	暗褐色	赤生土器片	
P28		8s	0.29	0.25	0.16	円	U字	褐色色	赤生高坏脚(山中)	
P29		8s	0.44	0.34	0.24	長門	U字	褐色色	赤生土器片	
P30		8t	0.30	0.29	0.11	円	U字	褐色色	山茶碗片	
P31		8t	0.38	0.32	0.24	長門	U字	にぶい・褐色	-	
P32		8t	0.28	0.26	0.26	円	U字	にぶい・褐色	山茶碗片	
P33		8t	0.31	0.30	0.22	円	U字	にぶい・褐色	赤生土口縁	
P34		8r	0.29	0.26	0.08	楕円	U字	褐色色	赤生土器片	
P35		9s	0.33	0.26	0.12	長門	U字	灰褐色	-	
P36		8t	0.27	0.21	0.19	長門	U字	褐色色	-	
P37		8t・9t	0.21	0.18	0.26	円	U字	褐色色	-	
P38		9t	0.20	0.19	0.18	円	U字	黒褐色	-	
P39		9t	0.29	0.25		円	U字	黒褐色	赤生土片・磁片	
P40		8r	0.62	0.21		長門	U字	灰褐色	-	

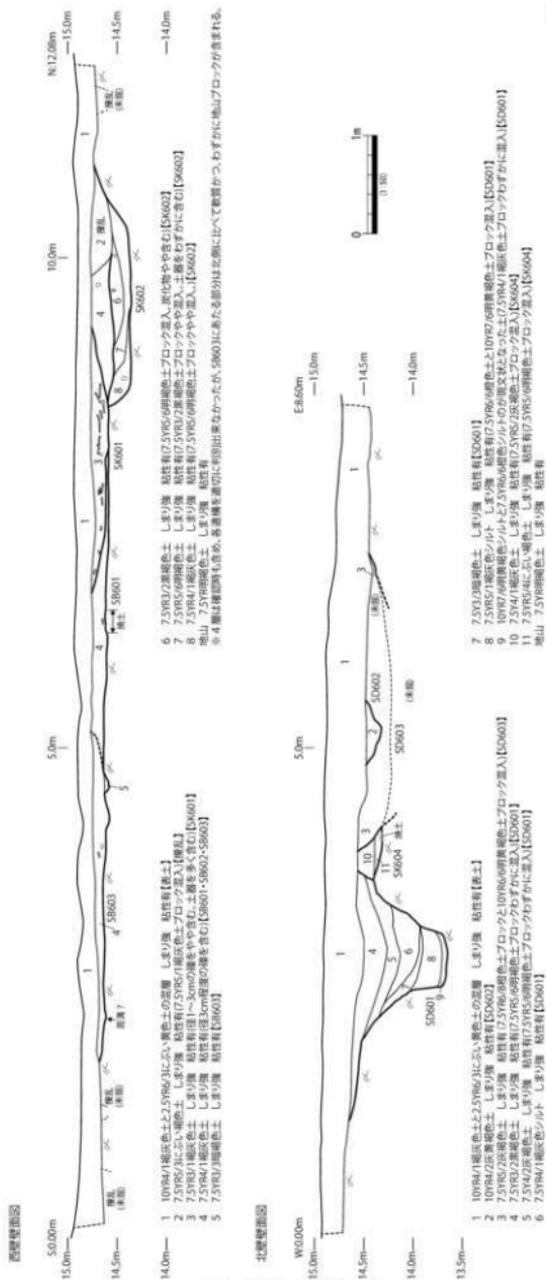


図7 西壁・北壁断面図

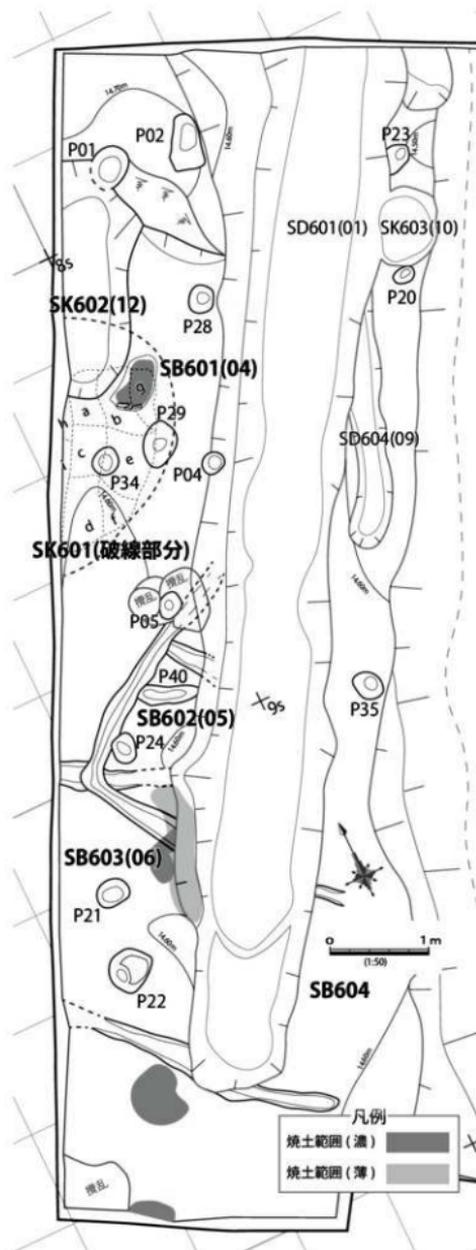


図8 平面図 (SB601～SB604)

SB601

遺構：Ⅲ C7s・8r・8sに位置する。主軸方向：N - 50° - E。北側は壁の立ち上がりがりわずかに残るが、攪乱とビットにより削られている（図8）。この個所では周溝は確認されていない。南辺は周溝がわずかに0.7 mにわたり残っている。幅0.15、深さ0.03 mと浅い。東側はSD601により切られている。西部は調査区外に延伸している。全体の規模・形状については不明である。埋土は床面から0.05～0.15 mほど残存していた。埋土は微量の炭化物粒・焼土粒を含んだよくしまった灰褐色土。床面には火処として0.7×0.3 mの楕円形を呈し、被熱して赤褐色に変色し、硬化し炉床がみられる。炉は南端に扁平な石を縦に埋め込んでいる。石は被熱している。床面より数cmくぼんでいる。埋土中からは甕・壺などの破片が出土しているが、量的にはわずかであった。床面には不規則な配置でビットがみられるが、遺物が出土したP05は床面で確認し、SB601に属すと思われる。P05は平面円形、径0.29 m、深さ0.14 mのビットで、上部は攪乱などにより失われている。甕片が出土。P28は平面円形、径0.29×0.25 m、深さ0.16 mのビットで、高環脚部片（山中式）が出土。P28は床面で確認しているが、埋土が褐色土でSB601の埋土中から掘りこまれていたかどうかは不明で、SB601とP28の新旧関係は不明である。なお、P28出土の遺物が山中式で、SB601の遺物は高蔵式の遺物を主体としている。またSB601の埋没後に形成されたSK601の遺物も高蔵式を主体としていることから、P28はSB601に伴うものではない可能性が高い。（杉浦）

遺物：弥生土器の壺・甕・台付甕・高環などが出土している。1は壺で、頸部に櫛描の直線文がある。2は壺の口縁部で刺突文が外面に施され、口縁端部は磨耗が激しいものの波状文がみられる。3は壺の底部で特に内面の磨耗が激しいが板ナデの痕跡がみられる。4は甕の口縁部でハケメや端部への刺突がみられる。5は甕の底部でハケメや板ナデ調整が見られる。6は甕の口縁部で板ナデ・ハケ調整されている。7は台付甕の脚部である。8はチャート製の石鎌であるが、刃部の先端が3分の1程欠損している。他に細片であるが黒曜石の剥離片が1点出土している。出土遺物は弥生土器の高蔵式～山中式のものがみられ、高蔵式の遺物が主体を占めていることから、弥生時代中期末から後期初頭に位置づけられる。

その他、周辺P05から9・10の壺、P28から11の高環の脚部が出土している。9は袋状口縁壺の口縁部で刺突文・櫛描直線文がみられる。10は頸部でハケメのち直線文が施される。11の脚部は直線文と破断面に透穴が1ヶ所確認できる。(樋田)

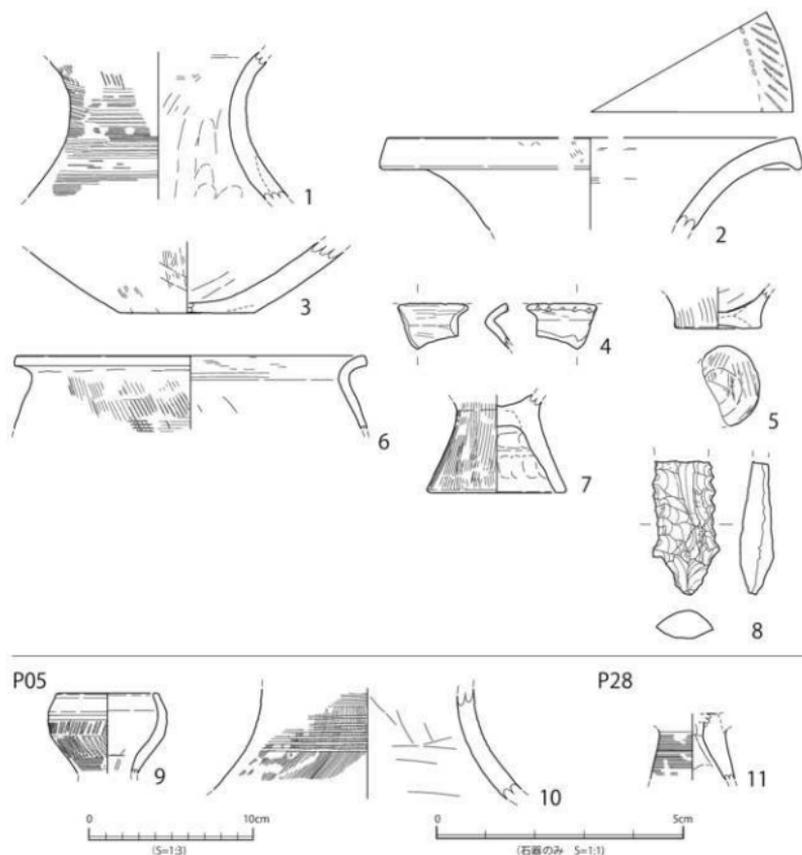


図9 SB601・P05・P28出土遺物

SB602

遺構：Ⅲ C 8r・8s・9r・9sに位置する。主軸方向：N - 54° -E。残存長は(2.28) × (3.30) mで、壁は残存していない。全体の規模・形状については不明であるが、周溝からは隅丸方形を呈していることが推定される。SB601の床面を精査している際に周溝のみ確認された。SB602と同様に周溝のみ確認されたSB604を切っている。P05(SB601)に切られているほか、SB603の炉をSB602の周溝が切っている。周溝は幅0.1～0.2 mで、深さ0.05 m、U字形の断面である。周溝から小型の甕が出土した。東部はSD601に切られているほか、東辺はSD603あるいは中世の整地により失われている。西部は調査区外に及ぶ(図8)。(杉浦)

遺物：弥生土器の壺・甕が出土している。12は深鉢か甕の口縁部で端部に刺突が施される。13は小型の甕である。弥生土器の高蔵式～山中式とみられる。

14は周辺のP40の出土で、壺の口縁端部に刺突文が施される。弥生土器の高蔵式とみられる。(樋田)

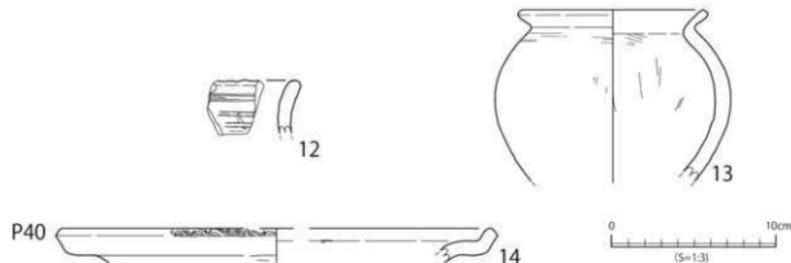


図10 SB602・P40出土遺物

SB603

遺構：Ⅲ C 8r・9r・9sに位置する。主軸方向：N - 35° -E。

周溝と床面の炉跡のみ確認された。全体の規模・形状については不明である。西部は調査区外に及ぶ(図8)。調査区西壁の断面の観察から埋土がわずかに認められ、壁面で0.05～0.1 m程度であるが、面的には0.05 mほどのところが多い。埋土は微量の炭化物粒・焼土粒を含んだよくしまった灰褐色土。周溝は南辺のみ確認され、幅0.15 m、深さ0.03 mと浅い。南辺から北2 mの位置に被熱して赤褐色に変色し、硬化した炉床がある。SB602の周溝やSD601に切られているため、規模・形状は不明瞭である。ただし、床面から0.05 mほどまで変色している状況がSD601の壁面にみることができる。埋土からはわずかに土器片が出土している。

遺物：弥生土器が出土している。15は壺の底部でハケ調整がみられる。16は壺の口縁部で比較的薄手のつくりである。高蔵式～山中式である。

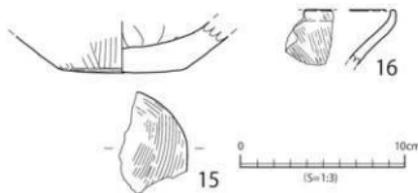


図11 SB603出土遺物

SB604

遺構：Ⅲ C 9r・9sに位置する。主軸方向：N - 50° - E。全体の規模・形状については不明である。SB602の床面精査の際に周溝のみが確認された。また、SB603の南辺の南に被熱して赤褐色に変色し、硬化した炉床がみられ、平面的な位置関係などからSB604に属す炉の可能性を考えている。西部・南部は調査区外に及ぶ(図8)。埋土は周溝部分に限られた。(杉浦)

遺物：弥生土器が出土している。17は壺で体部は4分の1程残存である。体部の中位には上から直線文・波状文が見られ、下部はハケメ調整されている。底部は磨耗激しく調整は観察できない。高蔵式～山中式である。(樋田)

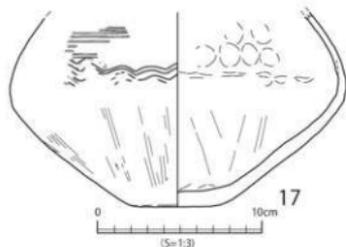


図12 SB604出土遺物

SK601

遺構：Ⅲ C 8r・8sに位置する。西部は調査区外に及ぶ。SB601→SK601

SB601の埋土を切っていると推測されることから、SB601埋没後に窪みが形成されたか、埋まりきらず、皿状にくぼんだような状態になったところに土器片が多数廃棄された土坑(図8)。土器片は厚さ0.2mほど堆積し、1.2×3.0mの範囲で確認し、西側は調査区外に及んでいる。SB601の床面に接する部分もわずかにあるが、全体的には床面より5cmほど浅い深度で取まっている。西部が調査区外にあるため、全体の形状は不明確であるが、およそ円形か南北にやや長い楕円形を呈していると思われる。断面は調査区西壁の断面図からレンズ状もしくは浅い皿状に堆積したと考えられる。埋土は褐色土でしまっている。遺物の取り上げは平面的な遺物の分布から7ブロックに分けて行った。非常に多くの個体があるが、図化できたものは限られ、壺類が主体を占め、高環・甕などは少数である。SB601の遺物とほぼ同時期のものが構成されていることから、SB601が使われなくなった後、あまり時間が経過しない中で、SK601が形成されたと考えられる。(杉浦)

遺物：弥生土器の壺を中心に出土している。18は小型壺の口縁部で口縁内面及び端部に竹管文が施される。19～22は受口状の口縁を持つ壺で、口縁部が内折し面をなし、上面に凹線文が施される。23～26は口縁部が外折し面をなし、やや下垂するタイプのもので、23・25は上面に波状文、24・26は凹線文が施される。23・25・26は口縁内面に綾杉文が施される。27～29は頸部で櫛書直線文と斜位の櫛歯の刺突をもつ。赤彩はみられないものの高蔵式から山中式の移行期のものに似る。30も受口状の口縁を持つ壺であるが、口縁部に刺突及び斜位のハケメをもつ。31は壺の底部である。32は須恵器の坏身の体部であるが、時期が他の遺物と大きくずれており、後世の混入品と考えられる。

出土遺物は弥生土器の高蔵式～山中式のものを中心である。

(樋田)

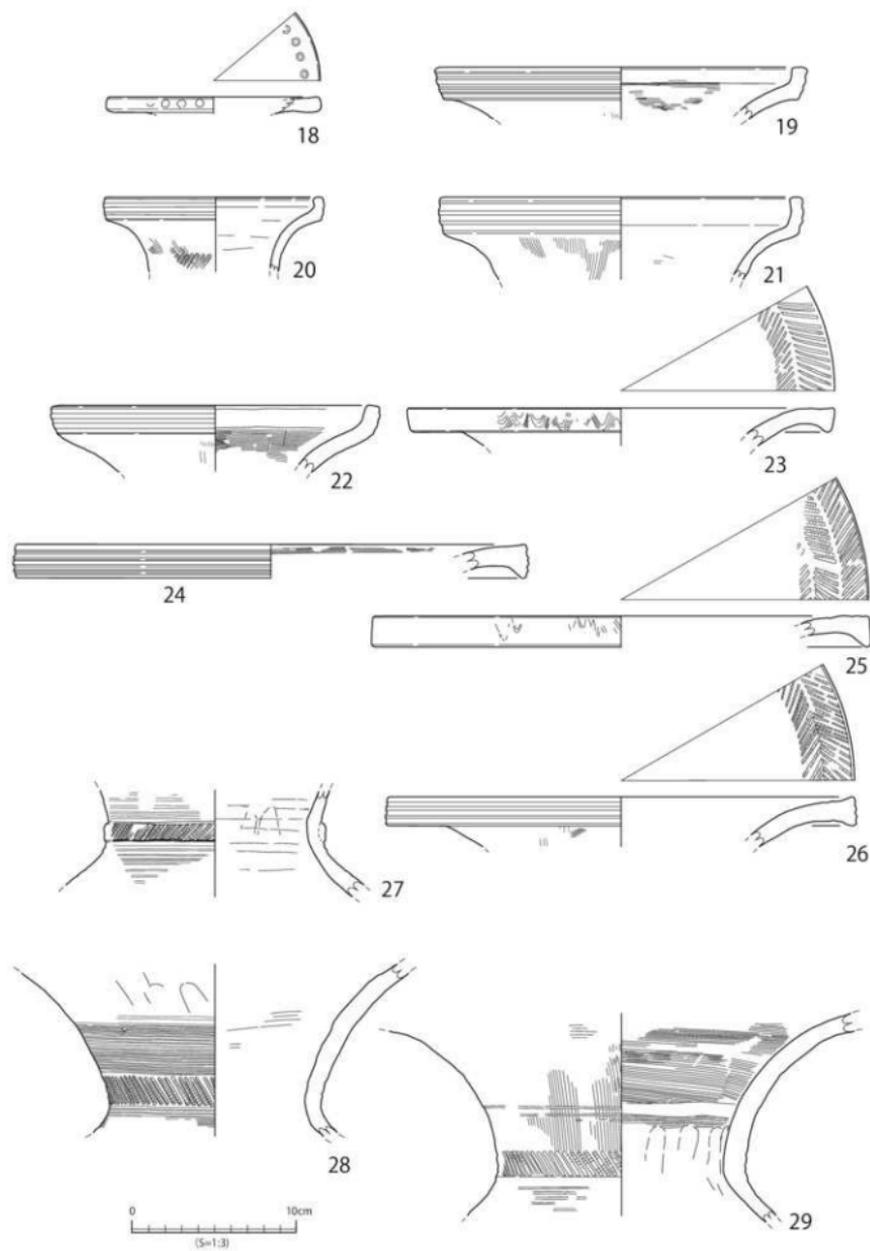


図13 SK601 出土遺物 1
-56-

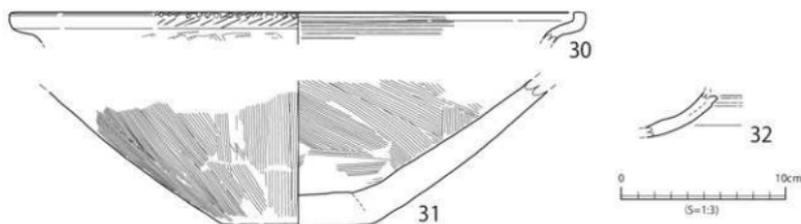


図14 SK601 出土遺物 2

SK602

遺構：Ⅲ C 7s・8r・8sに位置する。SB601の床面で輪郭を確認した。西部は調査区外に及んでいる（図8）。SB601に属するか、古い遺構と思われる。規模は2.2×(0.8)m、深さ0.2mで平面形は楕円形を呈する。断面は皿状に窪み、底面は平坦である。埋土は南部に灰褐色土が若干みられるほかは、明褐色土で、しまっている。遺物は埋土の上部から少量出土した。（杉浦）

遺物：弥生土器が出土している。33は壺の底部で葉脈痕がみられる。34は甕で口縁端部に刺突が施される。SB601とさほど時期は変わらないが、SB601に廃棄された際の遺物の可能性もある。（樋田）



図15 SK602 出土遺物

3 SD601 [図16～21、図版1・2・4、11～17]

遺構：Ⅲ C 7s・8r・8s・9r・9sに位置する。北部は調査区外に延伸している。南部は調査区南端から1.5mほどのところで収束している。全体としては10.5mにわたって確認し、幅1.2～1.5m、深さ0.7～0.9mで、断面形状は基本的には逆台形を呈するが、地点により西側の肩部に稜がみられる。また、南端から1.5m分はテラス状になっており、深さ0.3mと浅い。埋土は大きく4層に区分され、上から1:灰褐色土、2:にぶい褐色土・暗褐色土、3:暗褐色土・黒褐色土（焼土ブロック・炭化物を多く含む）、4:褐灰色シルトに分けられ、地点により基盤層のブロックが混入している。また、暗褐色土（焼土ブロック・炭化物を多く含む）は各断面の観察から西側から流入していることがわかる（図7・16）。8sグリッドにおける分布密度が濃く、北端には炭化物のブロックも見られ、南端のテラス状の北側ではほとんどみられないという状況であった。調査の制約から最下層全体については未掘削とせざるを得ず、掘削した個所は断面図をとるためにトレンチ状に掘削した最小限の範囲に限られるが、遺物はわずかであった。遺物の多くは2層の下部から3層上面から出土している。特に3層の焼土ブロックを含んだ層の上面に広く遺物が分布していた（図22、図版4）。この溝は規模・配置等から敷地などの区画溝としての性格が想定されるが、8rグリッドで収束し、南約3.5mに位置する第3次調査区では延伸推定線上には同規模の溝は確認されてい

ない。また、北側についても延伸するものの、第1次調査区では近い時期の溝遺構が確認されているが、SD601とは規模も異なり、接続するような配置になっていない。このことから、SD601は北へしばらく延伸して収束するか、東西いずれかの方向へ屈曲していることが想定されよう。第6次調査区は本遺跡の標高の最も高い丘陵頂部付近に位置し、弥生時代の竪穴建物群の壁面の多くが失われている状況から、中世にこの付近が整地・削平されたことが推定される。その中で整地された頂部の区画を取り囲むような区画溝が形成された可能性を推定しており、SD601はその一部と考えている。(杉浦)

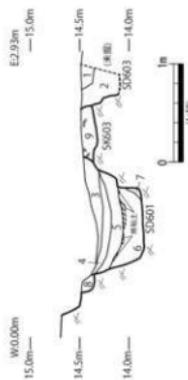
遺物：35は手づくね調整の土師皿、36～41はロクロ調整の土師皿である。35は口径8.3cm、36は口縁端部をわずかに欠損するものの、口径6cm程度と小型の部類である。38・40は口径12cm前後で体部の立ち上がりが直線的なものややや外反するものがある。39～41は二次被熱の痕跡が見られる。県史の「名古屋地域の土器編年表」¹⁾に則ると、35は名古屋手づくねD類、36は名古屋ロクロA類?、37は名古屋ロクロA類かB類、38・39は名古屋ロクロB類、40は名古屋ロクロA類に該当し、いずれも1500年前後の時期である。42～47はいずれも土師器煮沸具で、42は釜(茶釜)、43～45は半球形内耳鍋、46・47は羽付鍋である。釜は口縁部のみの確認であり、羽の有無については確認できなかった。内耳鍋はいずれも体部が直線的な内耳鍋A類に該当し、口径は23～26cm程度である。羽付鍋はいずれも体部が直線的な羽付鍋1類に該当し、口径は37cm前後である。土師器煮沸具も1500年前後の時期である。48・49は山茶碗でそれぞれ尾張型第10～11型式、大濃型の大洞東1～脇の島3である。50・51は天目茶碗で50はE類、51はD類で古瀬戸後期IV期古段階～大窯第1段階でいずれも鉄軸がかけられる。52は祖母懐茶壺、53は口広有耳壺、54は鉢でいずれも銷軸がかけられ古瀬戸後期III～IV期古段階と考えられる。55～59は播鉢でいずれも銷軸がかけられ、播鉢C類に分類、古瀬戸後期IV期にあたる。60～68は常滑焼甕で口縁部が残存しているものは常滑窯第3段階10型式前後と考えられる。64は外面が強く被熱し赤褐色を呈する。底部内面もススが付着している。

71～82は壁土と考えられ、実測したものは合計2.1kg弱、実査対象外は3.2kg、総計5.35kgになる。いずれもSD601の中～下位の広い範囲で出土した。壁土と判断した理由として、表面・断面にスサ痕とみられるストロー状の痕跡が見られたことや平坦面や段差面が確認されたからである。図化したものは平坦面を1～複数持つものを中心に選抜した。段差面は木舞と呼ばれる骨組みへ押し当てた痕跡と考えられるが、角柱状のものが想定され、竹のような円柱状のような痕跡は確認できない。また木舞を縛った縄のような痕跡も確認できなかった。胎土は全体的にきめ細かく砂粒は少ない。含有物として1cm程度の角礫や円礫を含むものもあり、この礫は赤色のチャートが多い。なかには、74・82のように炭化物が含まれるものもあった。77は被熱していると思われる。82は今回確認された中でも一番大型なもので縦10.8×横11.2×厚さ7.3cmで、重量は515.0gである。

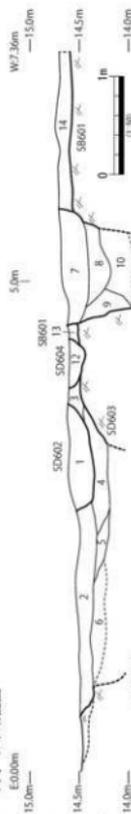
SD601の主要となる時期は、出土遺物より15世紀末～16世紀初頭と考えられる。これ以前の時期の遺物も混じっており、先に述べた竪穴建物や土坑を由来とする遺物も含まれる可能性がある。83～86は弥生土器で概ね高蔵式、87～89は須恵器、90は軒丸瓦の瓦当部分、91は灰釉陶器である。(樋田)

1: 2017 愛知県「第1章総論 第3節 時期区分と編年」愛知県史資料編5 考古5 鎌倉～江戸 愛知県史編さん委員会

北ベルト断面図



中央ベルト断面図



南ベルト断面図

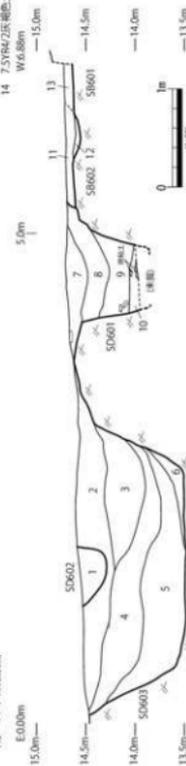


図16 北・中央・南ベルト断面図

北ベルト

1 7.5YR5/2灰黄褐色土

2 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入、厚0.5cmの角礫を含む【S0601】

3 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

4 7.5YR5/2灰黄褐色土

5 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

6 7.5YR5/2灰黄褐色土

7 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

8 7.5YR5/2灰黄褐色土

9 7.5YR5/2灰黄褐色土

10 7.5YR5/2灰黄褐色土

中央ベルト

1 7.5YR5/2灰黄褐色土

2 7.5YR5/2灰黄褐色土

3 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

4 7.5YR5/2灰黄褐色土

5 7.5YR5/2灰黄褐色土

6 7.5YR5/2灰黄褐色土

南ベルト

1 7.5YR5/2灰黄褐色土

2 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

3 7.5YR5/2灰黄褐色土

4 7.5YR5/2灰黄褐色土

5 7.5YR5/2灰黄褐色土

6 7.5YR5/2灰黄褐色土

1 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入、厚0.5cmの角礫を含む【S0601】

2 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

3 7.5YR5/2灰黄褐色土

4 7.5YR5/2灰黄褐色土

5 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

6 7.5YR5/2灰黄褐色土

7 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

8 7.5YR5/2灰黄褐色土

9 7.5YR5/2灰黄褐色土

10 7.5YR5/2灰黄褐色土

11 7.5YR5/2灰黄褐色土

12 7.5YR5/2灰黄褐色土

13 7.5YR5/2灰黄褐色土

14 7.5YR5/2灰黄褐色土

7 7.5YR5/2灰黄褐色土

8 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入、厚0.5cmの角礫を含む【S0601】

9 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

10 7.5YR5/2灰黄褐色土

11 7.5YR5/2灰黄褐色土

12 7.5YR5/2灰黄褐色土

13 7.5YR5/2灰黄褐色土

14 7.5YR5/2灰黄褐色土

7 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

8 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入、厚0.5cmの角礫を含む【S0601】

9 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

10 7.5YR5/2灰黄褐色土

11 7.5YR5/2灰黄褐色土

12 7.5YR5/2灰黄褐色土

13 7.5YR5/2灰黄褐色土

7 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

8 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入、厚0.5cmの角礫を含む【S0601】

9 7.5YR5/4Cにない、褐色土ブロック層入【S0601】

10 7.5YR5/2灰黄褐色土

11 7.5YR5/2灰黄褐色土

12 7.5YR5/2灰黄褐色土

13 7.5YR5/2灰黄褐色土

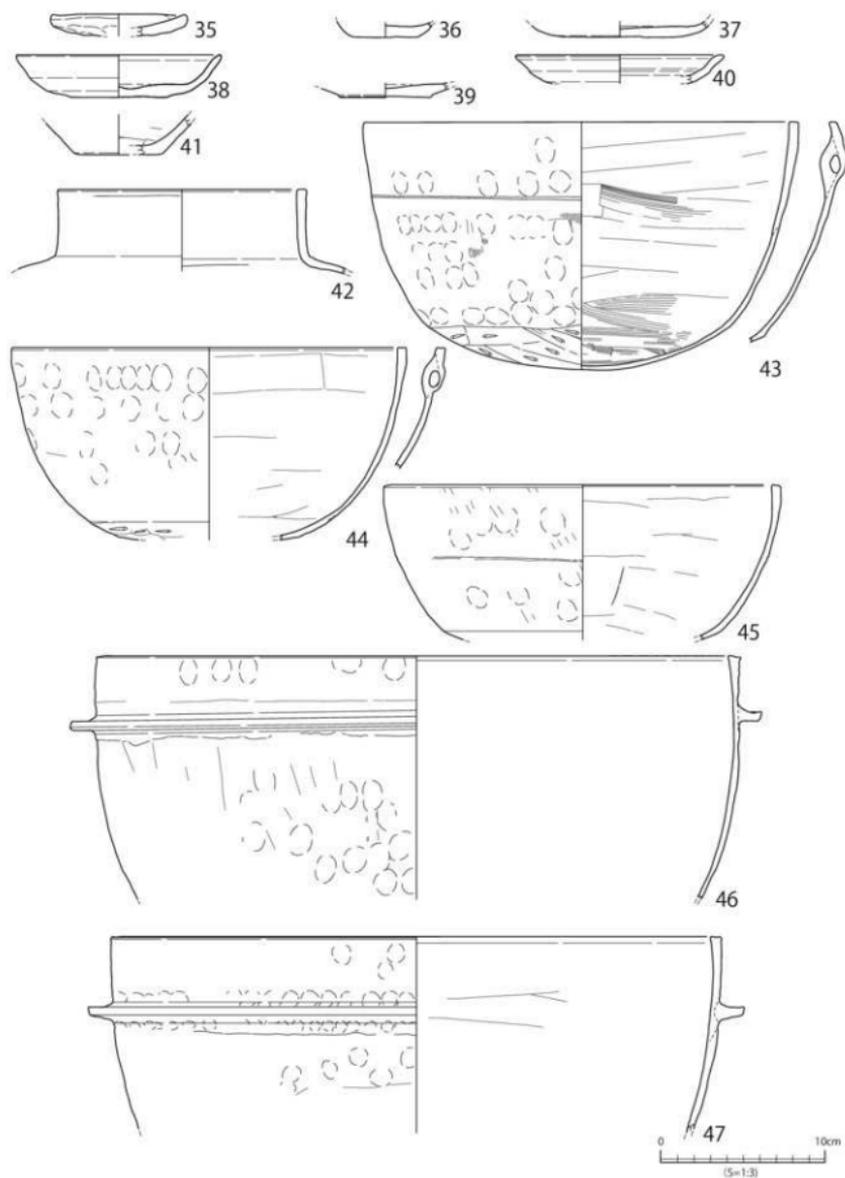


図 17 SD601 出土遺物 1

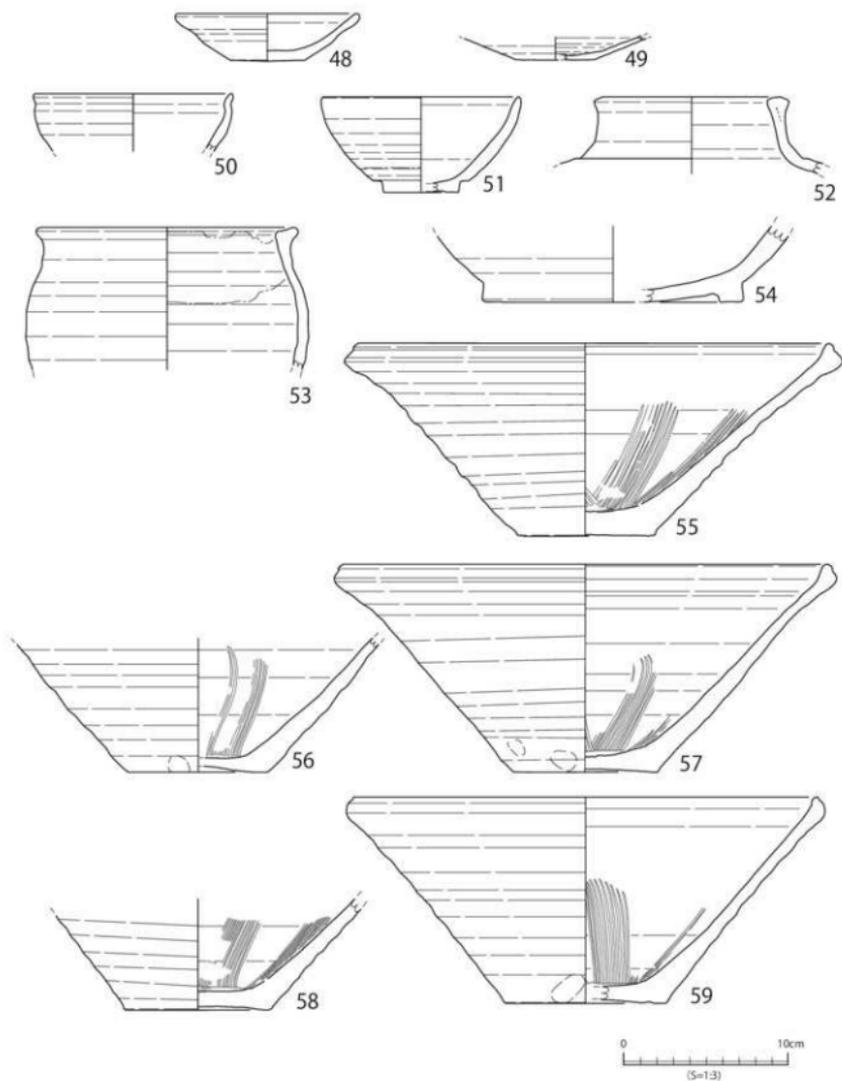


図18 SD601出土遺物2

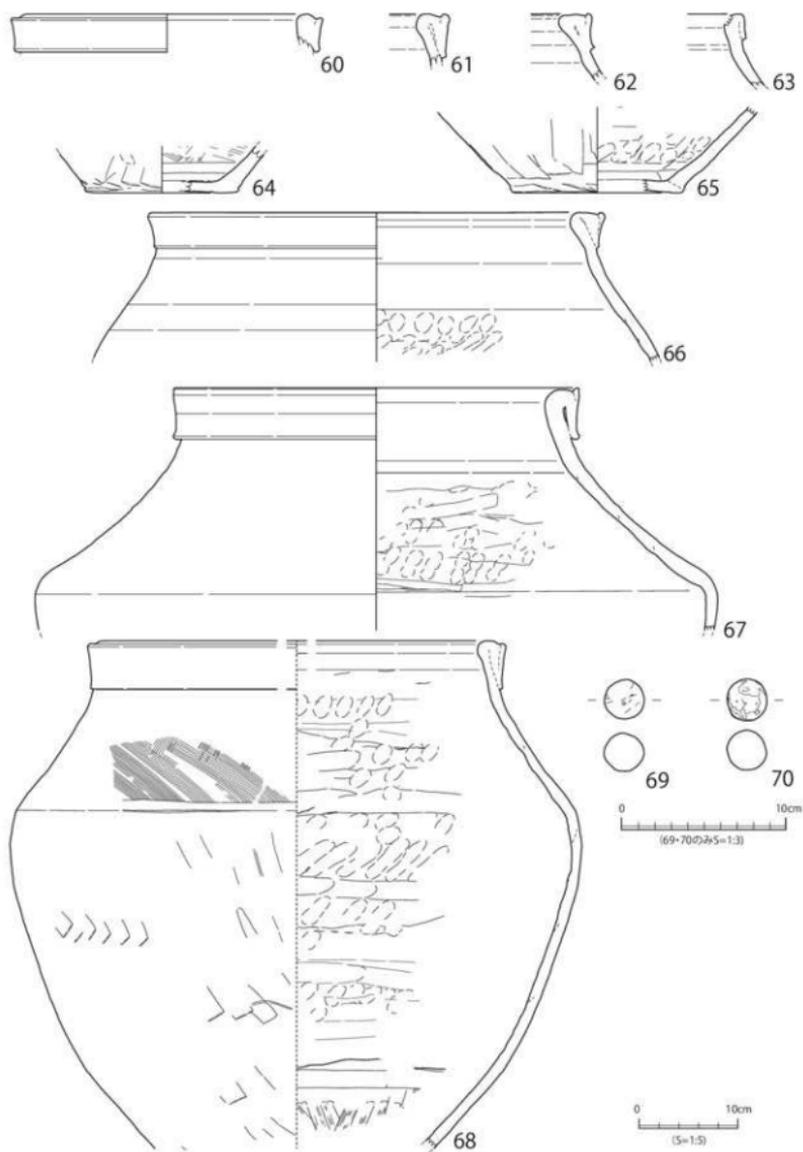


図19 SD601出土遺物3

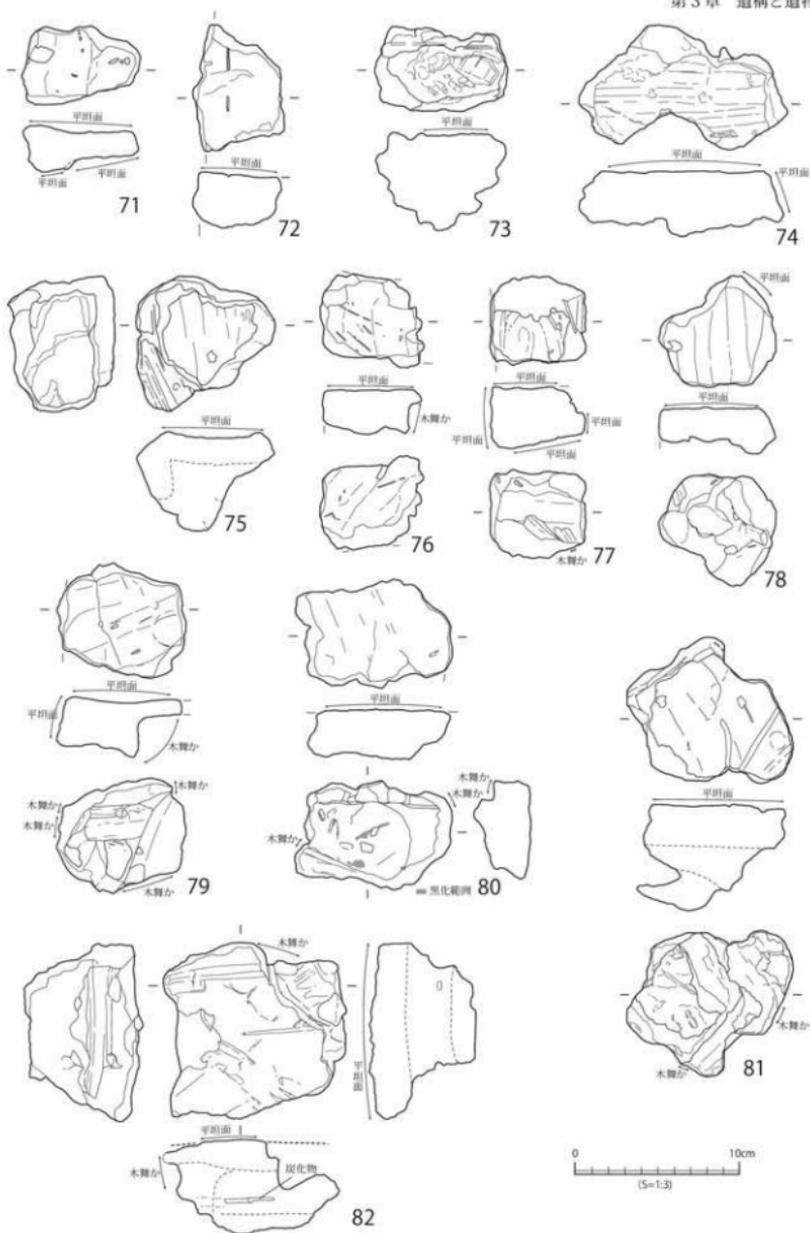


図20 SD601出土遺物4

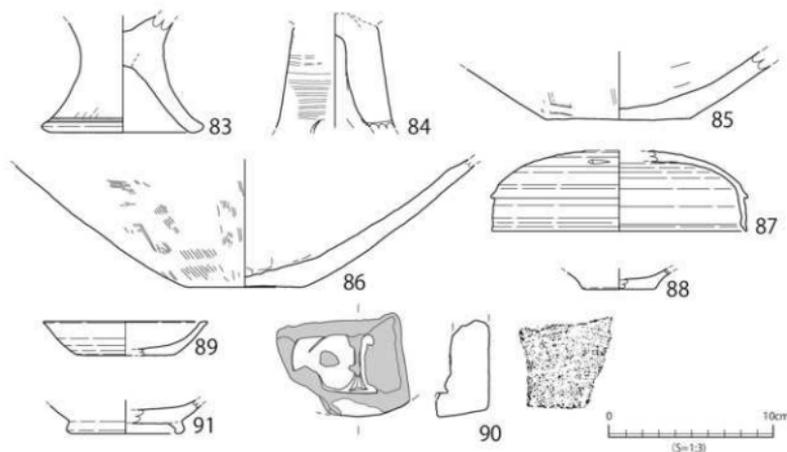


図 21 SD601 出土遺物 5

図 22 は、SD601 の座標取上げ遺物を器種で分類しマークを落とし、図化した遺物の接合関係を示したものである。遺構の完掘はベルト部分のみであり、かつ破片全てを座標取上げはできなかったが、概ね傾向はつかめると思われる。出土層位としては未掘削の最下層部分にはあまり含まれず、上層は少なく、中層から下層の中でも上位部分に多かった。

常滑甕は遺構全域で見られ、68 のように接合関係でみても全域に広がる状況である。この破片は口縁から体部下方向にかけて、螺旋状に破片が分かれており、底部については見つからなかった。なお、口縁付近の破断面に成分分析は行なっていないため詳細は不明であるが、タールか漆のような黒色の痕跡も残っていた。割れた際に縫じを直す用途として用いた可能性もある。

土師皿は出土量も少なく接合関係を示せる資料はなかった。土師煮沸具は 43 のように離れて出土するものも多し一方、46 のように約 1m² の範囲で集中して出土する例もある。また全域で出土しているものの北端と南側に特に集中していることも窺える。

播鉢については遺構の南半分によく 57・58 のように接合関係が広がっていた。

その他の古瀬戸の陶器、弥生土器・須恵器などは散在的かつ出土量も比較的少ない。これは前者は常滑甕・播鉢・土師煮沸具と比較して遺物の大きさにも比例していると思われ、弥生土器・須恵器は混じり込みであるためと思われる。全体的に見ても基本はこの溝内で破砕されたものは少ないとみられる。

(樋田)

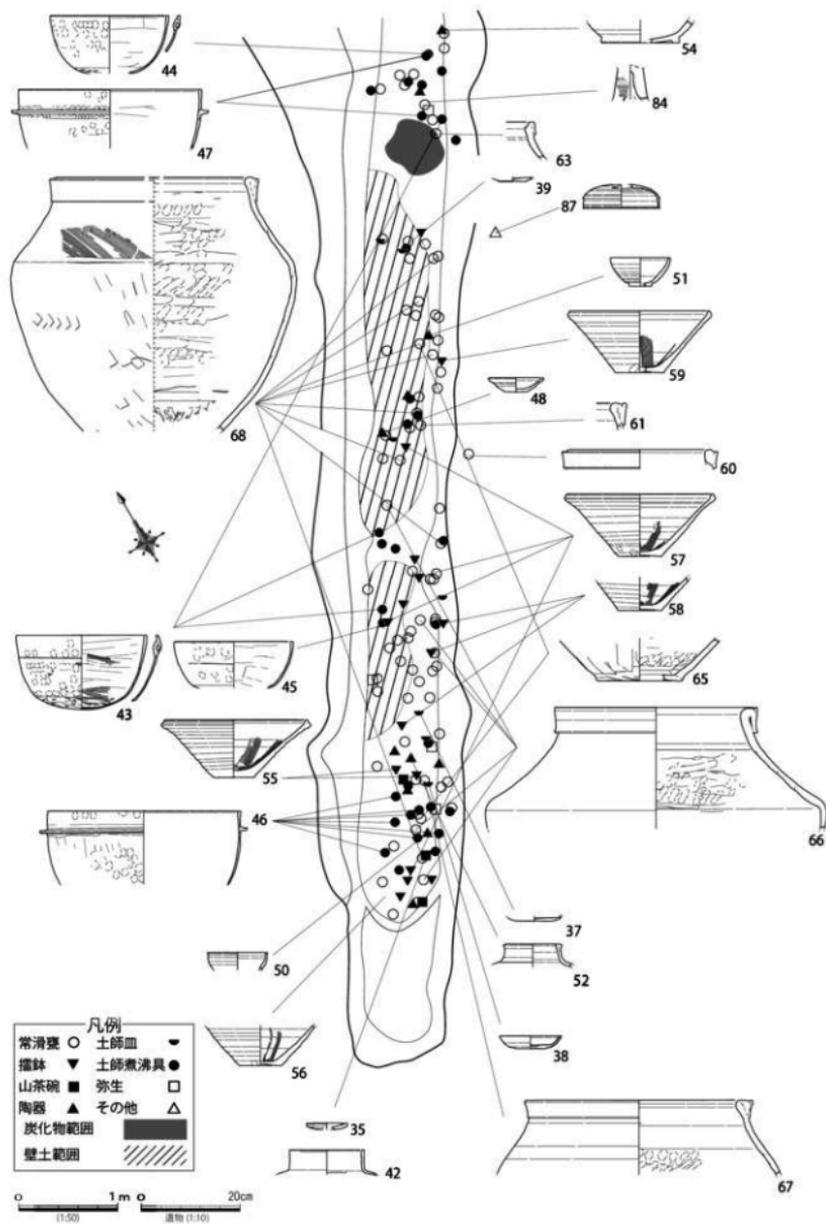


図22 SD601 遺物出土状況

4 SD602・603・604、SK603・604 [図6、23～25、図版1・2、3・4、17～19]

各遺構の新旧関係については次のとおりである（第6図）。

SD601 → SD604

SD603 → SD604

SD603 → SD602

SK603 → SD601・SD603

SK604 → SD601・SD603

SD602

遺構：Ⅲ C8s・8t・9s・10sに位置する。遺構面確認時にSD603と重なって確認した溝（図6）。調査区を南北に貫通し、双方向に延伸している。幅0.5～1.0m、深さ0.25m、断面は緩やかなU字形。埋土は褐色土で、やや砂質でしまりが無い。中世の溝SD603が埋没した後にほぼ同じ位置に形成された小規模な溝である。遺物は少なく、中近世の陶磁器の小片などが出土したにとどまる。南側は未調査区域を経て第3次調査区に延伸している可能性と、途中で取束している可能性が考えられる。当時の調査記録にはなく、浅くて小規模な遺構であり、表土もしくは包含層とともに掘削されて、見逃された可能性もある。北側は未調査区域となるため、不明である。（杉浦）

SD603

遺構：Ⅲ C7s・8s・8t・9s・10sに位置する。本調査区は西側から東に向かって緩やかに傾斜し、SD601のすぐ東でやや段がみられ、地形の傾斜の変化点となっている。SD603はその変化点に位置し、西側がやや高い位置から掘りこまれている。地形的な特徴を利用し、堀としての機能を想定すると、適した位置にある。調査区北半部では上端の幅が3.1～3.3mであるが、調査区南部の9sグリッドから南では西側にテラス状に近い段がみられ、幅3.6～4.5mと広がっている。深さはSD601と同様に調査の制約から最下層まで掘削した箇所は断面図をとるためにトレンチ状に掘削した地点に限られるが、深さは1.0～1.2mで、下端の幅が約2mと、断面形状は逆台形を呈している。埋土は大きく4層に分けられ、上から褐色土・灰褐色土・黒褐色土・褐色土となっているが、上層にはSD602をはじめ後世の遺構や攪乱による堆積層の乱れが多くみられた。SD603の北側の延伸箇所は未調査区域となり、詳細は不明である。南側は位置関係と規模・形状等の特徴から3次調査区N00W08・S04W08に位置する溝（SD213）、S16W12～S28W16（SD313）に位置する溝に接続する可能性が想定される。

遺物は上層からのものが多く、土師質土器・山茶碗・常滑甕・古瀬戸すり鉢などがみられたが、いずれも小片で、図化できたものはわずかであった。（杉浦）

遺物：92は陶器の瓶類の底部で内外面ともに釉薬が施される。明確な時期は比定できないが古瀬戸末～大窯初期か。93は播鉢の底部である。94はロクロ調整の土師皿で全体的に風化が進んでいる。名古屋ロクロB類で15世紀末にあたるか。95・96は灰釉の施された陶器。97は古代の平瓦で内面には布目痕とナデ痕が、外面は縄目痕がみられる。出土遺物からは、遺構の明確な時期を比定はできないが、SD601よりやや新しい可能性がある。（樋田）

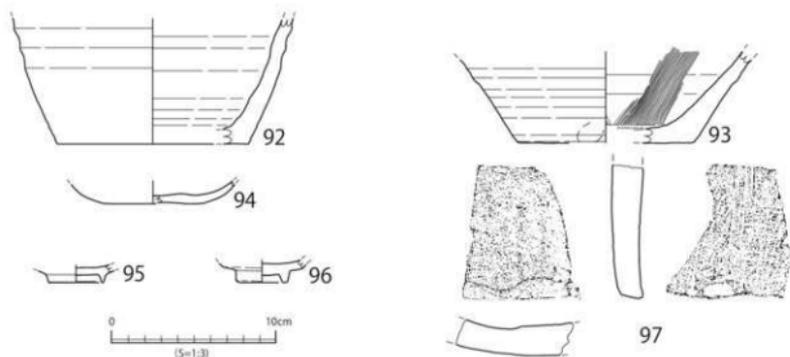


図23 SD603出土遺物

SD604

遺構：Ⅲ C8s グリッドの中央に位置する。SK603・SD601を切っている（図6・8）。北端付近ではSD601と重なり、平面形状がいまいとなっている。調査区北壁の断面にはSD604の堆積はみられないことからSK604付近で収束していると考えられる。南端はSD601とSD603に挟まれた狭い平坦部で収束している。以上からSD604は幅0.4～0.5m、長さ4.5mに及ぶ、深さ0.15mで断面U字形の小規模な溝である。埋土は灰褐色土～にぶい褐色土の単層。遺物は土師器や山茶碗の小片のみでわずかであった。

(杉浦)

SK603

遺構：Ⅲ C8sに位置する。SD601・SD603に切られている（平面図：図6・8、断面図：図16）。残存している部分から、平面形状は0.85×0.6mの隅丸長方形を呈し、深さ0.2mで、底面は平坦である。埋土は黒褐色土でしまっている。山茶碗の碗・小皿のほか、土師器の小片が出土した。遺物の多くは底面から離れており、本土坑がやや埋まった状態で廃棄されたものと思われる。比較的全体の形状を保った遺物が多いが、意図的に埋納された状況と判断されるような出土状況ではなかった。

(杉浦)

遺物：灰釉陶器(98)・土師皿(104)・山茶碗の小碗(105～107)、碗(99～103)が出土している。98は口縁部が外反せずまっすぐに伸びるタイプのもので高台を欠くものの10世紀前後か。灰釉は漬け掛けで内面から外面体部中央付近まで釉が薄く残る。また体部外面中位に煤か漆の痕が残る。104は口縁調整され、全体的に磨耗しているが、外面に煤の跡が残る。105～107は内面に薄く自然釉が付着。106は高台内側に被熱痕が確認できる。99は内面上半に自然釉が薄くかかり、体部に墨痕？が残る。100は重ね焼き痕と自然釉が残る。101は高台内と外面に白い付着物が残る。103は内面中位に降灰が残り、外面中位に工具痕が残る。100・102・103の高台は靱殻痕あり。山茶碗は尾張型4～5型式古段階、小碗は尾張4型式であるため、12世紀に該当する。

(樋田)

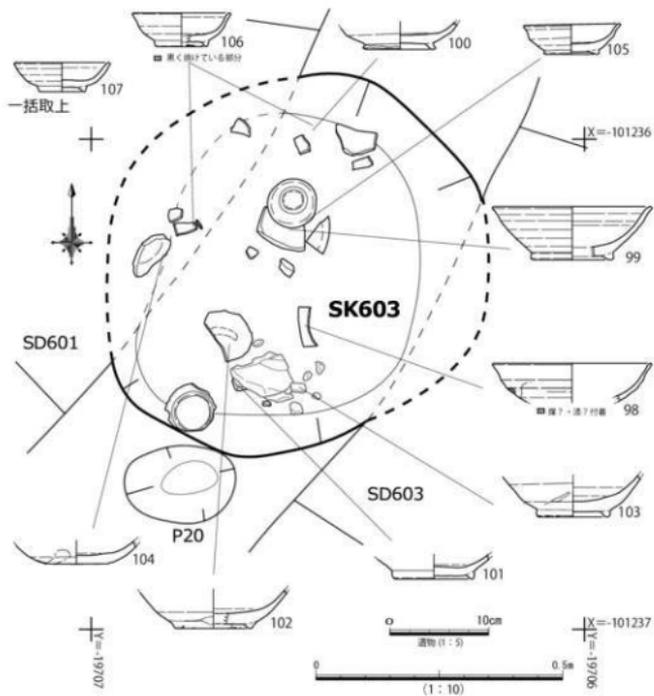


図24 SK603 遺物出土状況

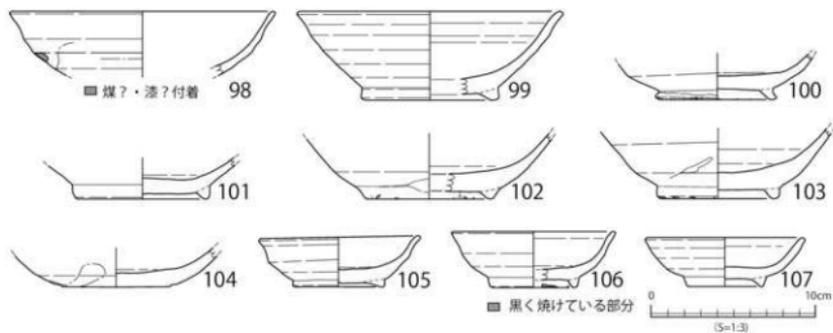


図25 SK603 出土遺物

SK604

遺構：Ⅲ C7s・8sに位置する。SD601・SD603に切られる。確認した範囲は0.65×0.5mで、北部は調査区外に延伸していることから全体の形状は不明。埋土は2層で、上層は褐灰色土、下層は暗褐色土に基盤層の橙色土が斑紋状となった土。底面の一部に焼土がみられた。遺物は土師器の小片がわずかに出土したにすぎない。(杉浦)

5. SB605、その他の遺構〔第6、26図、図版1、6、19〕

SB605

遺構：Ⅲ C8t・9tに位置する。主軸方向：N - 64° -W。基盤面につぶれた状態で見つかり、竈袖部が確認でき、その周辺に焼土が分布していた(図6)。袖部は周辺の焼土に比べて固く硬化している。支脚は確認できなかった。調査区内は竈部分に限られ、建物本体は調査区外となる。袖部の先に焼土があり、煙道部分かと思われるが、形状は不明瞭である。竈は建物西辺中央に配されていると思われる。全体の規模・形状については不明である。遺物は焼土内から土器の小片が出土している。土師器の甕も出土したが、全体の形状や時期がわかるものはなかった。(杉浦)

北東部のピット群

SD603の東側の区画はSB605を除いて遺構が希薄で、小規模なピットが北部に偏在しているにすぎない。20基余が分布しているが、P31・32・33はSD603の埋土を切って形成されている。これらのピットは年代的には弥生時代・古墳時代・中世・近世以降のものが混在している状況で、建物跡や杭列などを想定できるようなものはなかった。P09では焼土がみられたが、被熱して硬化した状況ではなかった。また、P16・30から山茶碗片が、P13から弥生土器の甕片が出土したほかは、土器の小片が出土したか無遺物であった。また、P36・37・38はSB605の竈の下に埋没していたもので、土器の小片などが出土し、弥生～古墳時代のものと思われる。なお、調査区南東区域はピットもわずかで、遺構の分布が希薄であった。SD603より東側については、北部が比較的平坦であるのに対して、9tグリッドから南は地形が南方向に傾斜していることから土地利用が希薄であったことが推定される。(杉浦)

遺物：P39で108のくの字甕口縁、P13で109の鉢底部、P33で甕口縁が出土している。いずれも高蔵式～山中式の弥生土器と思われる。111は須恵器の坏身で最大径15cm前後、6世紀中頃か。(樋田)

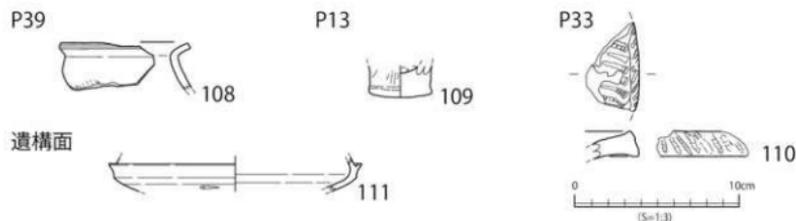


図26 その他の出土遺物

表 15 出土遺物観察表 1

掲載 番号	実測 番号	出土 位置	器種	器形 部位	寸法			残存率 (%)	色調・胎土	焼成	調整等	備考
					口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)					
1	11	SB601	赤生土器	器 頸部	-	(9.1)	-	頸部 10	内: 灰白 (10YR8/2) 外: 橙 (7.5YR/6) 中や密 (1-3mm 程の礫・砂粒多く含む)	良好	内: 磨耗・タテ、ナメ方方向 のナデか、ヨコナデ外、 タテハケ・磨痕(直線文 10本	黒煙
2	18	SB601 南側	赤生土器	器 口縁部	(24.6)	(5.7)	-	口 10 以下	浅黄緑 断・口縁: 黒灰 (10YR5/1) やや密 (1-2mm 程の礫、砂粒含む)	良好	内: ココハケ外、磨耗(1本 直線文 11本; 磨痕文(貝か磨)	
3	2	SB601	赤生土器	器 底部	-	(4.4)	(8.1)	底 40	内: 浅黄緑 (10YR8/4) 外: 黄緑 (10YR8/6) 一部灰白 (5YR/2) やや密 (1-3mmの 礫、砂粒含む)	良好	内: 磨耗・板ナデ外; タテ ハケか; 板ナデか	
4	51	SB601	赤生土器	器 口縁部	-	(1.8)	-	10 以下	内: 灰白 (2.5YR8/2) 外: 灰 白 (5YR7/6) やや密 (N4/0) やや密 (砂粒含む)	良好	内: ヨコハケ・ナメ方方向の 板ナデ外; ハケメ・ 削英文 11; 削英文	黒
5	17	SB601 南側	赤生土器	器 底部	-	(2.4)	(4.9)	底 50	内: 浅黄緑 (10YR8/3) 外: 橙 (2.5YR7/6) 断: 黒青灰 (10B4/1) やや密 (1-2mm の礫、砂粒含む)	良好	内: ナメ方方向の板ナデ外; タテハケ 底; ハケメ・板ナ デ	
6	10	SB601	赤生土器	器 口縁部	(21.2)	(4.6)	-	口 15	内: 内: 橙 (5YR7/6)、浅黄緑 (10YR8/3) 外: 橙 (5YR7/6) やや密 (1-2mmの礫含む、砂 粒含む)	良好	内: 磨耗・板ナデ外; ヨコ ナデ・ヨコハケ・ナメ方 方向の板ナデ外; ハケメ か・沈線か 内; ヨコハケ	
7	1	SB601	赤生土器	台付 脚部	-	(6.5)	8.6	底 75	浅黄緑 (7.5YR8/6)、橙 (5YR7/6) やや密 (1mm 以 下の礫、砂粒含む)	良好	内: ユビナデ・ヨコナデ外; タテハケ・ナデか	
8	68	SB601	石製品	石鏝	幅 1.3	縦長 2.6	-	重さ 2.0g				灰色チャート製
9	5	P05	赤生土器	器 口縁部	(6.2)	(4.9)	-	口 25	浅黄緑 (7.5YR8/4) 底 11mm 程の礫わずかに含む、砂粒 含む)	良好	内: タテナデ外、ヨコナデ・ 削英文・直線文 7本・削 文 1本 1口; 磨耗	黒煙
10	6	P05	赤生土器	器 頸部	-	(6.7)	-	頸部 10 以下	内: 橙 (5YR6/6) 外: 橙 (5YR7/6) 断: 浅黄緑 (10YR8/3) やや密 (1.5mm 程の礫含む、砂粒多く含む)	良好	内: タテナデ・ナメ方方向の 板ナデ外; タテナデ・ナ メ方向のハケメ・直線文 4本・ 6本	黒煙
11	50	P28	赤生土器	高坏 脚部	-	(4.0)	-	脚部 30	内: 浅黄緑 (7.5YR8/4) 外: にぶい・橙 (7.5YR7/4) 断: 明青灰 (10B6/7/1) やや密 (砂 粒含む)	良好	脚部内: ナデ外; 直線文・磨 痕か	
12	23	SB602 周溝	赤生土器	深鉢 (鏝か) 口縁部	-	(3.2)	-	口 10 以下	にぶい・黄緑 (10YR6/3) や や密 (砂粒多く含む)	良好	内: ナデ外; 沈線 4本、ヨコ 方向の象眼・口; 削英文	
13	19	SB602 周溝	赤生土器	小型 深鉢 口縁部	(11.6)	(10.5)	-	口 20 脚 70	内: 浅黄緑 (7.5YR8/4) 外: 灰 (5YR6/0) やや密 (0.5-2 mmの礫、砂粒含む)	良好	内: タテ、ナメ方方向の板ナ デ外; ヨコナデ	内外・黒く焼けた 煤
14	44	P40	赤生土器	器 口縁部	(25.8)	(2.1)	-	口 10	内: にぶい・橙 (5YR7/4) やや密 (砂粒含む) 外; 橙 (7.5YR7/6)	良好	内: ヨコナデ・ヨコハケ外 ・ヨコナデ 1口; 直線文	
15	3	SB603	赤生土器	器 底部	-	(3.1)	(7.8)	底 25	浅黄緑 (10YR8/4) やや密 (1-3mmの礫、砂粒多く含む)	良好	内: タテナデ方向のユビナデ外; タテナデ 底; ハケメ	
16	86	SB603	赤生土器	器 口縁部	-	(3.4)	-	口 10	内外: 灰白 (2.5YR/2) 断: 黄灰 (2.5Y/6/1) やや密 (1mm 以下の礫わずかに含む、砂 粒多く含む)	良好	内外・タテナデ・ナメ方 方向のハケメ	
17	80	SB604	赤生土器	器 胴部- 底部	-	(11.9)	5.5	底 100 脚 40	内: にぶい・黄緑 (10YR7/3) 外: 橙 (2.5YR6/6) やや密 (1-3mm程の礫多く含む)	良好	内: ナデナサエ・タテナデ 外; タテナデ・ナメ方方向 のハケメ・直線文・直線文 磨耗	黒煙 煤
18	85	SK601 e区	赤生土器	器 口縁部	(12.9)	(1.0)	-	口 10	内外: 灰白 (2.5YR/2) 断: 灰 (N3/0) やや密 (1mm程 の礫わずかに含む、砂粒 含む)	良好	外: 磨耗 内: 磨耗・竹管文 1口; 竹管文	
19	83	SK601 a区	赤生土器	器 口縁部	(22.7)	(3.2)	-	口 10	浅黄緑 (10YR8/4) ・橙 (5YR7/6) やや密 (1-2mm 程の礫含む、砂粒多く含む)	良好	内: ヨコハケ外、磨耗・タテ ハケ 1本 1口; 削英文 3本 1口 縁内; ヨコナデ	
20	37	SK601 a区	赤生土器	器 口縁部	(13.1)	(4.5)	-	口 10	内外: にぶい・黄 (7.5YR5/3)、 暗灰 (10YR6/1) 1口縁: 灰白 (2.5YR/2) やや密 (1mm 以 下の礫含む)	良好	内: ココナデ外、ヨコナデ、 ナメ方方向の板ナデ外、磨 文 1本、削英文 3本 1口内; ヨコナデ	
21	36	SK601 a区	赤生土器	器 口縁部	(22.1)	(5.0)	-	口 10	内外: 橙 (5YR6/6) 浅黄 緑 (10YR8/3) 断: 黄灰 (2.5Y/4/1) やや密	良好	内: 磨耗・ハケメ・ヨコナデ 外; タテナデ 1口; 削英文 3 本	
22	35	SK601 a区	赤生土器	器 口縁部	(20.0)	(4.1)	-	口 30	内: 内: 橙 (2.5YR6/6) 外: 浅黄 緑 (10YR8/3) 内: 1口縁・断: 明灰 (N3/0) やや密 (1mm 以下の礫、砂粒多く含む)	良好	内: ヨコナデ・ヨコハケ 1.3-1.5本外; タテナデ・タ テナデ方向のハラミガキ 1口外; 削英文 3本	
23	40	SK601 1区	赤生土器	器 口縁部	(25.7)	(2.3)	-	口 15	内: 灰白 (10YR8/2) 外: 橙 (5YR6/6) 断: 灰 (N4/0) やや密 (1mm 以 下の礫含む)	良好	外: ヨコナデ 1口外; 直線文 7 本 1口内・磨痕文	黒煙
24	39	SK601 a区	赤生土器	器 口縁部	(30.9)	(2.1)	-	口 25	内外: 浅黄緑 (7.5YR8/4) 断: 灰 (N4/0) やや密 (1mm 以 下の礫、砂粒多く含む)	良好	内: ヨコハケ・ヨコナデ外; タテナデ 1口; ヨコナデ・ 削英文 4本	
25	41	SK601 b区	赤生土器	器 口縁部	(30.0)	(1.9)	-	口 20	内: 浅黄緑 (10YR8/3) 外: 橙 (5YR7/6) やや密 (1-2mm 程の礫、砂粒多く含む)	良好	内: 磨耗外、ヨコナデ・ハ ケメ後ナデか 1口; 直線文	
26	43	SK601 c区	赤生土器	器 口縁部	(28.1)	(3.1)	-	口 10	内外: 浅黄緑 (7.5YR8/4) 口 縁部: 橙 (2.5YR7/6) やや 密 (1mm程の礫、砂粒多く 含む)	良好	内: ヨコナデ外、タテナデ 方向のハラミガキ 1口外; 削英文 3本 1口内; 磨痕文	
27	42	SK601 d区	赤生土器	器 頸部	-	(5.8)	-	頸 10	内: 橙 (7.5YR7/6) 外: にぶ い・黄緑 (10YR7/4) やや密 (1-2mm程の礫、砂粒多く 含む)	良好	内: タテナデ・ヨコナデ、ヨ コ方向の板ナデ外; 浅線 5 本、8本・削英文	

表15 出土遺物観察表2

埋蔵 番号	発見 番号	出土 位置	器種	器形 (部位)	法量			残存率 (%)	色調・胎土	焼成	調整等	備考
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)					
28	20	SK601 e区	甕生土器	甕 頸部	(10.1)		頸40	内:灰黄緑(10YR6/2)外: 青(5YR6/6)やや黒(1.5mm 以下の礫を含む)	良好	内:ヨコ方向板ナデかハケメ 外:ナナム方向のナデ赤黄緑 色調の赤(目)・新灰文(目)	僅か、面が歪位 の可能性もある	
29	38	SK601 g・h区	甕生土器	甕 頸部	(11.3)		頸25	内外:浅黄緑(10YR8/3) 青(5YR7/6)新:明灰(N3/0) やや黒(1mm以下の礫、砂 粒多く含む)	良好	内:磨耗・ナデ・ナデオサエ・ ヨコハケ 外:磨耗・タテハケ・ 直線状4条線・新灰文 底: 線3本	僅	
30	84	SK601 h区	甕生土器	甕 口縁部	(35.0)	(1.9)	口20	浅黄緑(10YR8/3)・ 青(5YR7/6)やや黒 (0.5-2.0mm 礫少し含む、砂 粒多く含む)	良好	内:ヨコハケ(直線状)外: ナナム方向のハケメ1箇所外: 新灰文・刷り目		
31	79	SK601 a・b区	甕生土器	甕 下胴・ 底部	(9.0)	(9.1)	下胴25 底100	内:浅黄緑(10YR8/3)外: 赤(5YR5/2)新:灰白(N7/0) やや黒(1-4mm 程度の礫含む、砂粒含む)	良好	内:ナナム方向のハケメ・板 ナデ・ユビオサエ 外:タテ ハケ 底:板ナデ		
32	16	SK601	須恵器	環	-	(2.8)	10以下	オリーブ灰(2.5GY6/1)	良好	内:回転ナデ外:回転ナデ・ 回転ヘラケズリ		
33	21	SK602	甕生土器	甕 底部	(2.3)	6.8	底100	浅黄緑(10YR8/3)新:灰 (N6/0)やや黒(1-2mmの礫、 砂粒含む)	良好	内:磨耗・板ナデか外:ナマ メ方向のハケメ	底:葉脈痕	
34	22	SK602	甕生土器	甕 口縁部	(23.1)	(5.1)	口10以下	内:赤黄緑(10YR7/2)や や黒(0.5mm以下の礫むずか に含む、砂粒多く含む)	良好	内:磨耗・タテ方向の板ナデ か・ヨコハケ 外:タテ方向 のハケメ黒ヨコ方向のハケ メ・ナナム方向のハケメ1: 刷灰文	僅	
35	90	SD601	土師器	皿	(8.3)	(1.4)	口25	浅黄緑(7.5YR8/4)密	良好	内:磨耗・ナデか外:ナデオ サエ	手づくね	
36	54	SD601	土師器	皿 底部	(0.9)	(4.0)	底100	内外:灰(5Y6/1)新:底部: 浅黄緑(10YR8/3)密	良好	内外:磨耗・回転ナデか底: 回転糸切り皿	底部以外黒焼け	
37	65	SD601	土師器	皿 底部	(1.0)	7.7	底80	内:赤黄緑(7.5YR7/4)密(砂 粒含む)	良好	内外:回転ナデ 底:回転糸切 り皿		
38	78	SD601	土師器	皿	(12.4)	2.6 (5.8)	底100	浅黄緑(7.5YR8/4)密(1mm 以下の礫含む、砂粒含む)	良好	内外:ナデ・回転ナデ 底: 回転糸切り皿	底:粘土塊付着	
39	89	SD601	土師器	皿 底部	(0.9)	(5.6)	底20	内:赤黄緑(10YR7/3)密	良好	内外:回転ナデ外:磨耗 底: 回転糸切り皿後ナデ	内:黒く焼けた跡	
40	88	SD601	土師器	皿 口縁部	(12.7)	(1.8)	口20	内外:赤黄緑(7.5YR6/3) 新:浅黄緑(7.5YR8/3)密	良好	内外:回転ナデ	外内:一部に焼けた跡	
41	63	SD601	土師器	皿 底部	(2.4)	(2.5)	底30	内:赤(10R4/6)外:明灰 (N3/0)新:灰白(10YR8/2) やや赤(砂粒多く含む)	良好	内:ナデ・ヨコナデ・赤影 底:回転糸切り皿	内:赤影外:黒斑	
42	82	SD601	土師器	茶釜 口縁部	(15.0)	(5.2)	口20	浅黄緑(10YR8/3)やや黒 (1mm程度の礫含む、砂粒 含む)	良好	内:磨耗・ヨコナデか・ヨコ 方向の板ナデか外:ヨコナ デ・ヨコハケ		
43	95	SD601	土師器	内耳鍋	26.4	15.2	体90	内外:浅黄緑(10YR8/3)外: 灰黒(7.5YR5/2)黒(5Y2/1) やや赤(砂粒含む)	良好	内:ヨコ・ナナム方向のハケ メと板ナデ外:ナデ・ナ デオサエ・ヘラケズリ	僅	
44	87	SD601	土師器	内耳鍋 口縁・ 胴部	(23.4)	(11.8)	口30	内:赤黄緑(10YR6/4)外: 黒(7.5YR3/2)やや黒 (1mm程度の礫含む、砂粒多 く含む)	良好	内:ヨコ方向の板ナデ外: ユビオサエ・ヨコナデ口: ヨコナデ	僅	
45	77	SD601	土師器	内耳鍋	(24.1)	9.5	口15	内外:浅黄緑(7.5YR8/3)外: 浅黄緑(10YR8/3)やや赤 (1mm以下の礫少し含む)	良好	内:ヨコ方向の板ナデ外: ユビオサエ・浅線1本・ ヘラケズリ口: ヨコナデ・ 洗線	外:一部黒焼け	
46	94	SD601	土師器	羽付鍋 口縁・ 体部	38.8	(14.9)	口80	内:赤黄緑(10YR7/4)やや 黒(1.5mm以下の礫、砂粒 含む)	良好	内:磨耗外:ヨコナデ・ユビ オサエか・黒斑・ナデオサ エ・タテ方向の板ナデか板 ケズリ口: ヨコナデ	僅	
47	81	SD601	土師器	羽付鍋	(37.2)	(12.0)	口40	浅黄緑(10YR8/3)やや赤 (1mm程度の礫含む、砂粒多 く含む)	良好	内:磨耗・板ナデか外: ヨコナデ・ユビオサエ口: ヨコナデ	僅	
48	7	SD601	山茶碗	小皿	(11.2)	(2.9) (4.5)	口30 底100	淡黄(2.5Y8/3)やや赤(1mm 程度の礫むずかに含む、砂粒 含む)	良	外:回転ナデ 底:回転糸切 り皿		
49	93	SD601	山茶碗 (黄瀬)	碗	(1.5)	(4.8)	底20	クリーム色・灰白(2.5Y8/2)	不良	内:回転ナデ・ユビオサエ 外:回転ナデ 底:回転糸切 り皿		
50	55	SD601	陶器	天目茶 碗口 縁部	(12.0)	(3.5)	口:10以下	胎土:灰黄(2.5Y7/2)輪:黒 (7.5YR2/1)	良好		鉄輪	
51	8	SD601	陶器	天目茶 碗	(12.1)	5.9 (4.5)	口40 底30	輪:黒(7.5YR4/4)・黒 斑(7.5YR3/1)胎土:浅 黄緑(10YR8/3)・赤黄 緑(10YR7/2)やや赤	良好	外:回転ナデ・回転ヘラケ ズリ 底:回転ヘラケズリ・回 転糸切り皿	鉄輪	
52	56	SD601	陶器	甕 口縁部	(11.8)	(5.7)	口25	内:赤黄緑(7.5YR6/3)外: 赤(5Y6/1)やや赤(砂粒 むずかに含む)	良好	内外:回転ナデ		
53	60	SD601	陶器	鉢か 底部	(4.7)	(15.9)	底30	胎土:浅黄緑(10YR8/4)輪: 刷り赤黒(2.5Y2/2)やや 黒(砂粒多く含む)	良好	内:回転ナデ外:ナデ・回転 ヘラケズリ 底:ナデ・回転 ヘラケズリ	鉄輪(ハケ使い)	
54	53	SD601	古瀬戸	口立 (有耳 壺)	(16.0)	(8.7)	口30	胎土:浅黄緑(10YR8/4)輪: 赤黄緑(7.5YR5/3)やや 赤	良好	外:回転ナデ口: ナデ	鉄輪 鉄輪	
55	72	SD601	陶器	腰鉢	(28.6)	11.9	口10 底80	胎土:灰白(10YR8/2)輪: 明灰文(SP4/1)やや黒 (0.5mm程度の礫むずかに 含む)	良好	内:磨り目10条1単位 底: 回転糸切り皿	鉄輪	

表 15 出土遺物観察表 3

掲載 番号	実測 番号	出土 位置	器種	器形 (部位)	法量			残存率 (%)	色調・胎土	焼成	調整等	備考
					口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)					
56	75	SD601	陶器	鉢鉢 胴部- 底部		(8.2)	(8.4)	底 20	灰土・浅黄褐色 (10YR8/4) 焼 赤土 (2.5YR4/3) やや粗 (砂 粒含む)	良好	内・磨粒・磨り目 10 条 1 単 位 外・指痕 底・回転ネジ	錆跡
57	73	SD601	陶器	鉢鉢	(29.5)	12.75	8.8	口 10 底 100	灰土・灰白 (2.5Y8/2) 軸 明赤土 (10R4/1) やや粗 (0.5mm 程度の礫含む)	良好	内・磨り目 外・回転ネジ・指 跡 底・回転ネジ切目	錆跡
58	76	SD601	陶器	鉢鉢 胴部- 底部		(6.8)	9.0	底 80	灰土・浅黄褐色 (10YR8/3) 軸・明赤土 (10R4/1) やや粗 (1mm 以下の礫むすかに含 み、砂粒含む)	良好	内・磨粒・磨り目 10 条 1 単 位 外・指痕 底・回転ネジ	錆跡
59	74	SD601	陶器	鉢鉢	(28.2)	12.6	(9.9)	口 10 底 20	灰土・浅黄褐色 (10YR8/3) 軸・明赤土 (10Y4/1) やや粗 (1-2mm 程度の礫、砂粒含む)	良好	内・磨粒・磨り目 外・回転ネ ジ・指跡 底・回転ネジ切目	錆跡
60	58	SD601	常滑	甕 口縁部		(3.8)		10	内外 土赤 (7.5R4/3) 新・灰 赤 (N5/0) やや粗 (砂粒 含む)	良好	内外・ヨコナデ	
61	91	SD601	常滑	甕 口縁部		(4.9)		10 以下	内・土赤 (7.5R4/4) 外・ 灰 (5Y5/1) 新・灰 (5Y4/1)・ 砂 (5YR5/6) 粗 (1mm 程の 礫、砂粒多く含む)	良好	内外・ヨコナデ	
62	92	SD601	常滑	甕 口縁部		(7.3)		10 以下	内・赤褐色 (10R5/3) 外・ 灰 (5YR4/1) 新・明赤褐色 (2.5YR5/6) 粗 (1-1.5mm の礫含む)	良好	外・ヨコナデ	
63	57	SD601	常滑	甕 口縁部		(7.8)		10 以下	内外 土赤 (10R4/2) 新・灰 (N4/0) やや粗 (砂粒多く含 む)	良好	内・ナデ・ヨコナデ 外・ヨ コナデ・タテ方向の板ナデ 口・ヨコナデ	
64	34	SD601	常滑	鉢か 底部		(15.6)	(3.9)	底 25	内断：土赤・黄褐色 (10YR7/3) 外・赤 (10R5/6)・灰濁 (5YR6/2)	良好	内・ナメ方向の板ナデ・ヨ コナデ・タテ方向の板ナ デラケツリか板ナデ	内外断：煤か塗
65	97	SD601	常滑	甕 底部		(8.7)	(17.2)	底 20	内：灰白 (7.5Y7/1) 外・ 赤 (2.5YR4/2) 新・灰白 (5Y7/0) 新・灰濁 (10YR4/2) 粗 (砂 粒含む、1-3mm 程度の礫含む)	良好	内：ヨコナデ・ユビナデオサ エ・ヨコ方向の板ナデ 外・ タテ・ヨコ方向の板ナデ 底・ 砂跡	甕蓋の底部とした か内部かなり摩耗 し、甕蓋転用した か元文様であった 可能性、常滑焼第 3段階研か
66	96	SD601	常滑	甕 口縁部 -胴部	(46.2)	(16.1)		口 10	内：土赤褐色 (2.5YR5/3) 外・灰 (5Y4/1) 新・明赤 (2.5YR5/6) 粗 (砂粒含む、 1-3mm 程度の礫含む)	良好	内：ヨコナデ・ユビナデオサ エ 外・ヨコナデ	酸化炭酸成ではなく 燻蒸が不足した 還元炭成とした ため表面から1層 部にかけてかなり 黒ずみあり 常滑焼第 3 段階 10 型式
67	99	SD601	常滑	甕 口縁 -下胴部	(40.7)	(24.8)		口～目 30 下胴 30	内：暗赤褐色 (10R3/3)・灰赤 (2.5YR4/2) 外・灰白 (5Y7/0) 新・灰濁 (5Y7/0) 粗 (1mm 程 の礫、砂粒含む)	良好	内：ヨコナデ・ユビオサエ・ ヨコ・ナメ方向のナデ・ ヨコ方向のナデ 外・ヨコ ナデ・磨き目	自然断 胴部まで同一個 体あり 常滑第 3 段階 9 型
68	98	SD601	常滑	甕	(42.3)	(55.5)		口 20 中胴 40 下胴 15	内：暗赤褐色 (10R3/3) 外・ 灰赤 (10R4/2) 赤濁 (10R4/3) 新・土赤 (5YR5/4) 粗 (砂粒多く含む)	良好	内：ユビナデオサエ・ヨコ 方向のナデ・タテ・ナメ方 向の板ナデ・工具跡か 外・ ヨコナデ・タテ方向の板ナ デ・ナメ方向のハヤメ	自然断 常滑焼第 3 段階 10 型式
69	48	SD601	陶器	陶丸	径 2.4			重さ 14.0g	灰白 (2.5Y8/2) やや密	良好	外・ナデ	
70	67	SD601	陶器	陶丸	径 2.4			重さ 16.9g	灰白 (5Y7/1) やや密	良好	磨耗	使用痕
71	101	SD601	壁上		縦 4.9	横 7.2	厚さ 2.9	重さ 63.3g	土赤 (5YR7/4)		径 2mm のスサ道あり 鉄分 沈着か	
72	100	SD601	壁上		縦 7.7	横 5.55	厚さ 3.4	重さ 104.4g	土赤 (5YR7/4)		径 1-5mm のスサ道あり	
73	108	SD601	壁上		縦 (5.2)	横 (8.1)	厚さ (6.0)	重さ 155.1g	土赤 (5YR7/4)		径 2-4mm のスサ道あり 植 物断片を転がしたような痕 あり	
74	107	SD601	壁上		縦 (7.6)	横 (12.6)	厚さ (4.0)	重さ 220.5g	土赤 (5YR7/4)		径 2-3mm のスサ道あり 胎 土に 1-3cm 厚さ 3mm 程 度の木屑が含まれる 平面 面に擦痕あり	
75	110	SD601	壁上		縦 (8.2)	横 (6.4)	厚さ (6.1)	重さ 246.5g	土赤 (5YR7/4) 灰 白 (10YR8/2) に土赤濁 (10YR7/4) 濁灰 (10YR5/1)		胎土にチャート、土層片 を含む	
76	102	SD601	壁上		縦 5.8	横 6.3	厚さ 2.7	重さ 74.5g	土赤 (5YR7/4)		径 1-3mm のスサ道あり 1.7 × 0.6mm 以上の木屑か	
77	111	SD601	壁上		縦 5.5	横 5.9	厚さ 3.8	重さ 89.1g	土赤 (5YR7/6) 濁灰 (10YR5/1) 灰白 (10YR8/2)		径 6mm 程度のスサ道 棒 状の木屑あり 径 3-4mm の スサ道あり 胎土の中心部が 灰濁色をしており、焼結 している可能性が高い	
78	105	SD601	壁上		縦 7.9	横 7.1	厚さ 2.8	重さ 90.9g	土赤 (5YR7/4) 灰白 (10YR8/2)		径 2-3mm 程度のスサ道 あり 全体的に磨粒 胎土に チャートを含む	
79	106	SD601	壁上		縦 7.1	横 7.9	厚さ 3.7	重さ 101.4g	土赤 (5YR7/4)		径 2-3mm 程度のスサ道 あり 1.4 × 0.6cm 角の内柱 状の木屑の頭か 径 6mm 程 度の棒状の木屑の頭か 1 × 0.5cm 以上の内柱状の木屑 の頭か 2.9 × 2.5cm 角の内 柱状の木屑の頭か 複数方向 に木屑が入っている	

表15 出土遺物観察表4

発掘 区画 番号	実測 番号	出土 位置	器種	器形 (部位)	法量			残存率 (%)	色調・胎土	焼成	調整等	備考
					口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)					
80	104	SD601	壁上	甕	縦 6.7	横 9.6	厚さ 3.0	重さ 146.7g	にぶい・粗 (5YR7/4)		径2-3mmのスズ直り(径 5-6mm程度の棒状の木脚 の根か1cm角の肉柱状の木 脚の根か)	
81	109	SD601	壁上	甕	縦 (8.8)	横 (10.1)	厚さ (6.5)	重さ 288.0g	にぶい・粗 (5YR7/4)		径2-4mmのスズ直り(φ 1cmの杖状の木脚か1cm ×7mmの板状の木脚あり 植物土直りあり)	
82	103	SD601	壁上	甕	縦 8.8	横 11.2	厚さ 7.3	重さ 515.0g	粗 (5YR7/6)		径1-2mmのスズ直り(φ 3.3cm、高さ1.8cmの木脚 か径1.5cm程度の棒状の木 脚か植物土直りの根けた穴あ り直上に灰を含む)	
83	45	SD601	弥生土器	台付 器脚部	-	(7.1)	(9.9)	脚部 40	内:浅黄褐色 (10YR8/4) 外: 粗 (5YR7/6) 筋:黄緑色 (N4/O) やや粗 (1mm程の 織、砂粒多く含む)	良好	内:ヨコ方向の板ナデか外: 器種・ナデオサエ・沈積か 得難	脚部内:黒焼付
84	12	SD601	弥生土器	高環 脚部	-	(7.0)	-	脚部 40	浅黄褐色 (10YR8/3) やや粗 (1 mm以下の織・砂粒多く含む)	良好	内:内外共にナデ・ヨコナデ・ ナメ方角のナデ外:直線 文3本で1つ・穿孔1・磨 耗	穿孔
85	13	SD601	弥生土器	器 底部	-	(4.2)	8.7	底 60	内:浅黄褐色 (7.5YR8/4) 外: 粗 (5YR6/8) 筋:黄緑色 (10G7/1) やや粗 (1-2mm の織、砂粒を含む)	良好	内:器種・板ナデか底:板ナ デ外:器種・板ナデ外:直線 文3本で1つ・穿孔1・磨 耗	
86	14	SD601	弥生土器	器 底部	-	(3.3)	(7.0)	底 60	内:筋・斑灰 (10YR5/1) 外: 粗 (2.5YR6/8) やや粗 (1-2 mmの織、砂粒を含む)	良好	内:器種・ユビ、ナデオサエ 外:タタケ底:板ナデか	
87	9	SD601	須恵器	環蓋	(15.4)	(4.9)	-	口 25	灰白 (2.5Y7/1) 密	良好	外:回転ナデ・回転ヘラケズ リ	自然輪 陶灰
88	46	SD601	須恵器	環 底部	-	(1.3)	(4.2)	底 50	内:灰白 (2.5YR7/1) 外:淡 黄 (5YR8/3) 底:灰 (N6/O) 密	軟質	内:ナデ・回転ナデ底:回転 糸切り皿	焼成不良
89	62	SD601	須恵器	環	(10.0)	2.1	(6.0)	口 10 底 20	斑灰 (10YR5/1) 密	良好	内外:回転ナデ底:回転糸切 り皿	
90	71	SD601	瓦	軒丸瓦	長さ (5.5)	互当厚 さ2.3	-	-	内外:灰 (7.5YR/1) 密:灰白 (2.5YR/2) やや粗 (1-2mm 程の織むすかに含む、砂粒 多く含む)	良好	内:布目ヘラケズリかナデ 外:沈線か・透火文	
91	47	SD601	灰輪陶器	器 底部	(2.1)	(6.5)	底 10	底 10	灰白 (5Y7/1) やや密	良好	内外:回転ナデ底:回転糸切 り皿後ナデ	自然輪 付高台
92	61	SD602	陶器	瓶類か 甕	-	(7.7)	(11.6)	底 10	胎土:浅黄褐色 (10YR8/4) 輪 内:斑灰 (5P4/1) 輪外: 粗 (7.5YR/4) やや粗 (1mm 以下の織むすかに含む、砂粒 を含む)	良好	外:回転ヘラケズリ・工具扱 底:回転糸切り皿	内:鉄輪 外:鉄輪 土製
93	64	SD603	陶器	播鉢 底部	(5.6)	(10.4)	底 10	底 10	胎土:灰白 (2.5YR/2) 輪: 暗黒灰 (2.5Y3/1) やや粗 (砂 粒を含む)	良好	内:溝り目9条外:回転ナデ・ ユビ底:回転糸切り皿	溝輪 工具製
94	70	SD603	土師器	皿	(1.4)	(5.9)	底 25	底 25	浅黄褐色 (10YR8/3) 密	良好	内外:回転ナデ底:回転糸切 り皿	
95	59	SD603	陶器	器 底部	(1.1)	-	高台 10	高台 10	胎土:白 輪:灰白 (10YR/2) やや密	良好	内外:回転ナデ底:回転糸切 り皿	灰輪
96	32	SD603	古瀬戸か	小碗 底部	(1.85)	3.2	高台 100	高台 100	胎土:灰白 (2.5YR/2) 輪: 淡黄 (5YR/3) やや密	良好	外:回転ヘラケズリ底:回転 ヘラケズリ後ナデ	灰輪
97	69	SD603	瓦	平瓦	長さ 8.2	厚さ 1.5	-	-	灰白 (7.5YR/1) やや粗 (1mm 以下の織多く含む)	良好	内:布目・ナデ・ヘラケズリ 外:縄タタキ(ハナシ砂なし) 後ナデ消し	
98	31	SK603	灰輪陶器	口縁部 - 体部	(15.9)	(4.0)	口 10	口 10	灰白 (2.5Y7/1) 密	良好	内外:回転ナデ	灰輪むすかに自然 輪 焼
99	24	SK603	山茶碗	碗	(16.2)	5.5	(7.5)	口 30 底 25	灰白 (5YR/1) やや粗 (砂粒 含む)	良好	内:回転ナデ外:ナデ・回転 ナデ	わずかな自然輪 付 高台
100	27	SK603	山茶碗	器 底部	(2.8)	6.7	底 100	底 100	灰白 (2.5YR/1) やや粗 (砂 粒含む)	良好	内外:回転ナデ底:ナデ・回 転糸切り皿	自然輪 付高台 (陶 皿) 重ね灰製
101	28	SK603	山茶碗	器 底部	(2.5)	7.8	底 100	底 100	浅黄 (2.5Y7/3) やや粗 (砂 粒含む)	良好	内:回転ナデ外:回転ナデ底 ナデ・回転糸切り皿	白泥付高台
102	26	SK603	山茶碗	器 底部	(4.0)	(7.5)	45	45	灰白 (2.5Y7/1) やや粗 (砂 粒含む)	良好	内:回転ナデ底:回転糸切り 皿高台部部:ナデ外:ナデ・ 回転	付高台 (陶皿) 内: 重ね灰製
103	25	SK603	山茶碗	碗	(4.3)	6.8	底 100	底 100	灰白 (10YR7/1) やや粗 (砂 粒含む)	良好	内:回転ナデ外:ナデ・回転 ナデ底:回転糸切り皿	陶皿付高台(陶皿) 外面手炙
104	33	SK603	土師器	皿	(2.4)	(6.5)	底 50	底 50	浅黄褐色 (10YR8/3) やや粗 (1mm以下の織を含む)	良好	内外:回転ナデ底:回転糸切 り皿後ナデ	皿
105	4	SK603	山茶碗	小碗	9.9	3.0	5.3	ほぼ完形	灰白 (7.5YR/1) やや密 (砂 粒多く含む)	良好	内:ナデ・回転ナデ外:ナデ・ 回転ナデ底:糸切り皿後ナ デ	むすかに自然輪 付 高台
106	29	SK603	山茶碗	小碗	(10.0)	3.4	(4.9)	口 10 底 10	灰白 (2.5YR/1) やや密 (砂 粒含む)	良好	内外:回転ナデ外:回転ナ デ底:回転糸切り皿外:回転 ナデ	自然輪 付高台
107	30	SK603	山茶碗	小碗	(9.7)	3.0	4.6	口 10 以下 底 60	灰白 (N8/O) やや密 (砂粒 含む)	良好	内:ナデ・指土直り外:回転 ナデ底:ナデ・糸切り皿	自然輪 付高台
108	52	P39	弥生土器	器 口縁部	(2.9)	-	10 以下	10 以下	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	内:ユビオサエ外:板ナデか 底:板ナデ	
109	49	P13	弥生土器	鉢 底部	(2.0)	3.8	底 50	底 50	粗 (2.5YR6/8) やや粗 (砂 粒多く含む)	良好	内:ユビオサエ外:板ナデか 底:板ナデ	
110	15	P33	弥生土器	器 口縁部	(1.7)	-	-	-	にぶい・粗 (5YR7/4) やや粗 (1-1.5mmの織、砂粒含む)	良好	内:刺突文外:ナデ・刺突文	
111	66	遺構面	須恵器	器身	-	(2.1)	10	10	灰白 (10YR7/1) 密	良好	内:回転ナデ外:回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	

第4章 まとめ

第1節 弥生時代から古墳時代の清水寺遺跡

清水寺遺跡第6次調査で見つかった弥生時代から古墳時代の遺構は、SB601～604とSK601・602で、いずれも高蔵式の土器を主体とし、比較的短期間に切り合って変遷している。また、それに前後する時期の遺構はピット数基などわずかしか確認されなかった。一方、本遺跡におけるこれまでの調査では、複数の竪穴建物や土坑が確認されているが、複数時期の遺構が複合していることから、時期を確定できない遺構も多く含まれ、出土遺物も少ない。このような状況ではあるが、当該時期の遺構のなかった第4次調査を除いて、ここでは清水寺遺跡の弥生時代から古墳時代の動向についてまとめるとともに周辺遺跡の動向とも比較しておきたい。

まず、清水寺遺跡についてこれまでの調査成果からみてみよう。1次調査では山中式の土器が出土した貝層のほか、溝遺構が部分的に調査された(名古屋市教育局委員編1976)。2次調査では時期を特定できない竪穴建物跡が見つかったにすぎないが、多くが中世の溝遺構に切られていることなどから弥生時代から古代のいずれかの時期のものと想定される(名古屋市教育局委員編1977)。第3次調査では4号竪穴建物跡から山中式の土器が、第4号竪穴建物跡から古墳時代後期の須恵器が出土している。このほかに古代の竪穴建物跡2棟、時期を特定できない竪穴建物跡9棟が確認された(名古屋市教育局委員会社会教育部文化課編1979)。第5次調査ではSB03から高蔵式の土器が出土したほか、SB01・SB04が古墳時代前期、SB02が古代の竪穴建物跡となっている(野口1997)。これらのほかでも弥生土器や土師器・須恵器などが出土しているが、中近世の遺構や包含層などからの出土となっている。以上のように弥生時代から古墳時代の遺構数は少なく、現時点では残念ながら遺跡内で動向を検討できるほどではない状況であることがわかる。しかしながら今回の調査において、限定的な時期ではあるが、高蔵式の土器が出土した遺構である竪穴建物跡4棟と土坑2基が一定の範囲で固まって見つかり、5次のSB03や、立会調査で確認されたほぼ同じ時期と思われる溝遺構を含めるとこの時期の遺構が本遺跡の北西部区域にまとまっていることがわかり、本遺跡の動向をみる上で貴重な成果となったと考えられる。

次に清水寺遺跡を含む天白川左岸の段丘上に分布する近隣の遺跡については、調査年次ごとに分けて、各時期の遺構を表に示した(表16)。まず、個別に遺跡をみていくと、城遺跡・鳴海城跡・鳴海庵寺跡については、中世の城館に係る遺構以外では弥生～古墳時代の遺構はわずかで、欠山式の時期に埋没しはじめた環濠と推定されている溝が、古墳時代中期に完全に埋没することのほか、竪穴建物跡がわずかに確認されているにすぎず、遺構の変遷をたどるには至っていない(伊藤編1991・名古屋市教育局委員編1985)。三王山遺跡では弥生時代後期～終末期にかけて方形周溝墓・環濠・土坑などの遺構が確認されたほか、古墳時代中期になって環濠が埋没したこと、その後古墳時代後期にかけて竪穴建物跡が少数ではあるが確認されている(村本・服部ほか1999)。三王山遺跡は弥生時代に限ってみると見晴台遺跡とよく似た動向を示している。

一方、天白川右岸の段丘上に分布する遺跡について、その動向を簡略化して表に示した(表16)。これらの遺跡は三王山遺跡の対岸に位置し、見晴台遺跡から桜木町遺跡まではブロック的に連続して分布した一連の遺跡群としてとらえることもできる。全体的にみると、高蔵式の遺物が出土する遺構は希薄で、山中式から欠山(廻間1)式の土器が出土する遺構が見晴台遺跡を中心に増加する。その後、衰退もしくはは

希薄な期間を経て古墳時代中期頃に桜本町遺跡や春日野町遺跡を中心に再び隆盛するということがうかがえる。

清水寺遺跡については変遷をたどるには遺構数が乏しいため、ほぼ接する位置にある三王山遺跡を含めてひとつの遺跡群としてとらえると、弥生時代後期と古墳時代中期頃に多くの遺構がみられ、清水寺遺跡のある南部と三王山遺跡のある北部の区域を時期によって遺構の分布をみていくと、長い期間にわたって区域を変えて沖積地を望んだ丘陵端部を中心に土地利用していることが想定されよう。また、全体としてみると対岸の見晴台遺跡群も含めて天白川下流域の段丘上一帯がおよそ同じような変遷をたどっているともいえる。

表 16 清水寺遺跡周辺遺跡の動向

時代	弥生時代後期		弥生時代終末期		古墳時代前期		古墳時代中期		古墳時代後期		出典
	高藏	山中	欠山/墓間1	墓間2	墓間3	松河戸1	松河戸2	H111～	H50～		
桜本町遺跡											1
桜田貝塚・貝塚町遺跡											2
春日野町遺跡											3
桜台高校遺跡											4
柿町遺跡											5
元和江町遺跡											6
扇田町遺跡											7
見晴台遺跡											8
※枠内の濃淡は遺構の多寡を示す(濃いほうが遺構が多い)											
三王山遺跡	1次		SZ01、SZ02、SZ03、SD01(竪溝)、SD04(竪溝)				SD04(埋設)、SB01	SD02(埋設)		SK01	9
	2次		SD08(方形周溝墓)、SK15、SK18(土層)、SK09、SD01(竪溝)	SD01(竪溝)、SD02中・下層				SD02土層			
	3・4次		3-SX03、3-SX05	3-SD06(竪溝)			3-SB01	4-SB02	4-SB01	3-SK03、4-SK11	
	5次			SD06(竪溝)			5-SK01	5-SK02・05			
	1次		SD、貝層	(時期不明掘穴建物)							
清水寺遺跡	2次		(時期不明掘穴建物)								
	3次		4号掘穴建物 (時期不明掘穴建物)								
	5次	SB3				SB1	SB4				1号掘穴建物
	6次	SB601～604、SK001・602									本書
	立会	溝									
明海城跡・城遺跡					1号住居						14
								SD1上部		2号住居	15

以上から、清水寺遺跡は大規模な集落遺跡として認識されてきたが、現時点では同時期の多数の遺構が広く分布するような状況はみられず、長年思い描かれてきたよりも小規模な集落である可能性が高い。わずかな遺構はそれらについて十分に論じるに値するものではないため、時期ごとの分布の違いがみられるのか、広い範囲に希薄な分布なのかなどについて、また隣接して所在する三王山遺跡の遺構の変遷とどう関係しているのかなど課題は多く、今後の調査の進展を待たなければならない。(杉浦)

第4章 まとめ

注：今回出土した弥生土器を村木誠氏（名古屋市博物館）に確認して頂いたところ、高蔵式から山中式に移行する時期にあたる「飯称見晴台式」に該当するものが多いとの知見を得た。村木（2001）でも清水寺遺跡溝1（図3 SD101）出土の壺・台付罍・鉢の遺物を「高蔵式、或いは山中式と何等の共通性をもつ一方、何等かの違いもあり、どちらに類属させるのが難しいものである。」と述べている。（村木誠 2001「飯称見晴台式」を考ふる（1）」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要 第3号』名古屋市見晴台考古資料館）

（参考文献）

1. 三渡俊一郎 1960『名古屋市南区板本町遺跡報告書』三渡俊一郎
2. 大杉規之・西村誠治ほか 2009『板本町遺跡』株式会社サンヨーハウジング名古屋
3. 木村有作・村木誠 2000「第4章 板本町遺跡の調査」『高蔵遺跡 上島古墳群 守山白山古墳 板本町遺跡』埋蔵文化財調査報告書 33 名古屋市教育委員会
4. 岡本俊則 1980「板田貝塚の復元再整理」『年報』1 名古屋市見晴台考古資料館
5. 水野裕之 2000「春日野町遺跡 第2次」『高蔵遺跡 瑞穂遺跡 春日野町遺跡 正木町遺跡』埋蔵文化財調査報告書 34 名古屋市教育委員会
6. 伊藤正人 2001「春日野町遺跡 第3次」『西志賀遺跡 松ヶ洞 14号墳 板台高校遺跡 春日野町遺跡』埋蔵文化財調査報告書 39 名古屋市教育委員会
7. 伊藤正人 2002「春日野町遺跡 第4次」『片山神社遺跡 尾張藤御廟所遺跡 春日野遺跡 瑞穂遺跡』埋蔵文化財調査報告書 43 名古屋市教育委員会
8. 野口泰子 2005「春日野町遺跡 第5次」『熊鷹町遺跡・日置城跡 正木町遺跡 高蔵遺跡 春日野町遺跡』埋蔵文化財調査報告書 51 名古屋市教育委員会
9. 水野裕之 1996「板台高校遺跡 第2次」『高蔵遺跡 板台高校遺跡 板小学校遺跡 那古野山古墳』埋蔵文化財調査報告書 25 名古屋市教育委員会
10. 大岡由紀子・近藤真人ほか 2016『桶町遺跡第2次発掘調査報告書』野村不動産株式会社
11. 高野裕二・伊藤雅和ほか 2018『元板台遺跡発掘調査報告書』社会福祉法人寿寿会
12. 水野裕之 1995「扇田町遺跡 発掘調査の概要」名古屋市教育委員会
13. 村木誠 2007「扇田町遺跡第2次」『長塚古墳 川東山遺跡 黒川遺跡 富士見町遺跡 高蔵遺跡 扇田町遺跡 正木町遺跡』埋蔵文化財調査報告書 55 名古屋市教育委員会
14. 編者記載なし 1973「見晴台遺跡第11次発掘調査の記録」見晴台遺跡第11次発掘調査団
15. 岡本俊則編 1978「見晴台遺跡第12次・第13次発掘調査の記録」名古屋市教育委員会・見晴台遺跡第12次発掘調査団・見晴台遺跡第13次発掘調査団
16. 野口泰子・水野裕之 1988「見晴台第25次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
17. 服部哲也・千田嘉博ほか 1990「見晴台遺跡 第27次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
18. 伊藤厚史・池田隆介 1990「見晴台遺跡 第28次発掘調査報告書」名古屋市見晴台考古資料館
19. 竹内宇哲 1993「見晴台遺跡 第29次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
20. 尾野善裕・川合剛ほか 1992「見晴台遺跡 第30次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
21. 川合剛・伊藤正人ほか 1993「見晴台遺跡第31次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
22. 伊藤正人 1996「見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
23. 村木誠・木村光一 1999「見晴台遺跡 第34・36・37・38次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
24. 山田祐一・木村有作 2003「見晴台遺跡 第39・40・41次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
25. 藤岡友一・野澤剛幸ほか 2005「見晴台遺跡 第42・43次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
26. 伊藤厚史 2014「見晴台遺跡 第44・45・46・47・48次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館
27. 伊藤厚史・三谷智広 2021「見晴台遺跡発掘調査報告書 第49・50・51次」名古屋市教育委員会
28. 村木誠・服部哲也ほか 1999「三王山遺跡」埋蔵文化財調査報告書 30 名古屋市教育委員会
29. 名古屋市教育委員会編 1976「清水寺遺跡発掘調査概要報告書」名古屋市教育委員会
30. 名古屋市教育委員会編 1977「清水寺遺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書」名古屋市教育委員会
31. 名古屋市教育委員会社会教育部文化課編 1979「清水寺遺跡第Ⅲ次発掘調査概要報告書」名古屋市教育委員会
32. 野口泰子 1997「清水寺遺跡第Ⅴ次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
33. 名古屋市教育委員会編 1985「鳴海座寺発掘調査概要報告書」名古屋市教育委員会
34. 伊藤正人編 1991「鳴海城跡・城遺跡 発掘調査の概要」名古屋市教育委員会

第2節 清水寺遺跡6次調査出土の壁土について

SD601の中央部の中位より下層では、中層に廃棄された陶磁器の下位より壁土と思われる遺物が面的に出土した。大きく2ヶ所に分かれ、北側が長軸3.7m・短軸2.7m、南側が長軸1.8m・短軸0.5mの楕円形状を呈す。溝の西側に偏っており、廃棄方向を示しているものと思われる。その他、特に溝の南端近くで壁土に混じって拳大の円礫も打ち捨てられていた。煤などの付着は確認されなかったものの、その大部分が2次の被熱を受けており、表面が磨石の使用痕のように磨耗しているものや打ち欠かれているものもあった。石材は砂岩がほとんどである。今回は詳細な観察や図化は行なわなかったものの関連性は深いと考えている。

当初は、隣接している第2次調査の清水寺南区で铸造関連遺構が確認されていることから焼土や铸造関連の遺物の可能性を考えていたが、面をなし、ある程度の大きさの塊となることから壁土と判断した。大きめの土囊袋2～3袋をサンプルとして回収し、現場に大部分は残置した。類似する遺物は、県内の事例として、以下の1～3を挙げる。

- 1：西尾市（旧吉良町）の寄名山遺跡（2008）：10世紀前半の掘立柱建物や堆積層からの焼土塊を平地式建物の二次的に被熱した壁土（報告分で4～18cmサイズ）としている
- 2：安城市の木戸城遺跡（2003）：15世紀後半の土坑や溝から壁土状焼土塊が出土しており、二次的に被熱した壁土（拳大～4cm大サイズ）としている
- 3：豊田市の大平本城（2015）：15世紀末～16世紀前半の土坑から壁土の可能性を持つ焼土塊 県外の事例として、中部地方では
- 4：石川県七尾市の七尾城跡（2024）：14世紀末～15世紀末の土坑から火を受けた壁土の残骸が挙げられる。また、本書収録の貞養院遺跡第2次調査についても出土例があり、16世紀初頭の土坑から同様の壁土を2点確認している。詳細については本書記載を参照されたい。

本遺跡で出土したのも以下の事由から壁土と考えられる。いずれも肉眼観察に留まるものの、粘土に混入させられた植物性材料（スサ）の入っていた空隙（スサ痕）が見受けられること、部分的に平坦面や段差面が認められ、壁の下地として木材を格子状に組み込んだ木舞の痕跡の可能性が有る。木舞の下地という点と現在の昔ながらの土壁作りの工法のように、細長く割りやすい竹を割って編まれていたと考えがちであるが、古代は木の小割材のみを使用し、中世に入ってから少しずつ竹の使用が始まったものの、木の割材や枝、細い幹が使用されていたようである。今回出土した壁土については、直線状の段差面が多く観察され、それを木舞の痕跡と考えている。竹や幹に宛がった様な円柱状の痕跡は認められなかった。

また、スサ痕の径については、概ね1～3mm程度で、方向は規則性は特に無かった。細かく切った藁のような細い植物を粘土に混ぜこむことで粘性を高めたと考えられる。その他、炭化物やチャートを主体とした石材も混和剤として混ぜられているものもある。なお、他の出土例では焼土塊としているが、二次的な被熱については積極的に観察できたものは少ない。

上記のような壁土や焼土塊の報告例は少なく、判断材料に乏しい部分もある。自然科学分析の分野からもスサ痕周辺の土を用いたプラント・オパール分析によってスサに用いられた植物の種類を同定したり、中世以降に壁土の表面仕上げとして使用が多くなったとされる石灰（石灰岩由来のもの）と貝殻を焼いた貝

灰由来のものがある)分に関する分析をおこなうことで用途が判明する可能性についても、遺物調査の方法として、今後考えていきたい。共存した石材についても、今回は詳細な検討をできなかったが、中世の合戦時の石飛礫を用いた石合戦に使用するにはあまりにも大きく重く用をなさぬことから、2次の被熱の部分も考えて検討する必要がある。(樋田)



写真1 木戸城遺跡出土焼土塊



写真2 大平本城遺跡出土焼土塊



写真3 寄名山遺跡出土焼土塊



写真4 清水寺遺跡出土壁土

〈参考文献〉

- ・池本正明ほか 2003「木戸城遺跡」『木戸城遺跡・古新田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第111集 愛知県埋蔵文化財センター
- ・池本正明 2015『大平本城』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第201集 愛知県埋蔵文化財センター
- ・三田敦司ほか 2008『寄名山遺跡発掘調査報告書』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 吉良町教育委員会
- ・樋田邦雄・バリノ・サーヴェイ(株)2024『七尾市 七尾城跡VI』一般国道470号 能越自動車道 七尾米見道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県埋蔵文化財センター
- ・山田幸一 1981『壁』もと人間文化史 45 法政大学出版局

※木戸城遺跡・大平本城出土の焼土塊および写真については、愛知県埋蔵文化財センター所蔵、寄名山遺跡出土の焼土塊および写真については、西尾市教育委員会所蔵資料であり、本報告書にご提供いただいた。

第3節 絵図・地籍図との比較

●『信長公記』にみえる桶狭間の戦い前夜の丹下砦の記述について

第1章第2節でも述べた通り、清水寺遺跡には中世～近世には丹下砦と鳴海陣屋が構築され、東海道も通っており、重要な地であったことは想像に難くない。

丹下砦の周辺については、織田信長の家臣・太田信定(半一)の著した『信長公記』の首巻で桶狭間の戦い前の記事を以下のように取上げている。なお、同書は写本が複数存在していることが知られるが、出典とした翻刻・現代語訳ともにもっとも知られている陽明文庫本を底本としている。

・翻刻(原文ママ)

天文式貳年癸丑四月十七日、織田上総介信長十九の御年の事に候。
鳴海の城主山口左馬助・子息九郎二郎、廿年、父子、織田備後守殿目を懸けられ候処、御選化候へば程なく謀反を企て、駿河衆を引入れ、尾州の内へ亂入。沙汰の限りの次第なり。

一、鳴海の城には子息山口九郎四郎を入置き、
一、笠寺へ取手・要害を構へ、かづら山・岡部五郎兵衛・三浦左馬助・飯尾豊前守・浅井小四郎、五人在城なり。

一、中村の在所を拵、父山口左馬助桶籠。

か様に候処、四月十七日、
一、織田上総介信長十九の御年、人数八百ばかりにて御発足、中根村をかかけ通り、小鳴海へ移られ、三の山へ御あがり候の処、

一、御敵山口九郎二郎廿年の、三の山の十五町東、なるみより北赤塚の郷へはなるみより十五・六町あり。九郎二郎人数千五百ばかりにて赤塚へかけ出し候。

先手あし程、

清水又十郎・栢植宗十郎・中村与八郎・萩原助十郎・成田弥六・成田助四郎・芝山甚太郎・中嶋又二郎・祖父久介・横江孫八・荒川又蔵。これらを先陣として赤塚へ攻め寄せた。

是等を先としてあかつかへうつり候。

一、上総介信長、三の山より此よしを御覧じ、則、あか塚へ御人数よせられ候。
御さき手あしがる勢、
あら川与十郎・あら川喜右衛門・蜂屋般若介・長谷川抜介・内藤勝介・青山藤六・戸田宗二郎・賀藤助丞、
(以下略)

御国の内へ義元引つけられ候の間、大事と御胸中に籠り候と聞へ申候なり。

一、鳴海の城、南は黒末の川とて入海、塩の差引き城下迄こけあり。東へ谷合打て続き、西又深田なり。此より東へは山つなぎなり。城より廿町隔て、たんけと云ふ古屋しきあり。是を御取出にかまへられ、水野帯刀・山口さびの丞・栢植玄蕃頭・真木与十郎・真木宗十郎・伴十左衛門尉、東に善照寺とて古跡こけあり。御要書候て、佐久間右衛門・御弟左京助をかせられ、南中嶋とて小村あり。御取出になされ、梶川平左衛門をかせられ、

一、黒末入海の向ひに、なるみ・だだか、間を取切り、御取出二ヶ所御せ付けられ、

一、丸根山には佐久間大学をかせられ、

一、鷲津山には織田玄蕃・飯尾近江守父子入れをかせられ候事

太田半一・著 奥野高広・岩沢照彦・校注 1969『信長公記』角川書店

これによると(『鳴海』城より廿町隔て、たんけと云ふ古屋しきあり。是を御取出にかまへられ(以下略))という記述が「たんけ」「取手」(以降、丹下砦とする)の初出と考えられる。丹下砦築城前には「古屋しき」(以降、古屋敷とする)があり、それを転用したものであろう。戦国時代、かつてあった城や砦を再利用して合戦に備えることはよくある例である。なお、図27には桶狭間の戦いの丹下砦周辺の地図を示した。

・現代語訳

10 三の山・赤塚の合戦

[天文21(1552)年] 4月17日、織田信長19歳の年のことである。

鳴海の城主山口教兼、息子教吉20歳。この父子は織田信秀が目をかけていたのだが、信秀が死ぬと間もなく謀反を企て、駿河勢を手引きして尾張の領内に侵入させた。けしからぬ仕打ちである。

山口教兼は、鳴海の城には息子教吉を入れておき、笠寺に砦・要害を造り、葛山長嘉・岡部元信・三浦義盛・飯尾頼茲・浅井小四郎の5人を配備した。山口教兼は、中村の在所を合戦に耐えるように改造し、立て籠もった。

このような情勢の時、4月17日、織田信長は19歳、軍勢800ばかりで出陣、中根村を駆け抜け、小鳴海へ進み、三の山へ登った。

敵山口教吉は20歳、三の山の15町(約1.6km)東、鳴海から15・6北の赤塚へ、軍勢1,500ばかりで出陣した。先陣は足軽、清水又十郎・栢植宗十郎・中村与八郎・萩原助十郎・成田弥六・成田助四郎・芝山甚太郎・中嶋又二郎・祖父久介・横江孫八・荒川又蔵。これらを先陣として赤塚へ攻め寄せた。

信長は三の山からの状況を見て、ただちに赤塚へ軍勢を出撃させた。先陣は足軽衆、荒川与十郎・荒川喜右衛門・蜂屋般若介・長谷川橋介・内藤勝介・青山藤六・戸田宗二郎・賀藤助丞。
(以下略)

35 鳴海城を包囲して砦を築く

尾張の国のなかに今川義元の軍勢が侵入してきたので、信長は、「これは大事になるぞ」と胸中深く覚悟をしたというところである。

駿河勢が占領している鳴海の城は、南側は黒末川(天白川支流・扇川)というが、川というより入り海で、潮の干満は城の足元にまで及ぶ。城の東は谷が続き、西はまた泥深い田である。北から東へかけては山続きである。

城から二十町(約2.2km)離れて、丹下という古屋敷がある。信長はこれを砦として整備し、水野帯刀・山口守孝・栢植玄蕃頭・真木与十郎・真木宗十郎・伴十左衛門尉を配備した。東に善照寺という旧跡がある。これを要害に造って、佐久間信盛・弟直直を置いた。南に中嶋という小さな村がある。これを砦にして、梶川高秀を置いた。黒末の入り海の向こうに、鳴海・大高両城の間を遮断するため砦を二カ所築き、丸根山には佐久間盛重を置き、鷲津山には織田秀敏と飯尾定宗父子を入れた。

太田半一・著 中川大古・訳 2020『地図と読む 現代語訳 信長公記』株式会社KADOKAWA
(※)実際の現地の距離は約600m

●丹下砦以前の古屋敷について

過去の発掘調査結果の遺物の年代より古屋敷は1400～1500年前後に稼働していたと推定されている。桶狭間の戦いは1560年で、丹下砦は鳴海城に対する付城として1559年に築城された。1551年に信長の父・織田信秀が亡くなった翌年、信長に反旗を翻した鳴海城主山口左馬助(教継)・九郎二郎(教吉)父子を討討する目的で三の山・赤塚の合戦は発生した。古屋敷の主人や廃絶時期は不明であるが、廃絶は1500年前後であろうか。古屋敷を構成する遺構について主なものは以下の通りである。

1 屋敷の区画溝の用途か。

表 17 屋敷の区画溝の可能性のある遺構一覧

調査次	遺構名	規模	断面形状	出土遺物	備考
第1次	SD104	上端1.4m、底幅0.6m、深さ1.5m	台	多量の羽釜・銅・常滑焼費・かわらけ、炭化物・灰土、幅口片か	L字状に曲がる
第6次	SD601	上端1.1m、底幅0.6～0.7m、深さ0.8～0.9m	台	多量の羽釜・銅・常滑焼費・かわらけ、壁土、焼けた石	調査区内で溝は途切れている。

2 屋敷や砦の堀の用途か。

表 18 屋敷や砦の堀の可能性のある遺構一覧

調査次	遺構名	規模	断面形状	出土遺物	備考
1978	SD001	横出長8m・幅2m・深さ1m	不明	土器類	南北方向、溝の東端は崖面で終了
1978	SD002	不明	不明	不明	SD001のすぐそば。一部分の調査
第2次	SD208	上端2.3m、深さ不明	不明	不明	
第2次	SD211	上端3m、深さ1.2m	V字	古瀬戸・山茶碗・土師器・古銭、多量の焼土等	北側でやや新しい時期のSD212を重複して確認
第2次	SD213	上端2.3m、深さ1.2m	不明	古瀬戸費・古瀬戸	
第3次	SD313	上端2m、深さ1.5m	不明	不明	SD213より新しいか
第4次	SD1	上端3.5m、深さ2.0m以上	不明	羽釜・常滑費	
第5次	SD7	上端2.5～3.0m、深さ0.8m	不明	山茶碗、漆鉢、常滑費、香炉、重瀬皿、銅・羽釜	

この他に第5次調査で井戸が2基(SK25・SK27)確認されている。事例が比較的標高の高い地区のものに偏っているが、大型の遺構が多い1次～3次、6次地点が古屋敷の中核部に近いと思われる。

また、これらの溝の方向も概ね北西・南東方向、北東・南西方向と軸線が統一されていることや、人為的に埋められた溝が多いことも注目すべき点である。

15世紀末～16世紀初めの尾張国内の状況を見ると、応仁の乱後に守護の斯波氏の権力が低下し、守護代家では上半国四郡を岩倉城の織田伊勢守家と下半国四郡を清須城の織田大和守家が争う時代である。対外戦争では1495(明応4)年隣国美濃の主権をめぐる斎藤利国(持足院妙純)と石丸利光の船田合戦で岩倉・清須方もそれぞれ参戦し、また、同じころ、斯波氏は遠江国の守護権をめぐって今川氏と合戦を繰り返すなどしている。また、尾張国内では、1513(永正10)年守護斯波義隆が守護代に当たる大和守家の惣領の達定を殺害するなど不安定な時代であった。

この時代背景を考えると、屋敷地としての利用が終わったものの、すぐの再利用をされたくない事情があって埋め立てた可能性も考えられよう。この当時の国衆や地侍に関する文書典籍などの研究が進めば、明確になるかもしれない。

●三王山遺跡の中世遺構

先に挙げた『信長公記』のなかで、三の山・赤塚の合戦で信長が三の山に登り、その東側にあたる赤塚に敵勢が出陣したのを見て、同じく赤塚へ敵兵を討つために家来を出陣させたくだりがある。図27に周辺的位置関係を示した(東海道は江戸時代以降に整備されているが主要な道路を踏襲した可能性がある)。三の山は現在の三王山遺跡に該当すると考えられる。また、地元には「三王山砦」の存在を示唆するよう

な伝承もある(村木・服部ほか(1999))。

三王山遺跡は、清水寺遺跡の北側300mの標高25mの地点に所在し、弥生時代後期(山中式)から古墳時代(松河戸式~宇田式)を主体とする遺跡として知られているが、15世紀の溝や柱穴列が見つかっているほか、遺跡の北部では城郭の「切岸」遺構と同種と考えられる人工的な平坦面を設けるための作事(地業)が行なわれたことも推定されている。

確認された主な溝は以下のとおりである。

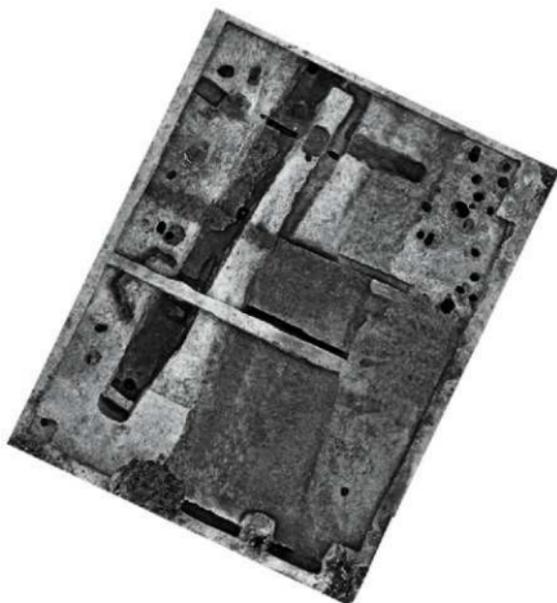
いずれの遺構についても再整理を経たのちに見解が変わる可能性は残るが、今回のSD601と同じような年代である。15世紀後半に清水寺遺跡と三王山遺跡は城館類似施設があり、桶狭間の戦いの行なわれた1560年前後に改めて特として造り直された可能性が考えられよう。(樋田)

表19 三王山遺跡で確認された中世の溝一覧

調査次	遺構名	規模	断面形状	出土遺物	備考
第4次	4SD22	上端1.2~1.9m、深さ0.75m	台形	常滑甕、古瀬戸天目茶碗、土師器皿、内耳銅、加工内盤、中国磁器	N-14° E 15世紀後半
第4次	4SD24	上端3.3~4.5m、深さ1.6m	台形	常滑甕、古瀬戸天目茶碗、漆鉢、土師器皿、内耳銅、加工内盤、中国磁器 ・第5次調査5SD04、15世紀後半~17世紀前半?(溝が埋没した後に再掘削か)	N-16° E 15世紀後半~16世紀前半
第5次	5SD04	上端1.0~1.9m、深さ0.45~0.7m	台形	常滑甕、古瀬戸陶器皿、漆鉢、近世陶器	15世紀後半~17世紀前半? (溝が埋没した後に再掘削か)

〔参考文献〕

・村木誠・服部哲也ほか1999『三王山遺跡』埋蔵文化財調査報告書30 名古屋市教育委員会



清水寺遺跡第6次調査 オルソフォト全体写真

(上が北を示す。Agisoft社製 Metashapeを使用して作成)

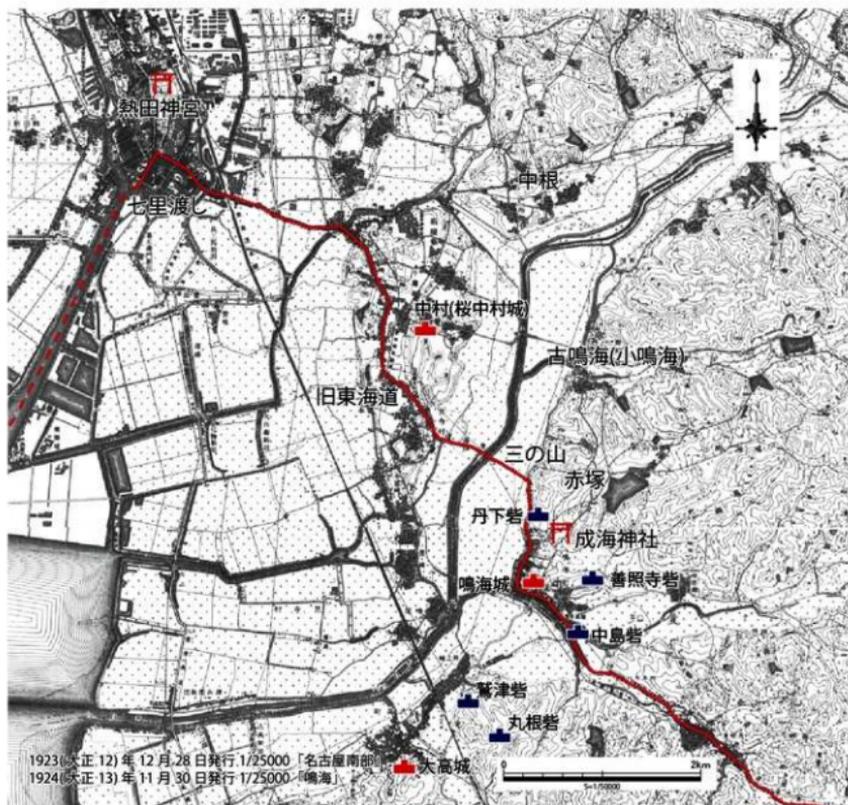


図27 桶狭間周辺の城館と地名

●絵図と地籍図に見る丹下砦周辺の状況

名古屋市の尾張徳川家の旧蔵書を中心に古典籍類を所蔵している蓬左文庫には、『本地鳴海古城跡之図』と呼ばれる江戸時代に作成された絵図がある(図28上)。ここでは、鳴海城や丹下砦が示されており、丹下砦部分を拡大し、翻刻とともに示した(図28下)。

絵図の他に明治時代に作成された地籍図(地籍字分全圖)も提示する。県公文書館と役所に保管されている地籍図は、1884(明治17)～1888(明治22)年に全国村単位で作成され、村界・字界・字名・一筆毎の土地区画形状や地目を示したものである。丹下砦周辺は愛知県鳴海村に該当する(図29)。赤線部分は道を示し、一段太い部分は東海道である。右下のひと際大きい北東-南西方向の薄い桃色部分は式内社とされる成海神社の境内地である。中央や右下寄りの濃い桃色部分は清水寺遺跡内に所在する光明寺である。丹下砦の位置は東海道以東で、鳴海神社の北西、光明寺も含んだ一帯であると考えられている。

これまでに丹下砦の曲輪や堀の位置・規模を想定した研究が複数あり、愛知県教育委員会(1991)の分

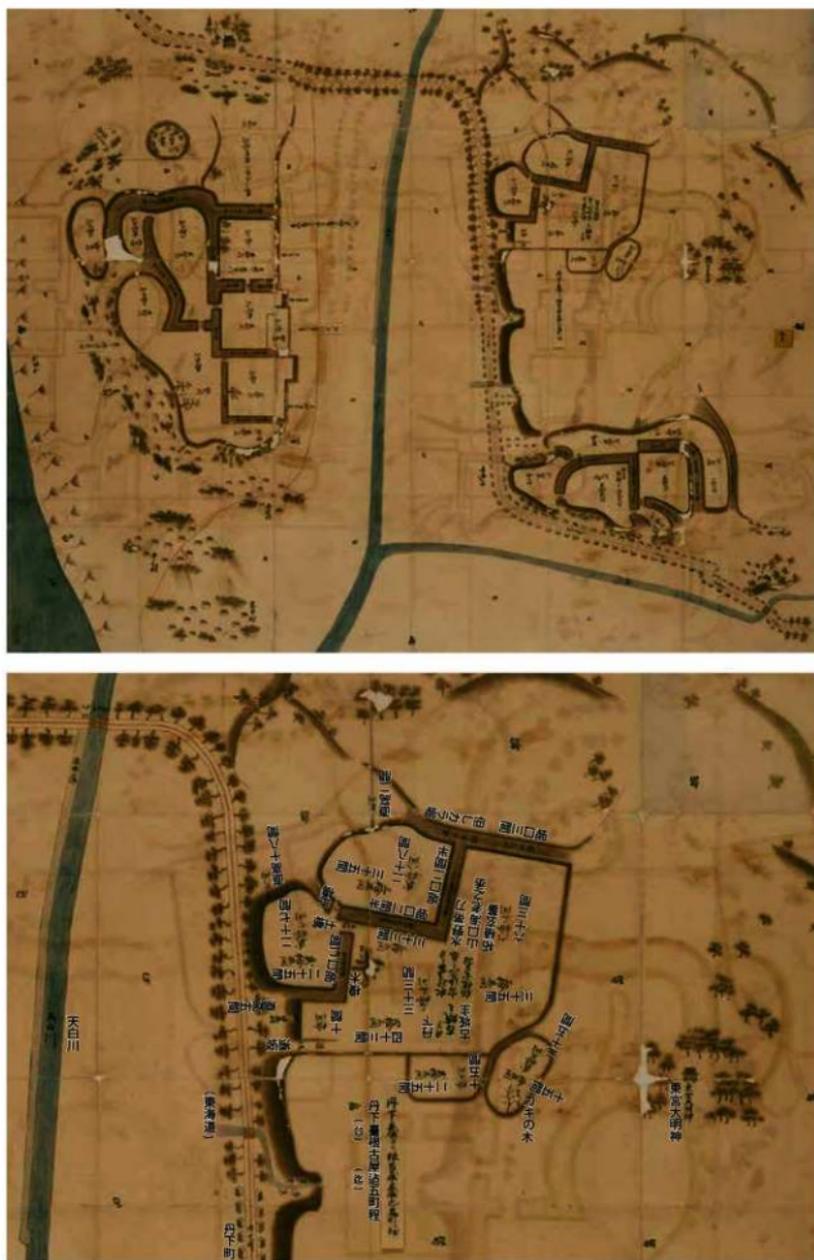


図28 本地鳴海古城跡之図

(上段：全体図、下段：丹下帯拡大部分に加筆)
(僅左文庫所載)

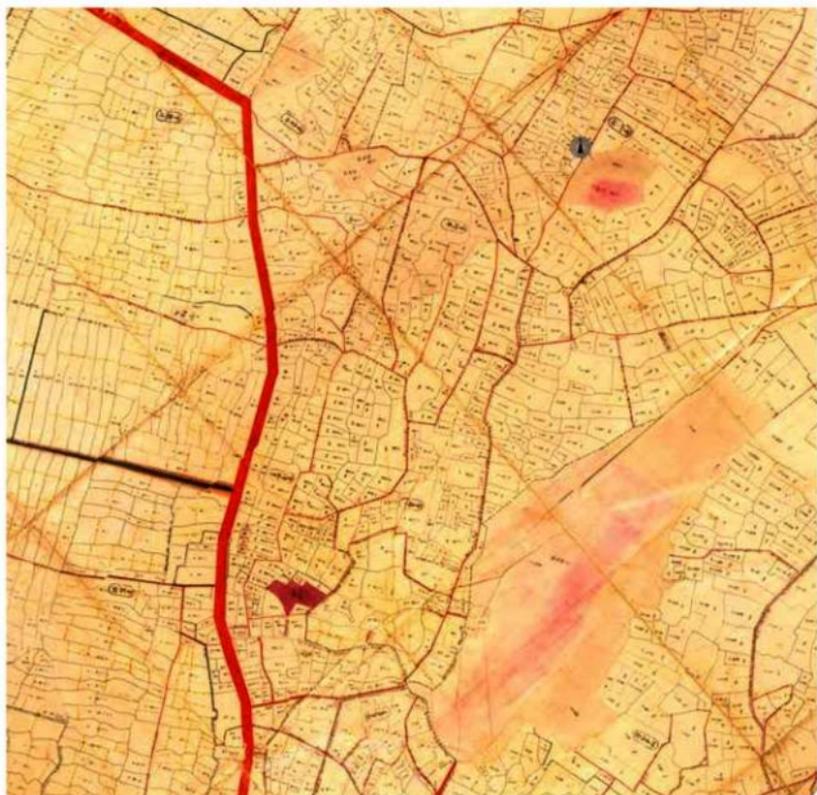


図29 地籍字分全圖(尾張國愛知郡鳴海村)部分

(愛知県公文書館所蔵)



図30 愛知県教委(1991)による丹下砦の推定位置



図31 高田(2000)による丹下砦の推定位置

布調査などにより作成された地籍図を用いた復元図(図30)、高田徹氏(2000)の発掘調査結果・地籍図・絵図を用いた復元図(図31)がある。

県教委の図と図1の地形図を対比すると、主に地形上の高まりになっている部分を主体として単郭の砦の範囲を設定したと思われる、南北に長い城域を示す。その外郭部分にあたる土地区画のうち短冊状になっている部分を主に堀(網掛け部分)とし、城の南端は△印で示した光明寺を包含する。

高田氏の図は、清水寺遺跡の第2次調査で確認された大溝(図2のSD211・SD212)に着目し、砦の溝と想定している。その上で先ほど示した絵図(図28)を使って対比検討している。絵図には規模を「間」で示しており、高田氏は中世末期の寸法に合わせ、1間=6尺5寸(1.97m)¹⁾とし、北東の曲輪が「主郭」で「周囲を土塁で囲んだ東西約七十m、南北約五五mの規模」「北側は谷」「残る三方を幅五mの堀」で囲む。南西隅に虎口を置き、土橋で南側の「Ⅱ郭」と連絡し、Ⅱ郭は規模が「東西約五十m、南北約五五mの曲輪」で「主郭を除く、三方に土塁を巡らし、北東隅に土橋を設け、外郭部に連絡する」。「外郭部は東西約百五十m、南北約百二十mの規模で、北側を堀と土塁で、西側を高差と土塁で画し、南側と西側を切岸もしくは斜面によって防壁していたとみられる」と記している。他に南東部に「半独立的な曲輪」が2つあった、と推察している。そのうえでSD211・SD212を「Ⅱ郭の南側の堀に相当する」と見解を述べている。図30が南北に長い単郭に対し、高田氏の案は主郭・Ⅱ郭・外郭部の3つで方形居館を指向するような形状である。

既往の調査については第1章で既に触れたが、現在の知見では15世紀前後を示す溝が多いことや、『信長公記』から15世紀中頃に古屋敷を造り直して丹下砦を構築したことは前述のとおりである。ただし、発掘調査時の記録についても不十分な情報であり、遺物の実測図の提示や記録類から溝の後世の掘り直しなどの検討も含めた再検証が必要である。本報告では、遺構から丹下砦の推定復元は難しいと考え、必要最低限の作業として、地籍図に示された道や水路と、今現在の地図の道や水路を極力合わせつつ、地目を色分けしたものを示した(図32)。背景図は三王山遺跡周辺も入れてある。地目については、田と畑、河川などの違いについて着目をしつつ、地割の反映までには至らなかったが、畑が主を占めることが分かる。また、地籍図の精度の問題と、既往調査のうち第1次～第3次調査の平面記録の基準グリッドは4m単位で設定しているが、当時の基本測地系に照らした正確な位置が同定できない問題から多少のズレが発生していることをご容赦いただきたい。

また、図32と清水寺遺跡の遺構位置図(図3・図4)を見比べると、地籍図の道路と平行に走る場所が散見される。1次調査SD104、2次・3次調査SD208である。これらを具体的に結びつけることは現状できないが、多少でも丹下砦の復元の端緒になれば幸いである。

(樋田)

1: 千田(1998)では1間=6尺(1.81m)で計算されている。

〔参考文献〕

・愛知県教育委員会編 1991「051-01 丹下城(丹下砦)」『愛知県中世城跡調査報告1(尾張地区)』愛知県教育委員会
 ・千田卓博 1998「第6章戦国の争乱と尾張 第5節 城館が語る戦国の名古屋」『新修名古屋史 第2巻』名古屋
 ・高田徹 2000「桶狭間合戦時の織田氏陣城」『中世城郭研究 第14号』中世城郭研究会



調査区全景 (北西から)



SK603 出土状況



SD601・602



SB605 かまど



SD601 主要出土遺物



SK601 主要出土遺物



SK603 主要出土遺物



SB601 - 604(北東から)



SB602(北西から)



SB602 出土状況



SK601 出土状況



SK602(東から)



SD601 遺物出土状況(北から)

SD601 掘削完了状況(北から)



SD601 各地点出土状況



SD602・603(北から)



SD603(南から)



SK603 出土状況(南西から)



SK603 出土状況(東から)



調査区北東部の
ピット群 (北東から)



ピット群 (近景) と
調査区北壁断面



SD601・602
と調査区北壁断面



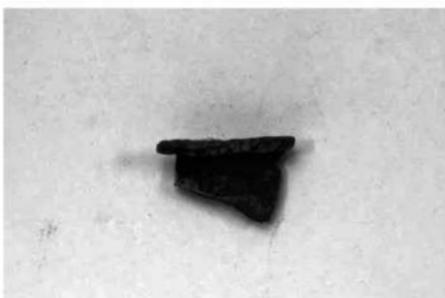
1



2



3



4



5



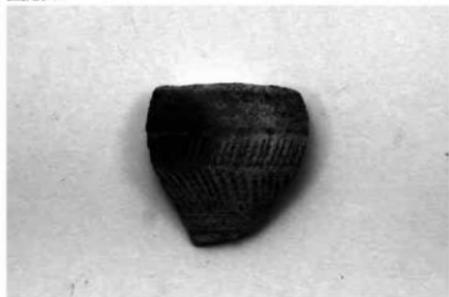
6



7



8



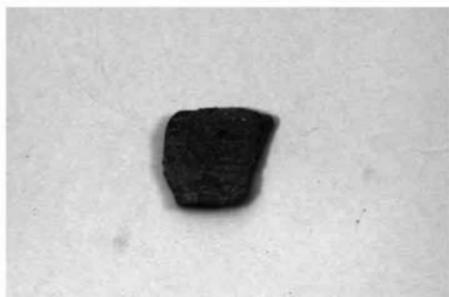
9



10



11



12



13



14



15



15 底面



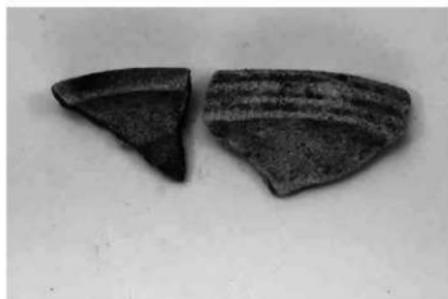
16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



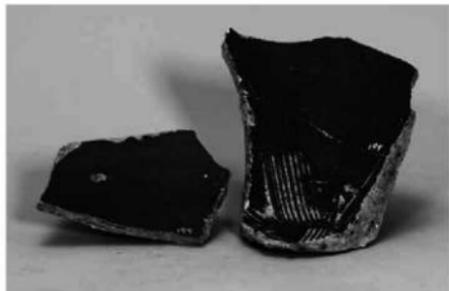
56



57



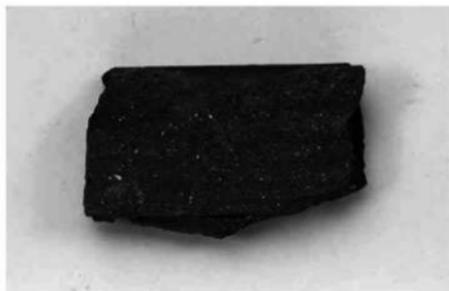
58



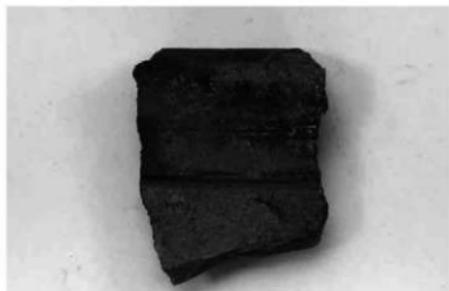
59



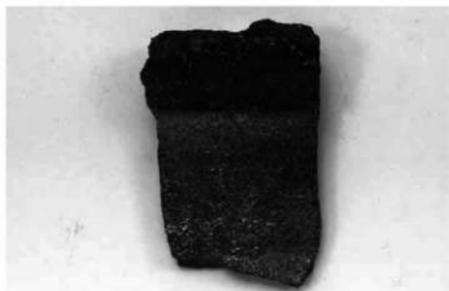
60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



83



84



85



86



87



88



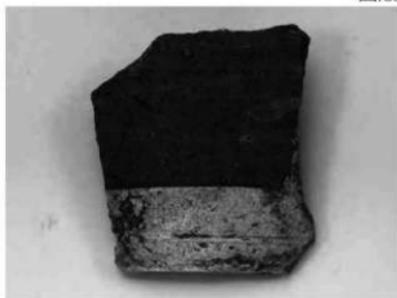
89



90



91



92



93



94



95



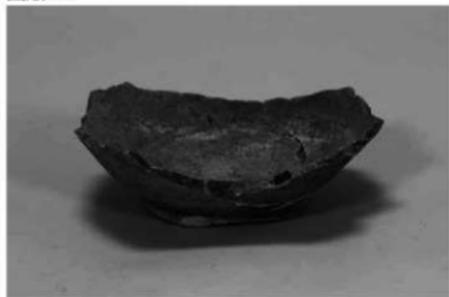
96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



青磁 坏 (SD603 85 グリッド上～中層)

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	貞養院遺跡(第2次) 清水寺遺跡(第6次)							
巻次	103							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	120							
編著者名	榎田泰之(編著)・花木ゆき乃・杉浦裕幸							
編集機関	名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課							
所在地	〒461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目1番4号 Tel:052-253-9279 Fax:052-972-9217							
発行機関	名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課							
所在地	〒461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目1番4号 Tel:052-253-9279 Fax:052-972-9217							
発行年月日	西暦2025年(令和7年)3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
貞養院遺跡	名古屋市西区福下一丁目1021番5	23100	3-18	35°10'53"	136°53'29"	2024年7月5日～ 2024年7月19日	51.04	個人住宅 建設
清水寺遺跡	名古屋市緑区鳴海町 あまがしづき 字清水寺35、36	23100	14-87	35°05'14"	136°57'02"	2023年4月27日～ 2023年6月2日	140	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
貞養院遺跡	散布地	江戸		土坑		瀬戸・美濃登窯製 品、鉄滓	第2次調査	
要約	調査地点は、江戸時代の町人地にあたる。確認された遺構は少ないものの、江戸時代初期の陶器を中心に碗・皿類や鉢類など当時の生活に関する遺物が多く出土した。							
清水寺遺跡	貝塚・城館跡 ・散布地	弥生・ 中世～近世		竪穴建物、土坑、溝		弥生土器、山茶碗、 古瀬戸・常滑製品、 土師器煮沸具	第6次調査	
要約	2次調査のうち清水寺北区の西側、3次調査の北側に位置する。弥生時代後期の高蔵式を主体とした弥生土器が竪穴建物や鹿糞土坑で出土したほか、溝内より中世末の古瀬戸・常滑の陶器や鹿土が出土し、丹下砦築城以前の「こやしき」時代のもと考えられる。							

名古屋市文化財調査報告 120
埋蔵文化財調査報告書 103

貞養院遺跡 (第 2 次)

清水寺遺跡 (第 6 次)

2025 年 3 月 31 日発行

発行 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課
〒 461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目 1 番 4 号
Tel : 052-253-9279

印刷 岡村印刷工業株式会社